



* 0020462000 *



0020462-000

791-27

入門経済学

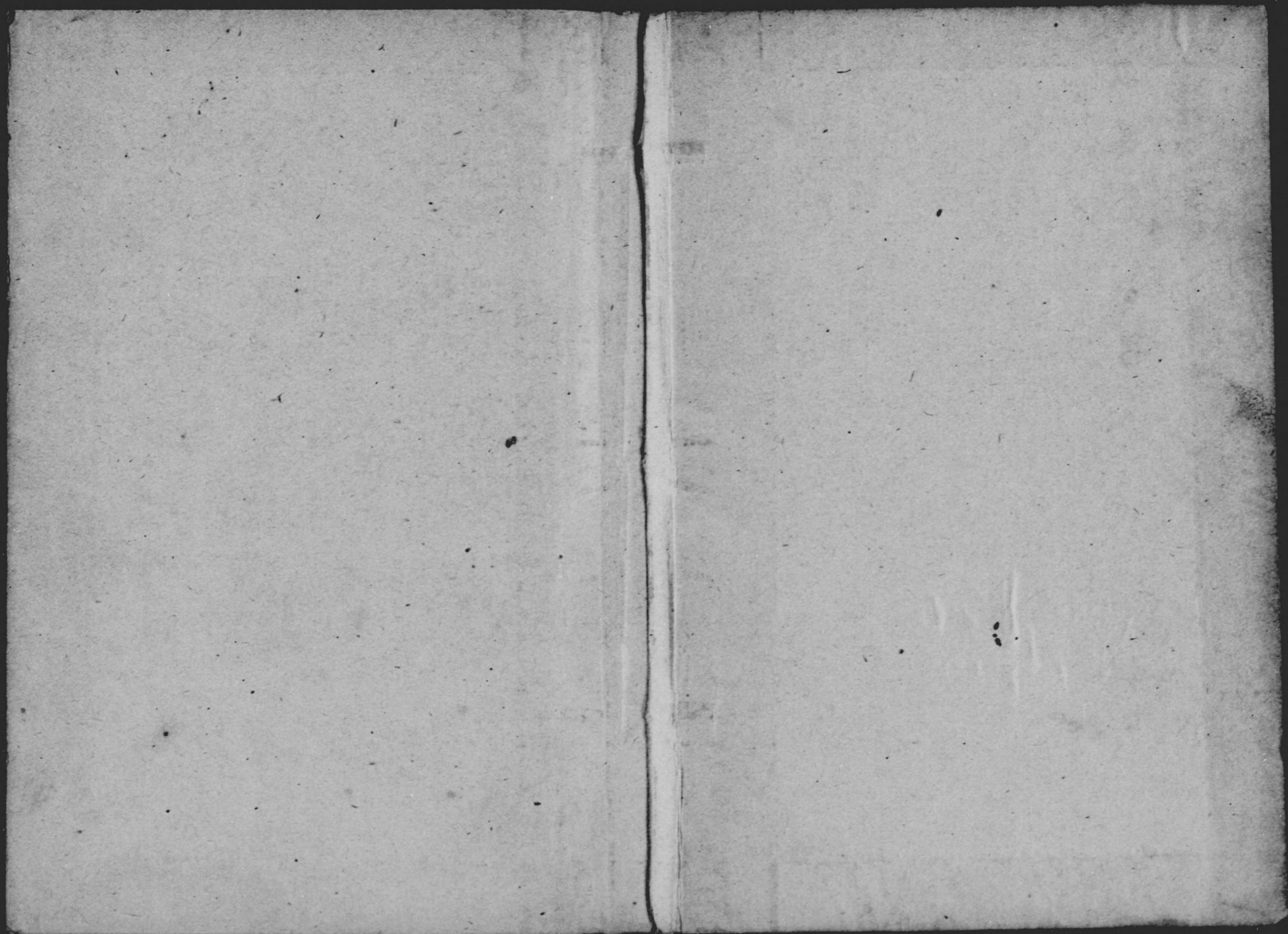
ダイヤモンド社

第2

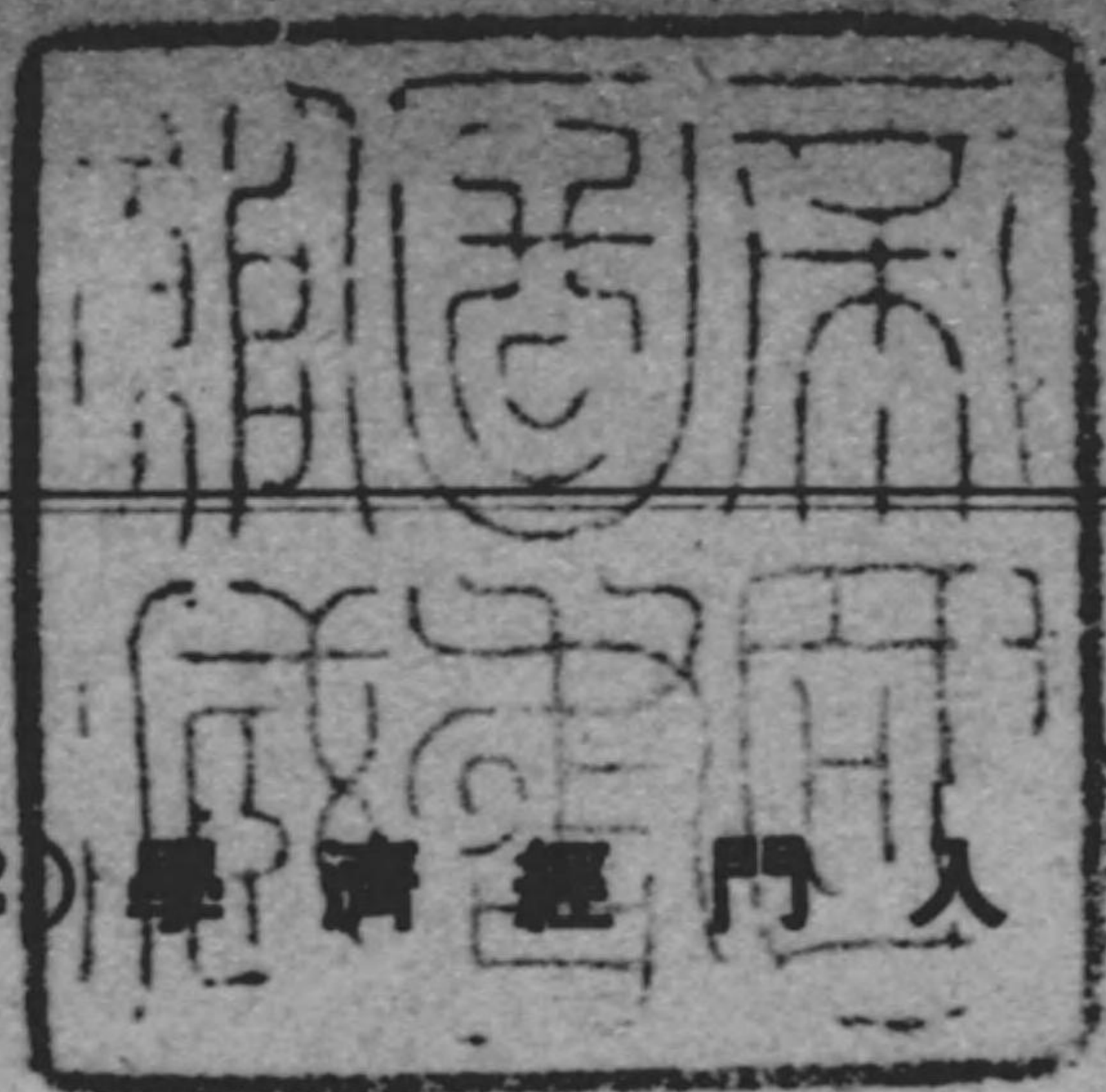
昭15

ADB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです



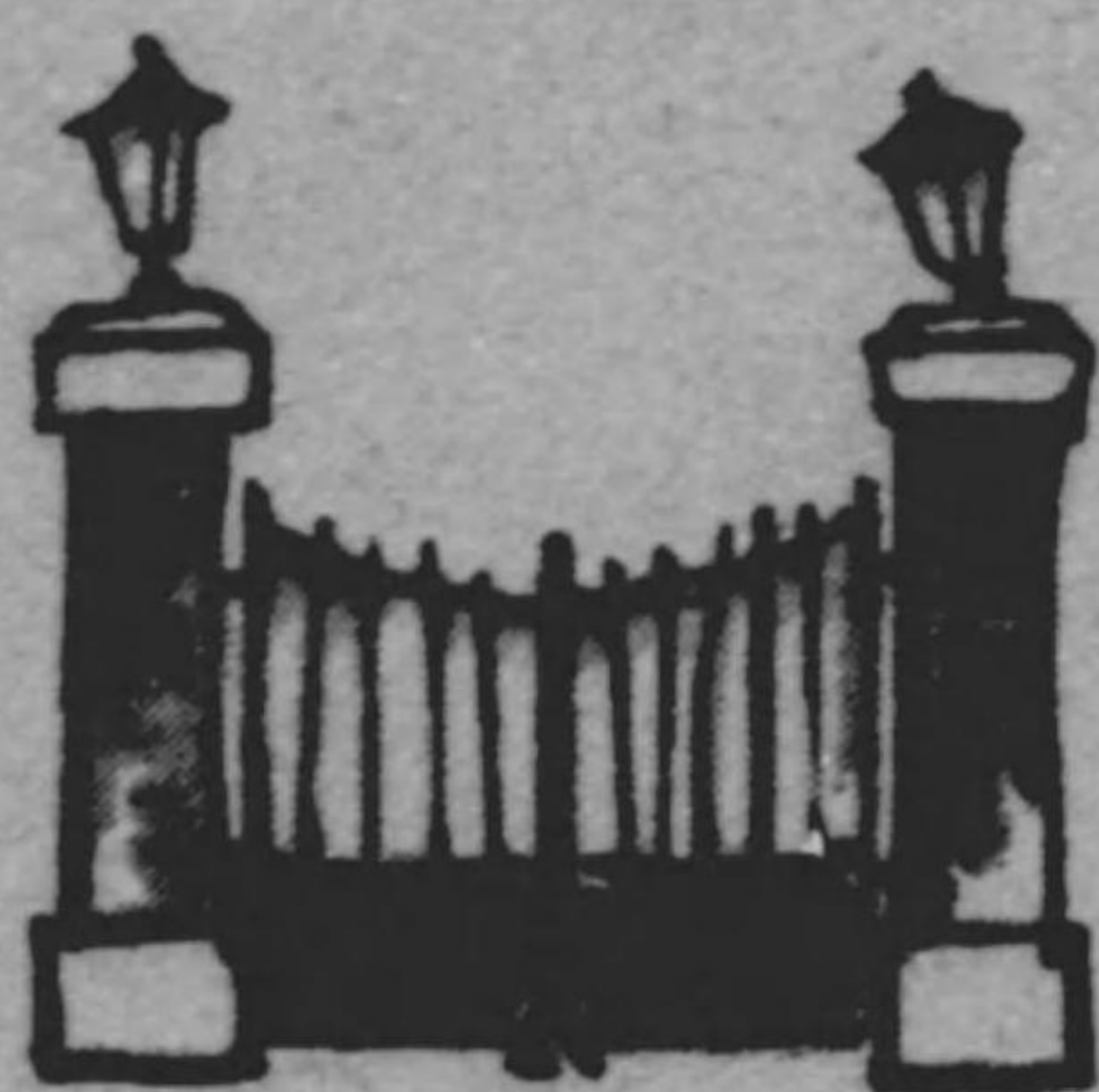
146



(2) 學 濟 經 門 入

史 學 濟 經

著 征 沼 田



版 社 ド ン モ ヤ イ タ



序

麗らかな元旦である。

武蔵野に近いこの城北の高臺では、硝子戸越しに、書齋に降る日光が、まるで春だ。凜烈たる寒さの中で、十枚書いては寝、五枚綴つては疲れて仰向いてゐた去年の秋から暮へかけてのことを考へると、ペンの運びも、なにかしら伸びやかである。

わたくしは、今、入門経済學の第二卷「經濟學史」の稿を終つたところである。

飽くまでも初學者の手引となり、それでゐて、全般的な知識を盛つて誤りなく、一通り斯學に素養がある人に読んでいたゞいても、なるほど、合點されるやうなものを書くことは、大家鴻儒と雖も至難である。その仕事を、大膽に、わたくしも一部分受持つて、この「經濟學史」を書きつゞけて來たわけだ。

わたくしは、讀物としても、飽かれないやうに心懸けた。一章づゝにも、それぞれ、まとまりをつけるために苦心した。出て来る學者の生立ちや、境遇、逸話のやうなものにも、冗長に過ぎない程度には、觸れておいた。

同時に、基礎知識を提供する意味で、正確を期したことは勿論だが、全體として、一つのまとまりを持つて「經濟學史」が、讀者の頭の中へ入つて行くやうに努力した。それがためには、學說主張を、どこまでも、それが生れた時代的な背景や環境と、密接させ、時代の流れの上を流れさせて、説いたつもりである。

學史が單なる古いドキュメントの寄せ集めに終つてはならないために、系統と綜合と、史的、近代的のことや、現代の思潮にまで亘つた。従來の經濟學史とは、それらの點で、多少の相違があらうかと思ふ。

社會主義的な經濟學説については、紙幅の関係もあり、本書の狙ふ讀者層との関係もあつて、割愛した。

書物を一冊書く毎に思ふのであるが、わたくしの郷里の氏神は、天神様である。

天神様は文章道の神とあがめられる。わたくしの母は、わたくしに傳つて、昔から、天神様を信仰してくれてゐる。どうぞして、わたくしも、萬人の胸を打つやうな文章が書き度いものだ。

一昨年暮、京都の北野天滿宮に參拜して、御神籤をいたゞいた。第二十一番吉とあつて、

御詩句……無限恩涯知止足

わたくしは、今でも、肌身はなさず、それを持つてゐる。時おり、出しては讀む。思へば、わたくしほど、師、先輩、友人、母親などから、無限の恩涯を受けて來た者はない。本書の執筆に當つては、先輩濱田恒一氏から一方ならぬ御世話になつた。この頃は、しきりに、讀者の恩を想ふ。あちらこちら、書いたものを發表してゐると、未知の讀者から、少からぬ音信をいたゞく。自愛を祈る……と、云はれると、餘り健康でないわたくしは、涙ぐんでしまふ。

序

身體を注意し、勉強しつづけてゆきたいと思ふ。

紀元二千六百年の元旦に

田 沼 征

四

經濟學史 目次

第一章 經濟學史の意義と必要

- 一 經濟學史とは？……………三
- 二 經濟學理解の歴史的手段……………五
- 三 學史を學ぶ實益……………六
- 四 經濟學史の出發點……………七

第二章 經濟學の誕生

- 一 時代と思想……………一〇
- 二 經濟學の誕生……………一三
- 三 經濟學の父アダム・スミス……………一五
- 四 國富論の時代的背景……………一六

目次

五 見へざる手……………二七

六 國富論のあらまし……………一九

七 その後に來るもの……………三五

第三章 貧乏の哲學……………二七

一 スミスの後繼者……………二七

二 マルサスの生涯……………二八

三 暗い世相……………二九

四 スピーナム・ランド・システム……………三二

五 貧乏の哲學……………三三

六 ゴドウィンとコンドルセ……………三四

七 人口論の概略……………三六

八 罪惡と道德と……………三九

九 貧乏の是論……………四〇

十 救貧法には反對……………四二

第四章 分配の經濟學……………四三

一 世紀の經濟學者……………四三

二 その振出しは株屋の小僧……………四四

三 大成の境地……………四七

四 分配の經濟學……………四八

五 その價值論……………五〇

六 リカルディアン・ソーシヤリスト……………五一

七 その貨銀論……………五三

八 有名な地代論……………五五

九 地主に有利な結論……………五七

十 リカルドオへの批評……………五九

第五章 彷徨へる經濟學……………六〇

一 父子の散歩……………六〇

二	少年リカルド才學者……………	五
三	テラー夫人……………	六
四	功利主義の標語……………	三
五	理想主義への轉換……………	三
六	ミルの時代と社會……………	四
七	經濟學原理……………	六
八	愛蘭の土地問題……………	六
九	勞賃基金說……………	六
十	生産過剩問題……………	七
十一	ミルの價值論……………	七
十二	「その通り」……………	七
十三	ミルと社會主義……………	七

第六章 セイの經濟思想……………

一	佛蘭西のアダム・スミス……………	七
---	------------------	---

二	セイとナポレオン……………	八
三	目ざましいその時代……………	八
四	セイの學問的傾向……………	八
五	經濟學三分法……………	八
六	生産力問題……………	七
七	その價值論……………	八
八	販路の理論……………	七
九	セイの功績……………	七

第七章 恐慌の經濟學……………

一	時の流れ……………	五
二	正統學派の缺陷……………	六
三	シスモンディ素描……………	六
四	「生産」から「幸福」へ……………	六
五	恐慌論……………	七

六 人口論……………一〇七

七 収入論……………一〇九

八 夢が生む矛盾……………一一〇

第八章 限界効用學派の經濟學……………一一三

一 價值と効用……………一一三

二 効用遞減の法則……………一一六

三 バケツの水……………一二八

四 發見者は誰か？……………一三〇

五 利子時差説……………一三三

六 思想の波……………一三四

七 經濟理論の再建……………一三七

八 その發展と批判……………一三九

第九章 歴史派經濟學……………一四二

一 政治と經濟……………一四二

二 ロマンチカア……………一四五

三 先驅者リスト……………一五六

四 經濟階段説……………一五六

五 育成保護關稅説……………一五八

六 ロツシア……………一六〇

七 ヒルデブラント……………一六三

八 カール・クニース……………一六五

第十章 新歴史派と社會政策學派……………一七〇

一 「舊」から「新」へ……………一七〇

二 見失はれた理論……………一七二

三 倫理の尊重……………一七四

四 ドイツ資本主義の進行……………一七五

五 社會黨鎮壓法案……………一七七

六 スチルナー……………一〇六

七 新歴史派の本領……………一〇三

八 その後に來たもの……………一〇四

第十一章 新抽象經濟學……………一〇一

一 英國の歴史學派……………一〇一

二 「經濟人」と「平均人」……………一〇七

三 「平均人」と經濟理論……………一〇九

四 何故經濟理論は不正確か？……………一〇七

五 自由と法則……………一〇七

六 理論と現實と……………一〇七

七 價格の理論……………一〇七

八 需要價格と供給價格……………一〇七

九 三種の均衡價格……………一〇七

十 一つの批判……………一〇六

十一 ビグウとチャップマン……………一〇一

第十二章 全體主義の經濟學……………一〇三

一 全體主義思想の發展……………一〇三

二 國家主義か？……………一〇四

三 全體と個體と……………一〇五

四 個人主義排撃……………一〇六

五 何故全體主義は問題となつたか？……………一〇七

六 ファツシズムの母胎……………一〇九

七 經濟は手段……………一〇九

八 勞働と資本……………一〇九

九 伊太利のファツシズム……………一〇九

十 「國民主義」と「國際主義」……………一〇九

十一 ファツシズムは世界的傾向……………一〇七

第十三章 轉換期の動態經濟學

一 經濟學の轉換……………101

二 經濟機構の變化……………104

三 自由競争の退却……………104

四 獨占價格の出現……………104

五 大恐慌と經濟學……………104

六 動態經濟學の由來……………104

七 財政と市場經濟……………104

八 政策と理論……………111

九 政治と經濟……………113

十 動態經濟學とファッシズム……………114

結 び……………116

經濟學史參考文獻……………118

一 勉學と文獻……………118

二 經濟學史一般の參考書……………119

三 各章別の參考書……………124

著者略歴……………卷末

經濟學史

第一章 經濟學史の意義と必要

經濟學史とは？

經濟學史とは何であらう？

經濟學の歴史である。經濟學と名付けられる一つの大きな學問は、いくつかの科目に別けられてある。そのうちの一つが、經濟學史である……。

と、答へてしまへば、それでおしまひである。そして、そのやうな答案は、それ自身、決して、間違つてはゐないかも知れぬ。

しかしながら、この説明は、結局、何物をも説明してはゐない。經濟學史は經濟學史であると説くにも等しい。それでは、一向に解らない。解るのは、經濟學史とは、經濟學の歴史なのだと、いふことだけだ。

そこで、先づ、歴史とは、一體、どのやうなものか？
この點から、考へて行くとしよう。

野村兼太郎博士は、斯う述べられてゐる。

——歴史は過去の生活である。生活は現在の歴史である。その意味においては歴史と生活とは同意語である。歴史を過去の事件の好史的探索とのみ解する者は未だ歴史の眞意味を解する者ではない。生活を目前の衣食住と思ふ者は眞に人生を味到せる者ではない。生活の中に歴史があり、歴史の中に生活がある。

(「歴史と生活」第一號)

凡そ歴史とは、そのやうなものである。

經濟學や經濟思想の歴史である經濟學史も、經濟學說や思想の過去の生活——生成消長である。同時にまた現在の學說や思想そのもの、中にも、經濟學の歴史は集中され、表現されてゐるのである。

だから、經濟學史は、過去から未來へ亘る經濟學說や思想の永い潮流である。そして、その潮流の「現在」の斷面が、現代の經濟學なのだ。

經濟學を修めようとするれば、どうしても、一通りは、經濟學史を繕いて見なければならぬ。

二 經濟學理解の歴史的手段

それ故、次のやうにも説明することが出来る。

經濟學史は、經濟理論を正しく認識し、理解する一つの方法である。しかも、それは、必要不可欠の手段である。經濟學史を學ぶことによつて、わたくしどもは、經濟學の根本的な諸問題を、解決することが出来る。云ひ換へれば、經濟學史と云ふ歴史的手段によつて、さまざまな經濟問題を理論的に把らへ、纏て、わたくしども自身の人生觀、世界觀に到達することが出来るのである。

このことは、經濟學史の名の下に、歴史的研究の手段が、何故、用ひられるやうになつたかを、考へて見ても、よく了解されやう。

そもそも、學說や思想は、いづれも皆、歴史的產物である。それらのものは、どのやうな時代に、どのやうな環境の下で、どのやうな原因によつて發生して來たか、そして、其後、どんな歴史的の經路を辿つて、社會的な生命を持ちつゞけて來たか、或は、死滅して了つたか。また、その間、人間社會の實生活と、どのやうなつながりを持つて流れて來たか、……これらの諸點を、發生の本源にまで溯つて、歴史的な科學的分析を試みるのでなければ、到底、わたくしどもは、一つの學問を眞に理解し、各自の人生觀、世界觀を樹立

することは出来ない。

三 學史を學ぶ實益

そこまで説けば、何故、經濟學史を學ぶか？ その實益はどこに在るか？ これ以上説明する必要もないからだ。

たゞ、これだけのことを云つて置かう……。

經濟學は、人類の社會生活に於ける經濟生活の方面、即ち社會的方法による富の獲得、配分及び消費の三方面で行はれる原理の研究をし、その研究の結果として發表されるこれら三方面を支配する基本的原則——普通に經濟法則とか、經濟原理とか呼ばれる——についての理論を研究するものである。（八木澤善次氏「經濟思想史論」）ところが、これらの理論は、その時代時代の實際的な社會生活と密接不離な關聯の中から生れ、生長し、變化するものだ。時代と場所と人との變るに伴れ、理論も種々に變化する。

それ故、經濟の原理原則を理解するには、歴史を繕いて、學說と社會環境との關係や、發達變化の跡を尋ねるのが、最も有効な道である。現在の經濟學を學び、經濟問題を系統的に解決しようとするれば、經濟學史を學んでおくことが頗る有益なのだ。

欠

MISSING

勤儉節約、お金を大事にした藤綱は世の鑑である……。

これが藤綱の美談だ。

が、しかし、いまどき、誰か藤綱の真似をしたらどうだろう？ 僅か一つの一文銭を探すために、何十本かの松明を灰にし、何人かの人々が何時間かの時間を費したとしたら、果して誰が褒めて呉れるだろうか？
物の経済！

時は金！

いまはそうした時代なのだ。

昔は物が有り餘り、人間の労働力も十分あつた。それで、一文銭の方が大切だつたであらう。今は物が不足し、労働力が盛んに要求される時代なのだ。銅貨一つを探すために、何十銭かの松明と、何圓かの手間を費したら、それこそ物笑ひの種ではないか。今日の世の中では、物や労働力は、或る意味では、お金以上に大切な國家の富である。富の源泉なのである。

星うつれば、ものみな變る！

世態の變化に伴はれて、さまざまな思想や、考へ方も、當然、變つて行かなければならぬ。昔、世人の模範とされた藤綱の善行も、當今は、通用しない。小學校の教科書からも、何時の間にか消へてゐる。昔の經濟思想が、現代には當嵌まらなくなつた證據なのだ！

二 經濟學の誕生

元來、經濟とは、人間が、自由自在に手に入れることの出来る富（財貨）に就いては、考へ得ない觀念なのだ。

例へば空氣の經濟などは、現在までのところでは、有り得ない。人間が不足を感じる場合に、はじめて、これを充たすために、一定の財貨に對して欲求を起すものである。これは改めて説明するまでもない。ところが、いま言つた青砥藤網の時代のやうに、欲しいと思ふ松明が有り餘つてゐれば問題はないが、普通の場合だと、自然的、社會的、將また技術的な種々の條件に妨げられて、欲しいと思ふ財物貨物も、決して有り餘つてはゐない筈だ。そこで、この財貨を手に入れたり、貯へて置いたり、或は更に利用したりするため、一定の目的の下に、計畫的な行動を探らなければならぬ。これが即ち經濟なのだ。

扱て、この經濟について研究された知識を綜合し、一定の體系の下に組織して行く學問が經濟學である。それでは、人間が生存し、經濟生活を行つてゐた時代には、いつの時代にも「經濟學」があつたかと言へば、そうではない。

太古の人間のやうに、自ら獵し、自ら耕して食ひ、自ら紡いで着てゐた時代、即ち自給自足の時代には、經濟學などはなかつた。何故なら、經濟生活が極めて簡單明瞭で、學問的にこれを考へるほどのことがなかつたからだ。

ところが、世の中は、不斷に進歩して來た。人口も増加し、人智も丈けた。經濟もそれに伴つて、組織化され、人と人との間の相互に交流する關係の中で、經濟行爲や經濟生活が營まれるやうになつた。自給自足だつた一家の經濟から、次第に擴大されて、一地方とか、一國とかの範圍で、經濟が組織化されて來ると、茲に、はじめて、研究的に、原因を尋ね、結果を探り、一つの學問として獨立したものとなつて來るのである。それ故、經濟學は比較的新しい學問である。

それだけ知つてゐると、英語で經濟學のことを「ポリテイカル・エコノミー」(Political Economy)と書く理由が良く解る。……。

このポリテイカル・エコノミーと申す言葉は、ポリス (Polis) オイコス (Oikos) ノモス (Nomos) の三つのギリシャ語を繋ぎ合せたものから出て來たのだ。ポリスとは國家といふほどの意味。オイコスは「家」。ノモスは「法則」である。即ち、經濟學とは、元來、家を治めるための家事經營——家計の法則を、後になつて國家に當嵌めることとなり、その結果、打建てられた學問だと見ることが出来る。新しい學問だと言つたのは、この意味だ。それは、近世の産物なのである。

序に斷つて置く……



第二圖 アダム・スミス

日本で「ポリテイカル・エコノミイ」を始めて經濟學と翻譯したのは、福澤諭吉先生その他二三の人々である。徳川時代にも「經濟」といふ言葉は、あつたが、それは極めて漠然としたもので、治國平天下の道を總稱したに過ぎなかつた。太宰春臺が、その有名な「經濟錄」と題する書物の中で……

「凡そ天下國家を治むるを經濟と云ふ。世を治め、民を濟ふと云ふ義也」

と、書いてゐるが、萬事この調子だつた。

至極大雑把なもので、今日の經濟學とは大變な相違があつた。それは日本の産業が永い間、農業中心で自給自足を營み、高だか一つの部落か、一つの藩を經濟活動の範圍としてゐた爲である。ところが、徳川幕府が倒れて近代國家の基礎が確立する。國民の經濟活動もその範圍が擴大される。そして、始めて、眞の經濟學も生れることゝなつた。福澤先生らがポリテイカル・エコノミイを日本に移し植へたのは、正にこの時代のこと。その意味では、日本の「經濟學」は謂はゞ舶來物だ。

三 經濟學の父アダム・スミス

さて、それでは本場の歐洲で、最初に經濟學を打建たのは誰であつたか？

その名は、アダム・スミス (Adam Smith)——

彼は今を去ること二百十六年の昔、西曆一七二三三年六月五日、英國はスコットランドの片田舎、ファイフ州の小さい港町、カーコーデイに呱呱の聲を擧げた。

父親は彼の誕生に先立つて不歸の人となり、母親マーガレットの女手一つに育てられた。歳十四、早くもグラスゴー大學に入學し、三年間在學、後オックスフォード大學に轉じて、六年間こゝで勉強した。主としてギリシヤ語や哲學文學などを學んだ。學成つてエヂンバラ大學の講師となり、後、母校のグラスゴー大學に迎へられて、論理學や道德哲學を講じた。一七六四年、教授生活を清算。大富豪バックロー侯爵の家庭教師として佛蘭西に渡り、知見を廣め、専ら研究と著述に没頭した。晩年には、母校グラスゴーの大學總長にも就任し、一八九〇年七月十七日に永眠した。終生獨身。家庭的には淋しい生涯だつたが、學者としては華々しい一生だつた。

彼は一七七六年、「國富論」と題する大著を世に問ふた。正確には、この書物は、「諸國民の富の本質と原因

とに關する研究」(An Enquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)と銘打たれる。これぞ、後世、經濟學のバイブルと讃へられる名著——

スミスはこれを著したことによつて、「經濟學の父」なる尊稱を永久に受けることゝなつたのである。

四 國富論の時代的背景

しかしながら、どんな立派な思想や學問でも、それは、常に、それが生れた時代と全然無關係に編出されるものではない。探偵小説や怪物語の類ならば、飛び抜けた天才があつて、その頭腦に宿る幻想を筆に托し、奇想天外なことも書けるだらう。が、經濟とか政治とか、人間の生活と不可分の關係にあるものを、どうして幻想一つででつち上げられやう……。それは、どうしても人間が棲む時代といふものと切離しては考へられない。また考へたところで、無意味である。時代が移れば、思想や學問も變るのだ。

スミスの「國富論」とても、謂はゞ彼の生活した時代の姿を、反映したものに外ならない。では、スミスが「國富論」を出した時代は、一體、どのやうな時代だつたのか？

それは、過去幾百年の久しい間、ヨーロッパを支配して來た家内産業の組織が打破られ、工場産業組織がこれにとつて換はりつゝ、あつた時代である。普通にこれを産業革命時代と呼ぶ。一七六七年ハグリーブス

(Hargreaves)がスピニング・ジェニー (Spinning Jenny) と名付くる紡績機械を發明した。一七六九年、アークライト (Arkwright) が水力を用ゆる燃糸機を工夫した。同年あの有名なジェームス・ワット (J. Watt) が蒸汽機關を發明した。従つて工場制度は發達する。交通も益々開けて商業は繁榮し、工場で製造する商品はドシ／＼と捌けて行く。工場制度によつて、始めて可能となつた商品の大量生産で、歐羅巴諸國——と言つても主として英國だが——は、僅々四、五十年の間に巨萬の富を作つた時代だ。所謂資本主義發達の初期で、資本家は専ら安い費用で多くの物を生産するために努力した。

生産萬能の時代なのだ。従つて、人々は思ふ存分、自由に活動してゐればよかつた。國家の干渉などは有害無益と心得る風潮が一世を風靡した時代なのだ。

自由放任主義の時代！

、スミスの「國富論」は、そうした時代の影響を受けて生れた。

そしてまたスミスの「國富論」は、逆に、そうした時代に對しても大きな影響を及ぼし、これを推進させる一つの大きな源動力となつたのである。

五 見へざる手

それでは、スミスが「國富論」を盛上げた經濟學とは、一體どのやうなものであつたのか？

それを知るためには、先づ、この大著の底を流れる大きな思想の流れに觸れねばならぬ。

見へざる手！ (Invisible hand)

これがスミス經濟學の根本思想なのだ。

と、聞かされただけでは、不思議に思ふのも無理はない。

「見へざる手」とは抑も何か……？

スミスの説に従へば、人間は互に相集つて社會を造る。その社會が據つて立つ根本は何かと問へば、それは人間各自が一人残らず、利己心(自愛心)を持つてゐるといふ事實である。人は、どんな人間でも、他人に關係のある事柄よりは、直接自分自身に關係する事柄に對して、遙かに深い利害を感じるものだ。そこで、各個人々々は、自己の利益を目標に常に努力もし生活を向上させようと勵む。そうして、社會の凡ての人々が、假令自分一個のためにでも、活動をつゞけて行くならば、それが相集まつて、纏て社會全體として見るならば、結局、それだけ利益の總和が増加されたことになる。例へば各自が富を造り出す。それを社會といふ大きな目から見れば、それだけ社會全體としての富が殖へるわけだ。又この富の分配の側から考へても同じ理窟である。各人がより多くの分前に預からうとして、負けずに努力するなら、結局社會の富は各個人に最も公平に分配される結果となる筈だ。言ひ換へれば、人間は利己心を満足させるために努力してゐれば、

知らず識らずの間に、「目に見へない手」に導かれて、無意識のうちに、社會公共の幸福や利益を増進するやうになるのである。」

それ故、國家は個人の利己的活動を押さへつけようなど、してはいけない。放つておくに限る。

行くに任せよ！

過ぐるに任せよ！

世界は自らその赴くところに向ふだらう！

これが、スミスの自由放任論(Laissez faireism)と稱されるものである。「見へざる手」とは、この自由放任論を解り易く説いたものだ。謂はゞスミス經濟學の基礎哲學である。」

六 國富論のあらまし

斯うした哲學に立つ「國富論」は、全卷五編に別たれる。これを今日の言葉で申すと……、

第一編……労働の生産力、價值、價格等の問題

第二編……資本や生産の問題

第三編……諸國民の經濟的進歩に關する問題

第四編……政策上の問題

第五編……財政上の問題

などが取扱はれてゐる。

A 労働と富

先づ、スミスは、どうして富が造り出されるか、即ち生産の問題を探り上げて、斯う説明した……。

國民の富を決定するものは、外國貿易の均衡でもなければ、貨幣でもない。(青砥藤綱よりスミスの考へは進んでゐた。)さればとて、農業上の純益でもない。これを造り出す最も根本的な要素は労働である。「各國民の一ケ年の労働は、その國民が一ケ年の消費する一切の生活必需品と享樂品とを本源的に供給する基本である。別言すれば、それらの生活必需品と享樂品とは實にこの労働が直接に産出する物か、又はこの産出物を提供して他國民から買ひ入れるところのものから成り立つてゐる。」(スミスの言葉)だから、一國民の富は、その國民のうち、ノラリクラリと遊んでゐるやうな人間が少く、有用な労働に従事する人間が多ければ多いほど、増大するわけだ。但し、一口に有用な労働といつても、それが財貨を造り出す力や性能——即ち生産力には強弱がある。その力が強大であれば、國民の富はそれだけ大となる。この生産力を大ならしむるものが労働である。労働は原語で Division of Labour 即ち分勞とも言ふ。

B 分 勞 論

こゝで、スミスは有名なピン製造の例を藉りて分勞の利益を説明する……。

——一本のピンを製造するにも、澤山の人々が、或る者は針金を適當の長さに斷切る、或る者はこれを尖らせる、また或る者は之に頭を付ける……といった工合に、ピン製造なる一つの目的を遂げるために、それ／＼異ふ種類の労働を受持ちながら協力するのが分勞だ。斯うすれば、労働者は嫌でも熟練し、一種類の仕事から他種類の仕事に移る際の時間の浪費も省ける。單純な一つの仕事にだけ従事する結果、注意力も集中されて、改良發明の機會も多い。

併し、これとても、自分の持つてゐる或る物を他の物と交換しやうとする人間自然の本能から起るものである。それ故、交換の行はれないところには、分勞は成立たない。分勞の範圍は交換の舞臺——即ち市場の廣いか狭いかによつて限定される。大きな市場があつて、大規模な交換が行はれば、それだけ分勞は廣く行はれ得る。國の富も増加する。この市場に於ける交換の手段となり、媒介となるものは貨幣だ。それが發達すれば、商品はこれを媒介として市場で自由に交換され、従つて交換價值——價格も形成される段取りとなる。要するに、分勞は財の交換される原因であり、經濟社會の出發點である。

C 價值と價格

いまでも述べた通り、自分の物と他人の物とを交換しようとする人間自然の本性から、分勞は起る。この本性(Human Nature)を基礎として、スミスが價值や價格を論じたのは當然である。彼は斯う説明した……。

——物の價值には使用價值(Value in Use)と交換價值(Value in Exchange)との二種類がある。使用價值とは、人間が、成る程これは有効だと認めるもの、即ち人間の主觀的に認めることの出来る物の効用である。交換價值とは、或る物で他の物を購買する場合、その或る物が持つてゐる購買力を代表するものである。例へば、空氣は人間の生活に缺くべからざる有用な氣體だ。従つて使用價值は百パーセントだ。が、どこへ行つても、有りあまつてゐるのだから、空氣をやるから何か品物を買れといふ譯には行かない。即ち空氣には使用價值はあつても、交換價值はないのだ。この反對に、ルビー、サファイヤ、ダイヤモンドの如きは、一種の贅澤品で、人間が實際使つて見て多くの効用がある譯ではないから、使用價值は少い。しかし、ダイヤモンドは滅多にないものだ。人々が慾しがらる。ダイヤをやるから何か他の物を寄越せと、大威張りで要求も出来る道理だ。そこでダイヤには使用價值は少いが、交換價值は大だと云へる。

交換價值を實際に代表するものは市場での價格(Price)——所謂値段——だ。この價格にも物の生産費だけで決る自然價格(Natural Price)と需要供給の關係で左右される市場價格(Market Price)とがある。原

始時代のやうに、資本だとか、地代だとか……そんなもの、なかつた頃には、物の價值は、その物の中に含まれてゐる勞働の分量を目途として、決定された。これは物の交換價值を測る尺度は勞働であり、勞働だけが物の自然價格だといふのと同じである。

然るに世の中が進歩し、私有財産制度が発達して來ると、物の生産も複雑化する。土地や資本(過去の勞働の産物を、蓄積したもの)にも一定の所有者が出來てくる。勞働の外に、誰の土地、何某の資本など、いふものが、生産に参加するわけだ。勞働だけを考慮した自然價格では、實社會に通用しなくなつて了ふ。勞働の費用(賃銀)の外に、資本に對する配當分(利息、企業家の受取る報酬や収益など)地代(小作料)などを、全部計算に入れて、自然價格を求めることになる。この複雑な自然價格を中心として、需要と供給の關係に従つて、市場價格——普通の値段——は決定されるのである。

これがスミスの價值・價格論。物の眞の價值は、その中に含まれる勞働にのみよつて決定されると説く學說を、勞働價值説と名付け、企業者が物の生産に費した費用によつて決定されると教へる説を、生産費説と呼ぶのである。スミスの説はこの中間で、どちらかと云へば、生産費説に近いものだった。

D 所得の構成

この價格論から進んで、スミスは所得論に入る……。

富は價格を決定したと同様の理法に従つて分配される。換言すれば、價格を構成した各部分に對して、富は分配される。物の生産に當つて、資本や土地を提供した資本家、地主に對しては、利子や企業の報酬や、地代などが與へられる。労働者には勞賃が與へられる。國民の全生産は、各々の所得の形をとつて、國民の財布に逆流して行く。故に、國民はこれを大別して、資本の利潤で生活する階級、地代で生活する階級、賃銀で生活する階級との三階級に分つことが出来る。

さて、勞賃とは、スミスに従へば勞働力の價格だ。従つて、その高さは、労働者の生活に必要な費用の額を中心として、需要供給の關係から上下する。一國の資本蓄積高が多ければ、労働の需要は旺盛となつて、勞賃は上る。利子はこの反對だ。資本が豊富であれば供給が多くなつて、利子は下る。だから勞働が多く、國が富むほど、資本家は不利となる。國民の利益と資本家のそれとは一致しない。

地代は土地を使用する報酬だ。即ち小作料である。これは分勞が發達して工業が進み、工業に従ふ人口が増加すれば、それに伴つて地代も騰貴する。地代發生の原因は、農産物價格の騰貴にあると見たのである。

E 自由貿易論

自由主義を基調として、その經濟學を打建てたスミスだ。

スミスは、その經濟論を、先づ分勞——分業——の有利な理由の説明から始めたやうに、自由貿易論の根

據も亦、これを、國際的な分業の理に求めた。次のやうに言つてゐる——。

高い關稅とか、割當制とか、輸出入の制限とか、さまざまな貿易上の障礙物が全然なく、本當に自由な貿易が、世界各國の間に遂行されるならば、自然に競争が行はれ、どの國でも、それぞれ自然的な生産條件に應じて、これなら他國に負けないといふ自信のある最も安値な商品だけを生産するやうになる。このやうに、各國が安く生産した商品を、お互に交換すれば、國際的な自然の分業が發達する。

これがスミスの貿易論。

但し、スミスは、一も二もなく徹底的な自由貿易を主張した譯ではない。時と場合とに依つて、程よい關稅などを設けることも必要だと、教へたのである。

七 その後に來るもの

これが、アダム・スミスの名著「國富論」に盛られた學說の概略である。スミスは、從來の學者が斷片的にしか論じなかつたさまざまな經濟問題を、綜合し、自由主義といふ一貫した思潮の上に立つて、體系的に研究したのである。即ち、古來の「經濟論」を、始めて「經濟學」に纏め上げたのだ。經濟學を創始したのである。千萬年の昔から空に星はかゞやいてゐたが、近世にいたつて天文學が生れ、初めて星の學問が成立

つたやうに、經濟や經濟の思想は大昔からあつたのだが、スミスの「國富論」が世に出て、始めて茲に、經濟問題は學問的研究の對象とされることゝなつたのである。

そして、前にも述べたやうに、スミスの時代は産業革命の進行期だ。資本主義經濟が素晴らしい勢ひで發達しつゝ、あつた時代だつた。いくら商品を作つても羽が生へて賣れて了ふ。お金は儲かる。ドシドシ商品を作れ……そうした時代だつた。それ故、スミスの經濟學も、そうした時代相を反映して、生産を中心とした所謂「生産の經濟學」であつた。また逆に、スミスの經濟學が、その時代を動かして、自由主義の生産社會を現出したと考へられる點も甚だ多い。

第三章 貧乏の哲學

一 スミスの後繼者

經濟學の父アダム・スミスは、一生獨身だつた。勿論、子供のありやう筈はない。

しかし、學問の方では、スミスは立派な子供を澤山持つことが出来た。……と言ふ意味は外でもない。スミスの學說を受継いで、これを後世にひろめ、自由主義の經濟學を完成させた多くの學問上の後つぎを持つことが出来たからである。スミスは、その點、子福者だ。

それらの人々の中で、最も大きな役割を果し、立派な學問上の仕事を残し、従つて、いまでも經濟學の勉強に志す者の忘れてならぬ人が二人ある……。一人はトーマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus)、他の一人は、デヴィッド・リカルドオ(David Ricardo)……。

マルサスとリカルドオとは、スミスが生んだ經濟學を、立派に育て上げた人々である。この二人を「古典派經濟學の完成者」と褒めてゐる學者も多い。二代目、三代目は、どこも「賣家」と唐様で書き勝ちなものであるが、マルサスとリカルドオとは、その反對に、スミスの残した「經濟學」といふお店を、益々繁昌させ、立派な老舗に仕上げたのである。古典派經濟學とは、平たく申せば、經濟學の老舗——即ちスミスから生れ、英吉利自由主義の空氣を呼吸して成長した自由主義經濟學の本流といふ意味なのだ。そこで、本章では、この經濟學守成の恩人の一人——マルサスについて語る順序である。

二 マルサスの生涯

マルサスは一七六六年二月十四日、英國サーレイはドーキングの舊家、近在切つての名望家であるダニエル・マルサスの子として生れた。父のダニエルがオックスフォード大學出身の辯護士で、非常な學問好きだったので、子のマルサスも幼い時から、父の友人グレイヴスやウエークフィールドなどといふ學者の手許で教育された。長ずるに及んで、一七八四年、ケムブリッジ大學に入學。専ら歴史や文學を勉強した。卒業の時は優等生であつた。一七九六年には牧師となり、親しく貧民窟の實情を調査したりして、後に説くやうに、有名な「人口論」を著した。一八〇五年、ロンドン近郊のヘイリベリイに新しく大學が創立されること、な

つたので、マルサスは、請はるゝままに、その經濟學と歴史の教授となつた。

その後の生活は、全く教職と著述とに捧げられた。學者らしい生活だつた。名高い「人口論」や「經濟原論」「地代の性質と進歩の研究」などの著書の外に、無数の論文を書いた。

一八三四年も押迫つた暮の十二月二十九日、クラヴァートンにある夫人の實家を訪問しながら、心臓病のため、突如として不歸の客となつた。



第三圖 トーマス・ロバート・マルサス

三 暗い世相

どんなに立派な學說や思想でも、それは、常に、それが生れた時代相と、全く無關係に、超然として居られるものではない。世の中の姿が變れば、それに伴って、經濟學も、亦うつり變るものであることは、既に前章でも述べて置いた。で、マルサスの代表的著作「人口論」を解説するに當つても、それが編まれた時代の有様を、先づ一通り見極めてかゝらねばならぬ……。

扱て、十八世紀の終から十九世紀の前半にかけての歐洲は、前章にも述べたやうに、産業革命の時代だった。幼稚な家内産業の組織が打破られて、工場組織の生産が盛んに行はれることゝなつた。物の生産はドシドシと増加したが、それと共に、人口も亦、急ピツチで増して來た。英國の場合について、未だ工場組織が發達しなかつた頃と、その發達の最中とも見るべき時代との人口を比較しよう……………。

一七五〇年……………	六四六萬人
一七六〇年……………	七〇〇萬人
一七七〇年……………	七四二萬人
一七八〇年……………	七九五萬人
一七九〇年……………	八六七萬人
一八〇〇年……………	九一四萬人
一八〇三年……………	九二一萬人
一八一〇年……………	一、〇三七萬人
一八一八年……………	一、一八七萬人

こんな工合に、人口は急増した。

そこで、問題が起つて來た。

人口が増せば労働者が多くなる。労働者が多くなれば、失業者だつて殖へて來る。何故なら、人間が殖へ

れば、それだけ労働の供給は増す。扱て、加へて、工場制度の發達で家内工業は破壊され、農村には浮浪者が増加し、女子供まで工場に通つて賃銀稼ぎをする……………。こんな工合で、財産のない労働者の數は増すばかりだつた。他方、労働者を雇ふ者の側から考へれば、工場制度の發達に缺くことの出來ぬ機械その他の生産設備に、澤山の金——固定資本——をかけなければならぬ。それ故、労働者を雇入れるための資本金——流通資本——は、労働者數の増加するのと同じ割合で、増加させる譯にはゆかない。それで、失業者が殖へた。

四 スピーナム・ランド・システム

失業！

貧苦！

當時の英國は重苦しい暗雲で覆はれてゐた。

この不安な世相を前にして、政府の探つた對策は、救貧法の改正による貧困者救濟だつた。

救貧法といふのは、遠くエリザベス女王の昔、一六一〇年に制定された貧窮民救助の法律である。これを改正して、一七九五年、スピーナムランド方法 (Speenham land System) と呼ぶ新しい救貧法 (Poor law) を採用した。その狙ひ所は、勤勉で働き得るだけの體力、能力を持ちながらも、生活費に足るだけの賃銀を

稼ぐことの出来ない氣の毒な人々に對し、一定の救助金を與へる。その金額は養育すべき子供が多ければ多いほど澤山與へる。救助金を貰つても、別に特別の義務を負はされる譯ではなく、矢張り自分の家に居つても差支ない……といふのであつて、参考までに産業革命前後の英國が、どれほどの金を貧民救助のために、支出したかを、次に示さう。

一七五〇年	六八萬磅
一七六〇年	一二五萬磅
一七七〇年	一三〇萬磅
一七八〇年	一七七萬磅
一七八四年	二〇〇萬磅
一七九〇年	二五六萬磅
一八〇〇年	三八六萬磅
一八〇三年	四〇七萬磅
一八一〇年	五四〇萬磅
一八一八年	七八七萬磅

五 貧乏の哲學

こんな工合に救貧費は年々増加するばかりだつた。それでは、貧民は無くなつたか？
残念ながら、答へは……

——否！

貧乏人は減るどころか、益々殖へる傾向にあつた。

何故だつたか？

自宅にゐても救助金がいただけ、然もその金額は、子供の數に正比例するのだから、これが人口増加の拍車とならぬ筈はない。

怠者も當然に多くなつた。他方、資本家——労働者を雇ふ方の側——の立場からすれば、政府が貧民に救助金を與へてゐるのだから、賃銀を引下げてもよいとの口實が得られた。勢ひ低賃銀の傾向が助長された。そんな事情が相重なつて、貧民は日毎増加の有様であつたのだ。

ロンドンのイーストサイド(東部)……そこは、古來、有名な貧民窟だが、十八世紀末から十九世紀はじめにかけての、イーストサイドの繁昌振りは、大變なものだつた。

貧民窟の繁昌……

こんなもの、繁昌ほど有難くないものはない。

貧の充満！

貧乏の哲學として有名なマルサスの「人口論」は、このやうな時代の子として生れて來たのである。

六 ゴドウィンとコンドルセー

が、しかし、マルサスが「人口論」を著した動機は、他にも一つある。それは、マルサスの思想を理解する上にも、甚だ大切な事であるから、一寸つけ加へて置きたい。

前にも言つたやうに、マルサスの父親ダニエル・マルサスはオックスフォード出身の辯護士で、謂はゞ、第一流のインテリだつた。彼もまた當時の知識人の常として自由、平等、博愛を旗印とするフランス革命（一七八九年）の信奉者であつた。従つてこの革命の思想的な生みの親と謳はれるルソーを崇拜してゐた。そこで、同じフランス革命の信奉者であり、ルソーの流れを汲む思想家や、政治家の説には、共鳴し勝ちである。

それらの人々の中でも、ダニエルが深く共鳴したのは……

ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) コンドルセー (Condorcet) の二人だつた。

ゴドウィンは英國人だ。一七九三年「政治的正義」を著した。コンドルセーは佛蘭西人で、一七九四年「人間精神の進歩に就いての歴史的觀察」を書いた。

この兩書思想は、ともに、フランス革命心酔だ。人間の理性の力で、根強い勢力を持つてゐた封建社會を打倒し、フランス革命といふ大事業を成功させることさへ出來たといふ思想だ。

この理性の力に依つて、總て、人間は政府もなく、法律も必要とせず、富の分配も至極公平に行はれて、最小の勞働で生活必需品一切を造り出すことの出來るやうな理想的社會を實現し得る。人口の増加などは、決して心配することはない……

と、極めて樂觀的な意見を述べたものであつた。

父のマルサスは、この樂觀的な説に賛成した。が、子のマルサスは反對だつた。

人口の恐るべき増加！

——然も食物の増加には限りがある。

イーストサイドの貧民窟に、牧師として屢々出入し、日毎年毎殖へて行く困窮者を見るにつけ、子のマルサスは、そこに冷やかに横たはる「人口の法則」について、深く考へざるを得なかつた。

無情なる事實！

冷酷なる現實！

マルサス父子は、この冷然たる事實に當面して、繰返し繰返し議論をつゞけるのだつた。
が……

父は飽まで樂觀論だ。

子はどこまでも悲觀論だ。

子のマルサスは、一つ自分の考へを纏めて、書物を出さうと決心した。

七 人口論の概略

このやうにして、一七九八年、マルサスの「人口論」第一版は世に送り出されたのである。

マルサスは、この有名な書物の中で、どのやうなことを主張したか？

先づ、マルサス自身の言葉を、平易に翻譯して見よう……。

——人口の問題を考へるに當つて、私は、二つの正しい前提を設けることが出来ると思ふ。

第一は、人間が存在するためには食物が必要だといふこと。

第二は、男女兩性の間の情慾は必然的な、打消し難いものであり、そしてまた、大體に於て、現状を維持すべしといふこと。

右の二つの法則は、古來、人間の本性についての確定的な法則であつたと見ていゝ。從來、この法則には少しの變化もなかつたのであるから、將來と雖も、神様以外には、この法則を變へることは出来ない結論してゐるのである。そこで、いま掲げた二個の前提が間違ひないものと考へて、次のやうに言ふことが出来る。

人口の増加する力は、土地が人間の生活に必要な資料を産み出す力よりも、遙かに大きいと言つてもいい。何等の妨げのない場合には、人口は、二：四：八：一六：三二：六四……といふやうに幾何級數（等比級數）的の割合で増加する。これに反し、生活資料は、二：六：八：一〇……一四……といふやうな、算術級數（等差級數）の割合で増加するに過ぎない。幾何級數的增加が算術級數的增加に比較して、絶大なものであることは、ホンの僅かの數學知識を持つ者ならば、直ぐ解るだらう。

この二つの不平等な力の結果を、平等に、平均に保たせるために、人間の生活には食物が必要だといふ人間天性の法則が常に働いてゐるわけだ。即ち、生活難のために、人口増加の勢ひが、常に、力強く妨げられてゐるので、人口増加力と生活資料の増加力が、どうやら平均してゐるのである。この生活難は、どこかの人間の上に落ちて來る當然の運命なのだ。然も、それは、人類の大多數によつて、痛切に感ぜられなければならない悲しい運命なのである。

動物の世界でも、植物の世界でも同じことであるが、自然は生命の種子を、頗る大まかに、氣前よく、且つ豊かに撒きちらしてゐる。が、しかし、自然は、これらの生命の種子が發育し、一人前になるために必要な所（餘地）と榮養分を與へることには、頗るけちん棒である。若しも、この地上に撒布された命の萌芽が、

十分な榮養分と場所とを與へられるなら、僅か數千年の間に、地球が幾百萬あつても足りないほど、動植物は殖へてしまふだらう。それなのに！ 一切のものを貫き通し、われら人間の如何ともすることの出来ない自然の法則——生物の生活には食物が必要だとの法則——が、常に、冷然と控へてゐて、これらの動植物をば、天の命する限界の範囲内に、制限して了ふのだ。動物も植物も、すべて、この制限的な大法則の下に、恐れ入つてしまふのだ。人間と雖も、決して例外ではあり得ない。萬物の靈長たる人間が、如何にその理性を働かせて見たところで、この生物を制限する大法則の力から、逃れきることは出来ない。その結果として、植物や動物の場合だと、種子の浪費や病害や若死となり、人間の場合だと、貧乏と罪惡とが生れて来る。わけても、貧乏こそは、絶對的、必然的な結果として、人間の社會を襲つて来る。罪惡の方は、必ず起る結果だとまでは言へないけれど、それでも、甚だしく蓋然的な（ありさうな）結果であつて、廣く社會に行はれつゝあるのである。

そのやうな譯で、人口増加力と土地の生産力との二つの力が、自然的に不平均であることと、然も是ら二つの力が、常に、平均に保たねければならないといふ人間の本性に關する大法則が支配する以上、貧乏のない社會を完成することなどは、到底出来るものではないと、私——マルサス——は信じてゐる。人間は、所詮、汎ゆる生物界に行きわたるこの法則の束縛から、免れ得べきものではない、と私は思ふのだ。いくら人口増加力と食物生産力との平等化を空想して見たところで、農業振興に力を注いで、それが極限まで成功

したとして見たところで、人口と食物とを平衡させることは、結局、空しい努力に終るだらう。假令、一世紀の間でさへも、吾々はこの法則の冷やかな手から脱け出ることには出来ないのだ。それ故、社會のすべての人々が、安易に、幸福に、そして、比較的、ひまな生活が出来、然も、彼等自身とその家族とのために、何等の不安もなく、生活の資料を得ることの出来るやうな社會は、到底來ないものと考へる——。

これが、マルサス人口論の概略である。以下、少し詳しい説明を加へて見よう。

八 罪惡と道德と

マルサスに従へば、人口は恐ろしい勢ひで、いくらでも増加して行くものであるが、この増加の妨げとなるものが二種類ある。

一つは豫防的な妨げ (Preventive check) 他の一つは積極的な妨げ (Positive check) 先づ、最初の「妨げ」から説明する……。

豫防的妨げとは、種々の罪惡のこと。これは、人間が他の動植物と違つて、理性を持つてゐる所から、當然生じて来る。何故なら、食物を手に入れることが出来ないのに、情慾の向ふまゝに子孫を繁殖させてはいけないと教へる理性の働きのよつて、人間は結婚を差控へざるを得ない。ところが、結婚は抑制出來ても、

凡夫の淺ましき、本能を抑へつけることは出来ない。その結果、さまざまな罪惡が発生し、この罪惡を掩ひ隠そうとして、更に多くの罪惡が生れる。人間社會に罪惡は付きものだといふことになる。併し、人口増加の「豫防的妨げ」の中にも罪惡を伴はないものもある。それは「道德的抑制」とも名付くべきものだ。結婚を差控へ、情慾を制しながらも、その間に、決して、不道德な行爲をしない場合である。(但し、この道德的抑制といふことは、マルサスが一八〇三年に「人口論」の第二版を出すに當つて附け加へた説だ。)

九 貧乏の是論

人口増加の「積極的妨げ」となるものは、貧乏だと、マルサスは説く……。

——自分自身、子供達に、適當な食物や注意をしてやることの出来ない下層階級の貧苦は、人口の増加を積極的に妨げて呉れる。言ひ換へれば、この「積極的妨げ」は、社會の一番低い階級に限つて働きかける。どこの都會でも、貧民の子供達の死亡率が最も高い。田園生活は健康的だ、など、一口に言ふけれども、貧しい農夫の子供らは、榮養不良で十分な發育が出来ないではないか。

斯様にして、社會の下層に在る人々が、嫌應なしに、人口増加の「積極的妨げ」に曝されてゐるからこそ人口と食糧とは調和がとれて行くのである。下層階級の貧乏は、謂はゞ天の攝理なのだ。自然の法則なのだ。

だから、貧乏は誰のせいでもない。

強いて貧乏の責任を尋ねれば、それは、全く貧乏人自身の責任である。貧乏の中に生れて來たのがいけないのだ。

資力もないのに結婚し、子供を生むなどは、神様の意志に逆らつたのだ。そのために貧乏するのは當然である。

十 救貧法には反對

それ故、政府が貧民救濟などをやるのは、害こそあれ益はない。

救貧法によつて、貧民に救助金を與へても、土地が食物を生産する力を増し得ないかぎり、何の意味もない。然も、既に云ふ通り、土地の生産力には嚴然たる限界があるのだ！ 貨幣が増したからとて、その國の肉が増加したと思ふのは愚の骨頂だ。考へても見るがい、貧民の手にある貨幣が増せば、それだけ、肉屋の店先で、買手が激しく競争し、肉の値段を糶上げるだけである。結果から見れば、少しも變りはない。矢張り、ろく／＼肉も食べられず、貧乏暮しをつづけなければならぬ。貧民救濟などは止めたがよい。怠者を造る弊害だけが儲けである……と。

マルサスの人口論は、大體、このやうなものであつた。

前に述べたアダム・スミスの「國富論」は、その表題の示す通り、「諸國民の富の性質と原因とに關する研究」であつたが、マルサスの「人口論」は、その當時の暗い世相を反映した「諸國民の貧の性質と原因とに關する研究」だつたと見てもよい。そして、この研究によつて、彼が到達した結論は、貧乏は貧乏人の責任だ。放つておいてもいゝといふことだつたのだ。富豪や政府は、マルサスの説によると、暗い世相に對して、何等の責任を感ぜなくとも差支ないことになる。自由放任の個人主義で、結構なのだ。

氣取つて言へば、マルサスの所説は、資本主義經濟組織や資本家階級の有力な辯護論であつた。

併しながら、どう考へても、このやうな思想は、決して嬉しい思想ではない。そこで、マルサスや、次章に述べるリカルドオの學説などに對して、後世、これを陰慘科學 (Dismal Science) だと評する學者も出たほどである。

第四章 分配の經濟學

一 世紀の經濟學者

アダム・スミスの偉大な頭腦によつて打建てられた自由主義經濟學——古典派經濟學——を守り育てた二人の學者、マルサスとリカルドオ……。

そのマルサスに就いては、既に前章で述べた。

今度は、リカルドオの人となり、その學説、時代的背景などについて、話を進めて行く順序である。

カール・デイル (Karl Dietl) や、オットマール・シュバン (O. Spann) などと言ふ有名な獨逸の經濟學者達が、

——十九世紀に、最も重大な影響を與へた經濟學者は、リカルドだ——と、書いてゐる。慶應義塾大學總長小泉信三博士も、リカルドオは「經濟學史上最も偉大なる理論家の一人」だと言はれた。

これは、決して、過褒でもなければ、御世辭でもない。けれども初學者の間には、リカルドオその人の名前すら、いま始めて聞く者も多いであらう。

リカルドオとは一體どのやうな人物であつたか？

二 その振出しは株屋の小僧

デヴィッド・リカルドオ(David Ricardo)は一七七二年四月十九日、英京ロンドンで生れた。父はアブラハム・リカルドオと言つて、ユダヤの血統をひいたオランダ商人。英吉利に歸化した人。デヴィッドはその三男だつた。父の商賣は株式仲買だつた。しが、ないその日暮らしの商人であつたと見へて、デヴィッドは、英吉利とオランダのアムステルダムとで、小學校程度の教育を受けただけである。十四歳の春から、父の店で、株屋の小僧となつた。

機略縦横！

まことに、目から鼻へ抜けるやうに俊敏な少年だつた。

十七、八歳の時には、早くも、立派に一人前の株屋さんだつた。廿一歳のとき、結婚してキリスト教の信者となつた。それが、父親の氣に入らず、父子たがひに不和となり、殆んど絶縁状態となつた。これが仕合せとなつたと言へば、妙な言ひ方であるが、彼は、父との義絶を機會に、知己友人の援助を得て、ロンドン株式取引所の仲買人となつた。財界の心臓部で獨立の活動をするこゝとなつたのだ。元來、ユダヤ人特有の商才に恵まれ、打算に丈けた男である。行く道は十四の年から、身につけた株式仲買。機敏深謀……忽ちに

して成功者となつた。

廿五歳……早くも、一流の仲買人。

三十歳……最早や、一生遊んでゐてもい、だけの資産が出来た。

三十五歳……ロンドン財界の有力者。

トントン拍子とは、正にリカルドオのことであらう。彼は、田舎に廣い土地を購ひ、立派な邸宅を構へた。第一流紳士の生活である。

普通の人物なら、こゝらで一安心と、油断もすれ



第四圖 リカルドオ

ば、遊蕩な生活に落ち易いところである。

が、しかし、リカルドオは世の常の富豪ではなかつた。

産を成すと共に、猛然！ 彼は向學心に燃へ立つたのである。幼くして父の業に従ひ、ろくろく學校通ひすら出来なかつた彼にとつては、學問の世界は、夢にも去らぬ憧れの世界だつたのだ。成功者となつた彼は、先づ、數學、化學、礦物學などの書物を読んで見た。そのうち、バースと呼ばれる温泉に靜養中、不圖、手にした一冊の經濟書。

一ページ……

二ページ……

一〇〇ページ……

一〇〇〇ページ……

それは、狂氣の眼であつた。

熱心を通り越して、貪る如く、食事も忘れて、彼は讀み耽つた。

その經濟書の表紙には――

アダム・スミス著「國富論」

一七九九年のことだつたと傳へられてゐる。

三 大成の境地

スミスの「國富論」を讀んで、異常な關心を經濟學研究に寄せるやうになつたリカルドオは、財界人としての豊富な實際知識を、經濟理論によつて生かすために、その當時の時事問題に關聯して、多くの論文や著書を、次ぎ次ぎに發表して行つた。

一八〇九年には、處女作とも言ふべき「地金價格の騰貴」(High Price of Bullion; a Proof of the Depreciation of Bank Notes)を著して、忽ち經濟學者として認められた。それ以後は、實業家といふよりは、寧ろ、學者としての活動だつた。しかも、極めて著名な經濟學者として、その學說、主張は、萬人注目の的となつた。

一八一七年には、遂に大著「經濟學及租稅原理」(On the Principles of Political Economy and Taxation)を世に問ふた。これは、彼の代表的著述であると共に、理論經濟學の歴史上にも、稀有の名著と謳はれる大業である。

その後、一八一九年、株取引所を引退し、翌一八二〇年には代議士に當選した。學者であり、實際家で

あるリカルドオの言論は、議會でも嶄然！ 頭角を現し、識者尊敬的であつたさうだ。

一八二二年、「農業擁護論」(On Protection to Agriculture)を著したが、これが、最期の著述となつた。翌一八二三年九月、グロスターシアの農園で中耳炎にかゝり、十一月には、既にこの世の人でなかつた。その當時の金で、七十萬ポンド(七百萬圓)の遺産があつたさうだ。文字通りの千萬長者だつたことが知れる。享年五十一歳。まだ働き盛りであつたが、経済學者としても、實業家としても、天晴れ！ 大成の人物であつた。

四 分配の経済學

扱て、リカルドオの経済學理論はどんなものか？

それを説くまへに、例によつて、こゝで、一寸ばかり、リカルドオの経済理論を生んだ時代的背景を、見て置かう……。

リカルドオの時代は、前回に述べたマルサスの時代の直ぐ後である。それも、年號の上でホンの少し後だといふだけで、その時代相について考へれば、殆んど同時代だと云つてよい。巷に貧民の數が増し、さまざまな社會問題が續出して、暗い峻しい世の姿であつた。南アフリカや印度地方に輸出される英吉利の商品は

思ふやうに捌けないのに、輸入は増加して國際貸借が不利に陥り、ヨーロッパ大陸ではナポレオン一世が英吉利商品を排斥するといった有様で、とうとう一八一〇年には、英吉利は恐慌の襲來を受けて了つた。他方、一七九三年以來、フランスとの間に戦争が始つてゐた。英吉利は昔から食糧輸入國である。何とかして、食糧を自給したいものと、一七七三年に農事奨励、地主保護の目的で穀物條令と呼ばれる法律を作り、小麦の輸入に高い關稅を課けてゐたほどだつた。そこへもつて來て戦争である。農産物の輸入は益々困難とならざるを得ない。勢ひ穀物の値段は大暴騰を演じた——(この穀價の昂騰は後に説くやうに、リカルドオの地代論と密接な關係がある)——一八一四年フランスとの戦争は終つて、再び平和が巡つて來たが、經濟社會には平和は來なかつた。それどころか！ 一八一五年、またもや恐慌の御見舞である。何故なら、平和恢復と一緒に、ヨーロッパ大陸の各地に自國の商品を賣出すことが出來ると早合點した英吉利の商工業者は、思惑的に澤山の商品を製造したけれど、ナポレオン戦争のために荒されてゐる大陸には購買力がなかつた。英吉利の商品を欲しいことは事實だが、肝腎のお金がないので、實際上の需要が起つて來なかつた。それで、商品は多量に造つたが、一向に賣れない。勿論値段は下る。英吉利商工業者の投機は見事に失敗した。品物は倉の中で日に日に腐つて行く。これが一八一五年、再度の恐慌の原因であつた。

そんな事情で、リカルドオの時代も、亦、不安な、陰鬱な時代であつた。人々は少しでも多く富の分前に預からうとして、鵜の目鷹の目、富の分配といふことが、誰の腦裡からも離れない時代であつた。

リカルドオの経済學が、この時代的關心事たる分配の問題を重要視したのは當然である。前の章でも書いたやうに、スミスの時代は産業革命の波に乗らうとする時代で、どうして澤山の物を造るかといふ生産の時代だつた。それで、スミスの経済學は「生産の経済學」だつた。リカルドオの時代は、産業革命の結果として、生れて來た富の分配上の多くの厄介な問題の解決が要求されてゐた。リカルドオの経済學は、この時代の相貌を反映して、「分配の経済學」たらざるを得なかつたのである。言ひ換へると、リカルドオは分配の問題に正しい答案を書かうとして、價値を論じ、地代論を試み、賃銀の理窟を考へたのである。

五 その價値論

先づ價値論から見て行かう——。

價値に使用價値と交換價値との二種があることは、前々章アダム・スミスのところでも述べたが、リカルドオも、使用價値と交換價値とを區別した。そして、使用價値は物の効用によつて決定され、同時にまた、この効用は交換價値を定める大切な要素ではあるが、決して交換價値の標準となるものではない、何故なら、空氣や水のやうに、効用はあつても、交換價値の全くないものや、至つて少いものも世の中には澤山あるからだ。それでは、物の交換價値即ち價格はどうして決まるかと問ふに、リカルドオはこれに答へて……

物の交換價値は、その物が、文晁の繪とか、左甚五郎作の「眠り猫」とかいふやうな、二度と造り出すことの出來ない稀少な物——經濟學の術語で、再生産の出來ない稀少財と呼ぶ——でない限り、別言すれば自由に増加し得る（再生産し得る）物であれば、その價は、それを生産するに必要な労働の分量によつて定まると説いた。これは經濟學者の所謂「労働價値説」と稱する思想であつた。尤も、後年、リカルドオ自身も、自分の労働價値説が餘りにもかたより過ぎたものであることを認め、労働の分量の外に、生産に要する時間といふ要素を考慮し、時としては、利潤も亦、價値を左右する一要素だと書いてはゐる。

六 リカルディアン・ソーシャリスト

茲で、一寸、餘談めくが、リカルディアン・ソーシャリストといふ言葉を説明する——。

リカルディアン・ソーシャリスト (Ricardian Socialist) とは、リカルドオ派の社會主義者といふ意味だ。社會主義者でも何でもないリカルドオ——いや、社會主義どころか、資本主義經濟理論の大成者と呼ばれるリカルドオから、何故リカルドオ派社會主義など、いふ芳しくない名前が生れて來たか？ それは、いま述べたリカルドオの労働價値説が、後年、社會主義的傾向を帯びた思想家によつて、悪用された結果である。その意味は斯うだ——。

リカルドオは價值を決定する尺度は労働だと教へた。それならば物の生産に當つて、労働を提供する労働者は、價值の全部を自分のものとして要求して、答だ、術語で申せば、労働を提供した者は、その労働果實全收權を主張して、譯だとはかり、リカルドオの學說を勝手に流用して、社會主義的な主張を樹てた人々があつた。ウキリアム・トムソン、トマス・ホヂスキンなど、いふのがそれで、後年これをリカルドオ派社會主義者と名付けるのである。リカルドオも、さぞかし、地下で苦笑したことであつたらう。

七 その賃銀論

リカルドオの賃銀論も、無論、その價值論から出發する。

彼は、價值の尺度は労働だと主張したのだから、労働の價值である賃銀も、亦その労働を作り出す労働の分量によつて決定される譯だ。言ひ換へれば、労働者が自分とその家族との生活を支へ、新しい労働力を保ちつゞけて行き得るだけの費用（賃銀）を支拂はねければならぬと説いた。その場合、リカルドオの所謂「労働者並にその家族の生活に必要な費用」と言つたのは、無論、彼等の生活しつゝある社會の慣習を基礎として、生活をするに足るだけの費用を意味してゐる。後年、ラツサアルなど、いふ人は、リカルドオの賃銀論を惡評して「賃銀鐵則」と呼び、労働者には動物的な生存をするだけの賃銀を與へればよいと教へたやうに書いてゐるが、それは寧ろ曲解だ。實業家出身で、極めて實際的な議論をしたリカルドオが、そのやうなことを本心から唱へる筈もないのである。

八 有名な地代論

扱、最後に、リカルドオの地代論だ。これはスミスの「國富論」、マルサスの「人口論」、リカルドオの「地代論」といふ工合に、三大學者の三大代表的思想として、餘りにも有名な學說である。古典派經濟學なる大殿堂を支へて立つた三本の柱石の一つなのだ。以下その要領……。

土地が有り餘つてゐる國に於ては、人々は地味地質などの最もすぐれた土地——一等地——だけを耕作して、氣樂な農事に従事してゐれば事足りる。そのやうな状態の下では、土地の産物（穀物その他の農産物）の價格は、價值論のところで述べたやうに、任意に増加し得る物財の價格を決定する法則に従つて、當然その生産費によつて決定されるだらう。だから、そうした状態がどこまでも續いて行く社會ならば、別に何等の問題は起らない。ところが、世の中は、そうは問屋でおろさない。マルサスの人口論で、讀者も先刻御承知のやうに、人口は次第／＼に増加する。嫌でも應でも、食物に對する需要が増加する。その結果、一等地

だけを耕作してゐたのでは、食物の供給が間に合はなくなる。そこで、地味地質の悪い不便な土地を耕作しても、食物の供給を増加させることになる。これを別な側から言へば、食物が不足して値段が騰貴するから、従来一等地ばかりを耕作してゐた時に比較し、更らに多くの費用をかけて二等地を耕作しても引合ふやうになる。同じ理窟で、人口が増加し、食物の需要が増すに従ひ、三等地、四等地……の耕作も行はれるやうになる。この場合、一等地の地主は、二等地の地主よりも有利なことは明かだ。即ち、一等地と二等地の収穫との差額を、一等地の地主は自分の財布の中に入れることが出来るわけ。この差額こそ地代を形造る要素なのだ！ 何故なら、これは、相等しい分量の資本と労働とが、條件の異なる土地に投下された、めに生れて来るもので、それは一等地の働きたと見てよいかからだ。これが地代である。三等地、四等地……と順次に耕作されるようになると、二等地にも、三等地にも、全く同じ理由で、地代が生じて来るのである。

理解の便宜のために、簡単な例を示さう。——例へば、いま、優良地が三石の米を生産し、同じ面積の劣悪な土地が二石の米を生産するとする。この場合、優良地は劣悪地に比し、差引一石だけの地代を收穫するのである。

たゞ其の際、考へなくてはならぬ點がある。それは、土地の良否優劣は、單に地質とか地味とかの物理的な條件だけで決るものではないといふ事だ。同じ地質の土地でも、交通機關が備はつてゐて、便利な土地もあれば、酒屋へ一里の不便な土地もある。商業に適する土地や、工場敷地として十分利用され得る土地もあれば、麥や大根を作る以外に用途のない土地もある。このやうに、四圍の環境の良悪や位置の便利、不便利などによつて、土地の價值には相違が出て来る。そして、これがまた地代を構成する重要な分子とならざるを得ない。それ故に、地代は、土地の打破ることの出来ない性質から生れるものだと、リカルドは説いたのである。彼自身の言葉を引用するならば——

「地代は土地の生産物の一部分であつて、土地の本源的な、そして、不可壞的な力の使用に對し、地主に支拂はれる報酬である」と、説いたのである。

九 地主に有利な結論

地代が自然の賜物であれば、これを受取る者も、誰に遠慮や氣兼ねをする必要はない。社會の進歩に伴れて、地代が獨りで騰貴しても、優良地の地主は、そつくりそのまゝ、この地代を財布に納めて、何の差支もない譯だ。

それから、地代は、既に説明したやうに、好條件を具備してゐる土地、即ち地味や地質が優れ、位置も便利な所謂一等地といふものに限りがあつて、その生産物の價格が昂つて、二等地、三等地……が耕作されるやうになるに従つて、始めて發生するものであるから、それ自身、決して農産物の價格に影響するものではない。

い。いや、却つてその逆に、農産物の値段が高くなるからこそ發生して來るもの。リカルドオの言葉を藉りれば、「地代は穀物の値段高きが故に發生するのであり、地代高きが故に穀物の値段が騰貴するものではない」のである。

十 リカルドオへの批評

以上、リカルドオ経済學説の主要部分の解説である。こゝに紹介した價值論、賃銀論、地代論などの外に、通貨理論なども有名なものであるが、細かい問題に亘るから省略してもいいだらう。要するにリカルドオは、その精密巧緻な理論と透徹した推理によつて、スミス、マルサスから受継いだ正統派の經濟學を、立派に守り育てたのだ。そして、彼の時代が、初めにも書いた通り、分配問題の矢筈しい時代だったので、その學説は、當然に、分配理論を中心として展開された。殊に地代論は有名であるが、彼の時代の英國は、地代が著しい勢で騰貴した時代だったことを注意して考へると、その學説も、成る程と肯かれるところが多い。

ポーター(Porter)といふ人の書物に依ると、一七九〇年と一八三三年とを比較すれば、英國の地代は少くとも二倍以上に騰貴し、スコットランドでは、一七九五年以前には地代の總額二百萬ポンドに過ぎなかつたものが、一八一五年には五百二十七萬八千餘ポンドに上つてゐたさうだ。

この甚だしい地代の騰貴に對し、各方面に種々の議論もあつた。併し乍ら、リカルドオの「地代論」は、地代が自然の賜物で、當然地主の手中に歸すべきものだと思へたのである。それ故、結果から見れば、リカルドオの學説も亦マルサスのそれと同じやうに、資本家側に都合のよい學説であつた。と言つて、彼が殊さらに資本家の味方たるべく努めたと評するのは正當でない。彼自身、實業家だし、知らず識らずの間にその見解が自分達の側に有利なものとなつた點は、或は多少あつたかも知れぬ。が、しかし、公正に見て、彼は飽くまでも嚴正中立の學者であつた。

さればこそ、彼は「十九世紀最大の經濟學者」と崇められる。正統學派の完成者と稱されるミルでさへ、その分配論は、そつくりそのまゝ、リカルドオから借りて來たと云つても、大過ないのである。

第五章 彷徨する経済学

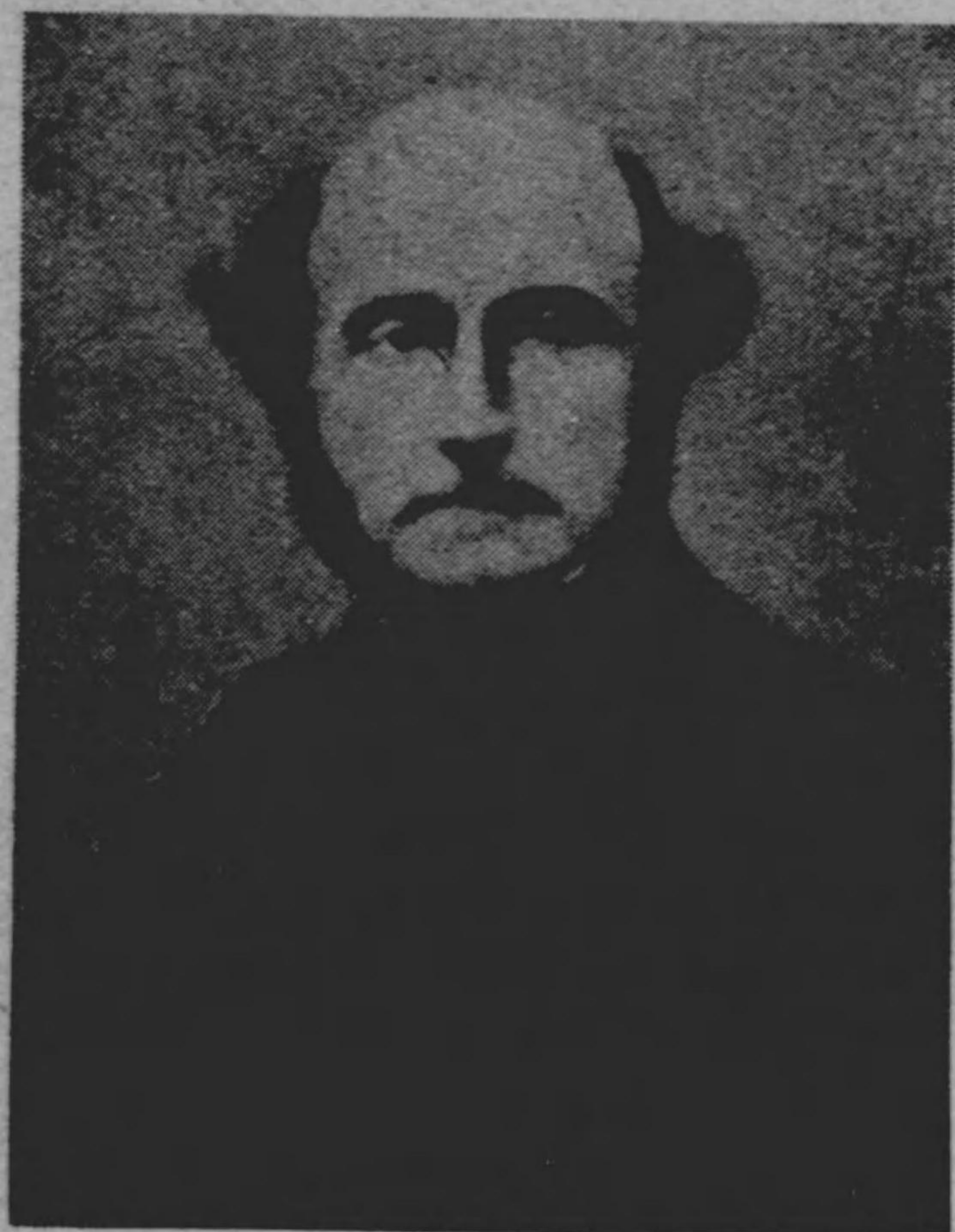
一 父子の散歩

昔話を一つしよう……。

一八二〇年頃、倫敦の郊外ニューイングトン・グリーンの小逕を、父と覺しい人に伴はれて、毎朝散歩する、見るからに聰明さうな少年があつた。父と子との朝毎の散歩と聞けば、温かい和やかな風景を人は想ひ浮べるが、この散歩する父は生真面目な顔付だ。子供は眞剣な畏怖の表情をさへも浮べてゐた。それもその筈、話題と云へば、羅典語の事や歴史の話、さてはリカルドオの経済学にまでも及ぶ、固苦しい難かしいものばかりだつた。これこそは、後年の大思想家ジョン・スチュアート・ミル(J. S. Mill)が、父ジェームズ・ミルから受けた朝の教育時間なのであつた。

朝だけではない。晝も晩も教育の時間があつた。三歳にしてギリシャ語を、八歳にしてラテン語を教へられた。その外に歴史と数学もやらされた。後年の大學者も、これには痛く閉口したとみえて、毎晩数学を習つた時のいやな思ひ出は忘れ難いと、五十年も後になつて書いてゐる。

二 少年リカルドオ學者



第五圖 ジョン・スチュアート・ミル

併し、この詰込教育のお蔭で、ミルは十四歳にして、早くも経済学までも一通り學習し終へたのである。その経済学は、前章で述べたリカルドオ経済学であつた。父は例の散歩の時に之を講義し、子はこれを文章に書いて、翌日父に見せる。この日々の報告書は、後日父ミルの「経済学綱要」の臺本となつたほどである。ミルの経済思想が、リカルドオのそれに基いてゐるのは、かうした事情に由るのである。

ミルと言ふ人は、元來が單なる經濟學者ではない。論理學者であり、政治學者であり、熱心な社會改革論者であつた。だから、その著作は多方面に亘つてゐる。「論理學體系」「經濟學未定問題」「經濟原論」「自由論」「婦人の隸屬」等は最も著名なものであり、論文「代議政治論」に至つては、實に世界各國の人々から愛讀されたものである。雜誌論文は、數冊の厚い本になる程たくさん書いてゐる。

然もこれ等の夥しい文筆の營みが、東印度商會の印度通信文審査局員及局長といふ三十餘年の永い勤務の餘暇になされた事は、實に驚く可きことだ。この精勤三十餘年を見ても解る通り、ミルの生涯は表面的には至極無事なものであつたが、たつた一つ飛び抜けて珍らしい事件があつた。

三 テーラー夫人

それは戀愛事件である……。

普通の戀愛なら、さしたることもなかつたが、ミルは人妻に戀をしたのである。相手は知人テーラー氏の夫人……これはミルの思想上に非常な影響を及ぼしてゐる。

テーラー夫人に初めて會つたのは、ミルが二十五歳、夫人が二十三歳の時であつた。夫人は娘と二人、田舎に別居してゐて、時々倫敦なる主人の許に歸つてゐたが、ミルは別居先へも、主人の宅へも平氣で遊びに

行き、時には夫人と二人で旅行に出たりした。總て主人の了解の許にである。これは非常な物議を醸したが、兩人はもとより、主人のテーラーも平然たるものであつた。そして、二人の交友は二十年の長きに及び、テーラーが死んだ後、既に四十六歳と四十四歳になつてゐた二人は、晴れて結婚したのである。同棲七年半、夫人は、突然、肺充血を起して長逝して了つた。ミルがこの夫人に捧げた尊敬は絶對的なものだった。

西洋人は、人前で平氣で自分の妻を褒めるものだが、ミルの褒め方は尋常一様ではない。「彼女は麗人であり才媛である」位は、まあいゝとしよう。詩人シェレーと比較して、彼女に比べればシェレーは一介の少年に過ぎないと言ふに至つては、聊か恐縮の外はない。果して、シェレーより偉いかどうかは解らないが、非常に優れた人であつたことは事實だ。たとへミルとの間に何の忌はしい關係はなかつたにしても、亦、夫の了解があつたにしても、そうした生活を二十年も立派に続け通したといふ事は、餘程の意力を持させてゐないといふ出来難いものだ。ミルが彼女に對して心から傾倒したことは、かゝる夫人の意力によると云へる。

併し乍ら、このことは、他方、幼い時からミルの受けて來た教養の缺陷にも依るものだ。何しろミルは、今も言ふ通り、學問的には非常に訓育されたが、感情方面の教育は殆んど受けなかつたと云つていい。それが立派な女性に出會つたのだから、驚いたのも無理はない。ミルが夫人の天性として褒めたり感心したりしてゐることの中には、何もミル夫人に限らず、凡そ女なら、誰しも持合せてゐるやうな感情や傾向も随分と多い。謂はゞミルは異性といふ未知の世界に絶大の感興を覺へたのである。それだけに、ミルがテーラー夫

人から思想上に受けた影響は深かつた。

四 功利主義の標語

前にも書いた様に、ミルは経済學を父から教へられたのであるが、もう一つ教へられたものがある。それは功利主義の思想であつた。功利主義と云へば、苦痛と快樂を善惡の標準と考へ、人に快樂を與えるものは善であり、苦痛を與えるものは惡である。之を廣く社會に及ぼして云へば、最も多數の人に最も大きな快樂を與へることが政治の最高目的だと、考へる思想だ。

最大多數の最大幸福！

これが、功利主義の政治標語であつた。この誰にも解り易い哲學は、アダム・スミスの親友デヴキッド・ヒュームなどから出てゐるが、之を近代の有力な政治思想にまで高めた者は、ジエレミー・ベンサムであつた。前章に書いたリカルドオも、彼から教へられて功利主義を信奉してゐた。父親のミルも亦、ベンサムと交遊があつた關係から、功利主義者だつた。當然、ミルは父の影響を受けて、之を自分の思想としてゐた。若しこのまゝで進んで行つたとしたら、ミルはそれこそ、ありふれた平凡兒に過ぎなかつたであらう。が、幸運にも、ミルは非常な思想的動搖に遭遇したのである。

五 理想主義への轉換

それは、或日、全く突然にミルを襲つた虚無的な感情であつた。一八二一年の冬といふから、ミルが十六歳の時に當る。彼は初めてベンサムの本を読んで、社會改革者にならうといふ決心をした。それから後は、社會の改革に努力することに自己の幸福の總てを置き、眞剣な熱情を以てウエストミンスター評論に筆を把つてゐたのである。然るに二十一歳の秋、これといふ理由も無いのにボンヤリした精神状態に陥込んで了つた。恐らく少年から青年への過渡時代を捉へるあの漠然たる憂鬱であつたのだらう。その憂鬱な状態の下で、ふと、「今假りにお前の人生の目的が悉く實現され、お前が熱望してゐる制度や思想の變化が完全に成就したものとしたら、これでお前は幸福であるか？」と自問して見たのである。ミルの心は、何故か、これに「否！」といふ答へを答へた。それはミルの生涯を托した全基礎の崩壊であり、一切の幸福の目標の喪失でもあつた。それからのミルは、惨めな氣持でその日その日を送つた。

幸福とは何か？

この問題が、改めてミルの前にクローズアップされた。思へば同じ年頃に、私達にも同じ様な悩みが訪れたものであつた。ミルの偉さは、この惱ましい疑問を飽くまで突き詰めて行つたところにある。果してベン

サムが説く如く、快樂と幸福とは同じものであらうか……。最大多数の者に最大の快樂を與えることは、最大の幸福を與へることになるのであらうか。苦と見えることの中にも、幸福が感じられることはないのであらうか。この悩みは、やがて「余は豚となつて樂しまんよりは、寧ろプラトールとなつて苦しもう」といふ悲痛な叫びとなつて現れた。幸福といふものは、そのみを目的として追及する時に、最早幸福では無くなつて了ふ。何等かの理想に向つて、脇目もふらず努力し精進する時に、幸福は、謂はゞ行きずりに不圖感せられるものなのである。享樂を以て人生の目的としたならば、それは、忽ちにして人生を愉快ならしめるに足らないものとなつて了ふ。幸福とは何ぞやと詮議立をすれば、幸福は逃げて行つて了ふのである。

これがミルの到達した結論であつた。これは明かに功利主義から理想主義への轉向である。この悩みの間に、人の情操の大切なこと、藝術の尊嚴といふやうなものをも、ミルは深く強く感得したのである。斯うして、彼自ら「危機」と呼んでゐる時代から、やうやく抜出した時に、ミルはテラー夫人に遭つたのだ。乾いた海綿のやうに、婦人のみが持つ情操を、ミルの心は、テラー夫人から吸ひ取つて、その思想は、見る見る温かさと豊かさに満たされて行つたのである。

六 ミルの時代と社會

ミルは一口に過渡的思想家と云はれる。確かにミルが生活した時代は、一つの動搖期であつた。史實の上からみても、一八四八年にはフランスに七月革命が起つた。一八六一年には米國に南北戦争が始つた。英國自身に就いて云へば、スミスやリカルドオ等が讚美した産業革命が、一應の終りを告げると共に、この革命に依つて出来上つた英國資本主義が、その惨めな暗い一面を明かに示し始めてゐた。その一断面として、當時の労働者状態の一斑を述べて置かう。

讀者の中には、舶來の繪葉書などで、煙突の中から子供が、眞黒な顔を出してゐる戲畫を御覽になつた方があらう。よく使はれた漫畫なのだが、實はあれは漫畫でも冗談でもなく、チムニー・ボイ煙突小僧と叫ばれる幼年都會労働者の姿なのである。田舎では炭坑の石炭搬びが、幼年労働者の仕事であつた。彼等は七年間二十志乃至三十志（十圓乃至十五圓）で賣られ、年齢は六歳乃至八歳を普通とした。甚だしきに至つては、四歳の子供さへも居つた。

眞暗な煙突！

それだけでも幼児は恐怖する。それなのに！ 親方は鞭や針で彼等を強制し、煙突に登らせたのだ。炭坑では朝の三時に寢床から引出され、夜の五時まで使はれた。ノツチンガム町のレース製造業に従ふ九歳乃至十歳の少年労働者から一日の労働時間を十八時間に縮めて欲しいと歎願されて、州判事ブルートンは「かゝる町のことを吾々は何と考へたらう、だらう」と長大息を洩らしてゐる。榮養の點からみると、一週間の榮

養量（含窒素成分、無窒素成分及礦物性成分の合計）は、ポーランド監獄の囚徒が一八三・六九オンスなのに、植字工は一二五・一七、農村労働者は一三九・〇八に過ぎなかつた。住居を見ると、毛糸工業地たるブラッフォード市では一室に少くも成人八人、多きは男女老幼十六人の労働者が住み、然もその室は、同市の救貧醫ベルの言葉に依れば、「人間の住むに適しない穴部屋」であつた。政治上からみると議會改革を目指してチャーチズム運動が最も猛烈果敢な民衆運動を展開しつゝあつた。ミルの心が先づ政治問題に向けられたのはこれが爲めである。かゝる情勢の中に在つて、苟くも眞面目な心を持つた人間ならば、平氣で居られる譯がない。改革論者となるか、然らざれば革命論者とならざるを得ない。ミルは前者となつたのである。

七 經濟學原理

ミルの經濟學原理は一八四八年に出版され、四年間に三千二百五十版を發行する程の、賣行を示した。この盛なる賣行は、スミスやリカルド等の經濟學書には取扱はれてゐない問題が次ぎ／＼に現はれ、ミルの原理がこれを解かうとしてゐたためであつた。それは労働問題を中心とする分配問題であつた。リカルドの經濟學も、前章で述べたやうに、分配の經濟學である。併しながら、それは現在の分配が、どういふ原則に従つて行はれてゐるかといふ在るがまゝの事實を明にしたのであつて、分配をどういふ風にすべきかといふ

ことを論じたものではない。寧ろ、それは、經濟法則の動かし得ざる所以を、信するもの、如くであつた。之に對して、ミルは經濟法則にも、動かし得る部分と、得ない部分とがある事を説いたのである。

ミルの意見に依ると、生産に關する法則は自然に關する法則であるから、これは動かし得ない。土地、労働及生産要具は、如何なる社會に於ける生産でも、之を必要とする。然るに分配の法則は、特定の社會制度から生ずるものである。一定の社會制度が與へられてゐる限り、利潤や賃賃や地代やが或一定の原因に依つて定まることは眞實であり、制度そのものは、一定の條件に制限されるが人間の意思に基くものである。それは決して永久のものでも無ければ不變のものでもない。ミルは斯う主張したのである。理論的に見れば、これは甚だ不徹底である。生産といふことを技術的にだけ考へれば、ミルの言ふ通りであるが、生産の制度や組織は時代により、國に依つて變化するから、その法則も亦一様ではない。けれども資本主義の持つ様々な法則を、總て自然法則と同様に考へた英國經濟學の傳統から見れば、ミルの立場は劃期的といつてもいゝ程に、著しい進歩であつた。

では、ミルはどんな改革を分配制度の上に行はうとしたか……？

以下の記述で、それを解つていただけると思ふ。

八 愛蘭の土地問題

愛蘭獨立問題は、現在でも英國の痛であるが、これは既に一八六〇年頃からあつた問題である。その原因の最も大きなものは、愛蘭の土地が英國の貴族に依つて所有され、最も壓迫的な小作制度の下に置かれてゐた事である。

ミルは經濟學原理第二篇（分配篇）の第六章から第十篇に互つて農業問題を論じ、様々な制度を比較研究した後、自作農を以て最善の制度だと考へるやうになり、愛蘭の小作制度を變じて自作農とすべしといふ意見を提唱してゐる。又別に「英蘭と愛蘭」と題する小冊子を一八六六年に刊行した。これは兩國の分裂は双方の不爲であること、そして土地問題解決には國家が然る可く調査した一定の地代で、永小作權を現代の小作人に與へよと主張したものであつた。この提案は當時としては行き過ぎの案で、ミル自身も承知で發表したのである。せめてこの位の事を言はなければ、多少とも徹底した案は、到底行はれまいと考へたからだ。

九 勞賃基金說

愛蘭問題解決案の進歩的なのに反し、ミルは甚だ意外な行動を勞働運動に對して採つた。それは賃銀値上運動の無意味を説いたことである。これはミルの心情の問題ではなく、彼の勞賃學說から導き出されて來たものである。ミルに言はせると、一國の全資本の中、勞賃として支拂はれ得る部分（これを勞賃基金といふ）は定つてゐる。個々の勞働者の勞賃は、この基金から分配されるものである。

だから、この基金が一定してゐる限り、個々の賃銀の大小は、これを互に分け合ふ立場に在る勞働者の數に依る。若し一部の勞働者が、勞働運動の力に依つて、その勞賃を、平均以上に釣上げたならば、勞賃基金が一定してゐる限り、他の勞働者の取り分を減らすことになるのだから、勞働階級全體としての利益にはならない。眞の勞賃増加は、勞働者數の増加を抑制しつ、勞賃基金を増加するより外にないといふのである。これだけなら單なる反動思想であつて、當時の經濟學者として、敢て珍しくも無い事であるが、後にミルがこの學說を取消したといふので、頗る有名になつたのである。

最初にミルを攻撃したのはロングと云ふ人。ミルは之には答へなかつた。その後ソーントンなる經濟學者が「勞働論」と名付くる著書を公にして、その中で賃銀基金說を攻撃するに及んで、ミルは一八六九年五月のフオートナイトリー・レビュー誌上で、この書物の紹介をした際に、遂に勞賃基金說を放棄したといふのである。これは經濟學說史家の通説になつてゐるが、嘗て經濟學史家として著名な慶大の高橋誠一郎教授は、この通説には遽に賛成し難い旨を語られたことがある。教授が現在もその様に考へて居られるかどうか知ら

ないが、私の見るところでは、其後二年にして出版された経済学原理第七版に依ると、どうもミルは自説(基金説)を翻へしてゐないのである。讀んだ方が早合點したのか、それともミルが一度は降参したが、再び考へ直したのか、どちらかであるが、兎に角、降参しなかつたとなると妙な事になる。何故なら、この論争は有名なものだし、且つミルが正々堂々と自分の非を認めたといふので、大分褒められてゐるからだ。

十 生産過剰問題

ミルの學說の中に、個々の商品の生産過剰は生じるが、商品全般としての生産過剰は起らぬといふ議論がある。第一に、人間の欲望は未だ嘗て完全に満たされた事はないし、遠からず満たされさうにもない。第二に、一般的生産過剰は一般購買力の不足といふことだが、一般購買力といふものは、結局、一般商品の販賣代金に外ならない。賣れるといふ事は買ふ力を作り出す事だ。だから、商品の市場供給は、同時に購買力を市場へ持つてくる事に外ならない。従つて、苟くも市場に供給がある以上、購買力が不足するといふ事は考へられない。換言すれば……、

市場購買力と購買力

なのだから、市場供給と購買力の喰ひ違ひが起るといふこと、即ち購買力の不足が起るといふことは考へられない……と、いふのだ。これはミルだけで無く、彼よりも先に、フランスの経済学者セイ(J. B. Say)なども同様な意見を述べた事がある。

併し、この説の缺陷は明瞭だ。成程、購買して呉れなければ販賣出来ないから、その意味から言へば、購買は即ち販賣になるが、逆に販賣したからと云つて、すぐに購買するとは限らないのだ。即ち販賣は必ずしも需要となつて現れないから、勿論兩者の喰ひ違ひがあり得る譯である。従つて、一般的生産過剰に基く恐慌は發生し得る譯である。

十一 ミルの價值論

ミルは元來が謙遜な人である。が、しかし、珍らしく非常な自信を以て發表した學說がある。それは價值論だ。

「……價值の法則に就いては、最早現代は勿論、將來の學者が究むべき何物も残つてゐない……」と、まことに氣焰萬丈である。

扱て、その所論をみると、商品を先づ三種に分ける。第一は、新たに供給を増すことの出来ないもの、例へば骨董品の如きもので、その價值は需要と供給の関係だけで定る。第二は、供給は増すことが出来るが、

コストが高くなるもので、これは需給關係と生産費に依つて價值が定る。需給關係は其時々々の市場値段の變動を説明するものであり、生産費は市場値段の中心たる長期價格を決定する。勿論、この場合、最も安く生産する者の生産費が支配する。一般の工業品の價值はこの原則で定る。第三は、同じく供給は増せるが、それに従つてコストが高くなるもので、例へば農産物の如きものだ。これも日々の市場値段は需給關係で定るが、長期價格は實際に供給してゐる生産者の中で、最も不利な條件で生産してゐる者の生産費、つまり最も高いコストで生産するもの、生産費で定るといふ。これだけの範圍では、ミルの價值論は、リカルドオのそれと同じであるが、生産費の觀念が少し違ふ。リカルドオは、主として生産費は労働で定るものと考へた。ミルも勿論それが重要な要素であることは認めるが、利潤や税金などを一層重く考へた。即ち經營者の費用で定るものとみたのである。

ミルの價值論が正當か否かは、別問題として置く。たゞ、ミルの非常な自信にも拘らず、ミル以後に於ても、價值論は随分と進歩してゐることだけは事實である。

十二 「その通り」

ミルは、只一度だけ、代議士になつた。六十歳の時である。

その選舉演說會場での話……。

聴衆の大部分は労働者だつた。ミルが演壇に立ち上つた途端に、一枚のビラが彼の手に渡された。何氣なく讀むと、ミルといふ男は、英國の労働階級について、概してうそつきだと書いたことがある、と記されてゐる。無論、反對黨が配布した逆宣傳のビラなのだが、果して事實かと聴衆から尋ねられた。考へると、成程ミルには覺えがあつた。正直なミルは即座に答へた……。

「その通り！」

途端に滿堂拍手の嵐が捲き起つた。一人の労働者が立上つて、吾々労働者は決して阿諛者を求めてゐない。若し吾々に改む可き點があれば、腹藏なく言つて呉れる人にこそ、深く感謝する者だと述べた。クドク辯解などしないで、一言「その通り！」と答へるのは、不正直で卑怯な人間には出来ないことだ。ミルは大きな信用を得た。その爲ばかりでは無論なかつたが、完全な理想選舉に依つて、ミルは當選したのである。

議員としての活動は、特に華々しいものではなかつたが、實に眞面目な態度を以て、終始一貫してゐる。大宰相グラッドストーンの選舉法改正案に對する賛成演說の成功以後、自分以外の議員でも出來そうな事柄に就いては、極めて控へ目な態度と行動とを採つた。彼が演壇に立つ場合は、自分自身の所屬する自由黨と異つた意見を持つてゐる場合か、さもなければ、彼等が無關心ではあるが、非常に重要な問題の起つた時だけに限られてゐた。

彼の主張したことの中で、婦人參政權、比例代表、ロンドン市自治制などは、良く彼の立場を表したものである。

愛蘭獨立運動の反亂に参加したパーク將軍の救命運動や、西印度のジャマイカに起つた暴動鎮壓に際し、軍隊の暴行や軍法會議に依つて、多數の無辜の土人を殺戮したエヤー西印度總督を執拗に弾劾したことなどは、彼の正義感を立證するものであらう。

十三 ミルと社會主義

ミルは、往々、社會主義者であつたと評される。成程、經濟學原理の第一版こそは、社會主義の難點を述べてゐるが、版を重ねるに従ひ、次第に同情的態度に變つて來てゐる。併し、ミルは社會主義に對する賛意を明白に示したことは遂ぞない。その上、少くとも當面現實の問題としては、時機尙早だと書いてゐる。その理由は、人類一般殊に労働階級は、知能及道德を大いに必要とする事柄に對しては、未だ極めて不適當だと言ふのである。

元來、ミルの意見に依ると、人の性格は環境の産物である。例へば現代人は利己心が強いが、これは必ずしも人の本性ばかりから來るのではない。社會制度が利己心を發達させる様に出來てゐるからだと言ふ。そ

れなら労働階級の精神的道德的狀態に就いても、同じ様に考へられさうな氣もするが、そうは考へなかつた。ミルは經濟學原論の中で、「労働階級の將來に就いて」といふ一章を設けた事を非常に重要視して、然もこれがテラー夫人の力に依つたことを述べてゐるが、實はその内容は、さして尊重に値するものではない。元來ミルは労働問題に就いて同情をこそ持つてゐたが、決して深い研究を遂げてゐた譯ではない。先に選舉演説のことを書いたが、ミル自身も言つてゐる通り、この時に、初めて彼は労働大衆に接したのである。六十歳まで労働大衆を知らず、六十六歳で死んだ人を、社會主義者だと評するのは當つてゐまい。ミルは社會主義の理論的な決定さへも行つてゐない。社會主義が良いかどうかを決定することは、もつと道德的精神的教養がたかまつた時代の人に委す可きで、現代人(ミルの時代の人)には、その資格が無いと言つてゐる。その點、矢張り彼は自由主義者であつた。

この事だけに限らず、ミルの思想は不徹底なところがある。或學者が、ミルは編輯者だと評したが、成程うまい言葉である。ミルは彼以前の種々な思想や學説を、非常に多く採入れてゐる。殊に感ず可きは、それらに對する態度が公平なことである。併し、不幸にして、それが渾然一體をなすといふところまで行つてゐない。寧ろ雜然と集められてゐる感が無いでもない。従つて、各所に矛盾が現れてゐる。この不徹底さは、勿論ミルの時代が、過渡時代であつたからではあるが、中庸を好む性格に加へて、夫人の影響があるやうに思はれる。自傳を讀むと、ミルの思想が、或は極端に走り、或は抽象的になり過ぎようとする場合、夫人が

常にブレイキの役目をしても呉れた事を感謝してゐる。由來、女といふものは甚だ具體的な考へ方をするものである。同時にまた、透徹性に乏しいものである。夫人の強い影響の下に置かれたミルが、常に現實を忘れることの危険を免れた反面に、思想の明確性と透徹性を缺いたことは、自然の成行であつた。人生萬事、一利一害は免れ難いことを、泌々と感じさせられるのである。併し、夫人の存在を以て、一利一害などと云ふのは、後世の人々からみた話だ。ミルにとつては百利無害に思はれたであらう。

夫人は一八五八年、夫君と相携へてモンペリエに赴く途中、アヴィニオンの町で、突然倒れ、再び立たなかつたのである。その時以來、ミルは夫人が尙身近きにある如く感ずる最良の方法として、その墓の近くに一軒の家を買ひ求め、夫人の忘れ形身である娘と共に、餘生の大部分をそこに過した。そして、一八七三年六十六歳の生涯を終つたのである。

思へば、仕合せな學者であつた。

第六章 セイの經濟思想

一 佛蘭西のアダム・スミス

これまで、スミス、マルサス、リカルドオ、ミルと、英吉利に於ける自由主義經濟學發達の經路を、辿つて來た。

今度は一つドーヴァ海峡を渡ることにならう。佛蘭西……。

こゝでは、誰をさしおいても、「フランスのアダム・スミス」と言はれるジャン・バチスト・セイ (Jean Baptiste Say) に見參せねばならぬ。と、言つて、セイが現存してゐるわけでは、無論ない。彼は今を去る百七十年の昔、六十六歳で他界した。その生涯は實に多彩。學者としては異例といふ可き程に變化が多かつた。一七六七年一月五日、東南佛はリヨンの町に商人の子として生れた。リヨン灣に注ぐローヌ河を遠く遡

り、ソーヌ河が之に合流するところ、細長い狭い平野の中に、昔から織物産地として名高い町、それがリヨンである。固より商人として立つべき教育を受けたが、父の破産に逢ひ、十五歳の時パリに出て銀行の使用人となつた。幸にも数年にして家産は稍々回復したので、弟と二人、商業研究、特に英語研究の目的で英國に渡つた。年齒十九。倫敦郊外のクロイドンに貸間を見付けて落着いた。その室には窓が二つあつた。恐らく兄弟が一人づゝ窓邊に机を置いたことであらう。

或日ドアがノックされた。二人の職人風の男が入つて來た。

「窓に手を入れに參つたんですが」

「どうぞ」

別段毀れてゐる譯でもないのにと見てゐると、煉瓦や漆喰を運んで來る。妙だなと思つてゐるうちに、煉瓦を一方の窓の所に積んで漆喰で固め始めたのである。セイは、驚いた。

「どうするんです？」

「窓を潰しますんで」

「潰す？ 眞暗になつちまふぢやないか」

「いゝえ、一つだけなんで」

「笑談ぢやないよ。だけど、どうしてそんなことをするんですか？」

「窓に税金がかかる事になつたんださうです。それで家主さんが窓を一つ潰せとおつしやるんです……」

「フーム。ぢや他の家でも皆さうやるんですか」

「へえ。まあ、大ていのお宅ぢやさうなりますでせう」

「潰しちまへば税金は取られない譯か。成程ね。……税金で妙なもんだなア」

これは英國議會が、新に門税及び窓税法案を可決した際、セイが出會つたエピソードだ。後年彼が好んで人に語つた話でもある。

倫敦遊學約二年。パリへ歸つたが、こゝで人生行路に迷つた。セイ自身は商業よりも學問がしたかつた。しかし、又そろ／＼家計が怪しくなつたので、決心して保險會社に入つた。ところが、その會社の専務取締役が、たゞの専務さんではなかつた。後年、代議士となり、更に大蔵大臣となり、更に昇つてと云つても總理大臣にまで昇つたのぢやない。ギロチン（斷頭臺）に上つて刑場の露と消えたのである。その名はエテイエンタ・クラダエー。別に罪を犯したからではない。フランス大革命の暴風雨の中に、ジロンド黨員と共に消えて行つたのである。

この専務さんが、讀めと言つて貸して呉れた、一冊の書物があつた。

スミスの「國富論」！

セイはこの借用本を一讀して、非常なインスピレーション（靈感）を感じた。早速ロンドンから一部を取

寄せ、瞬時も手離さず、釋評を記入しながら、繰返し／＼讀んだ。孔子は易經を反覆熟讀し、革の綴絲が三度も切れたといふ。恐らくセイ愛讀の國富論の皮表紙（當時の國富論は革表紙だった）も、擦り切れたことであらう。「兄さんはスミスに依つて經濟學の門に入り、スミスに導かれて自分の考を持つ様になつた」と、セイは、弟への手紙に書いてゐる。

青年時代に、かくも感激を覺える様な書物に出會ふことは、人生の一大幸福には相違ない。けれども、他の半面から見れば、三つ子の魂百まで、その強大な影響を脱し切ることが極めて困難でもある。ジャン・バチスト・セイの場合は、特にその傾向が強かつた。彼の經濟思想は、その骨組も傾向も著しく、スミスのであつた。經濟學史家の通説に依れば、彼は結局スミスの評釋者であり、普及家である。が、しかし、流石に彼自身の獨創も加へられてはゐる。

その點は後で書くとして、大革命が勃發し、大切な専務さんも死刑に遭つて了つたりしたので、セイはジャーナリズムの人となり、大革命後ミラポールの發刊した雑誌「クリリエ・ド・プロヴンス」の事務所で働いてゐた。ところが、父親は革命政府を絶對的に信頼してゐたため、その發行するアッシニア紙幣の濫發に遭つて、又々破産に瀕した。よく／＼貧乏神にとりつかれた父親である。アッシニア紙幣と云ふのは、革命政府がフランスの國土を見送りとして發行した不換紙幣。ルール紙幣が銀座の夜店で賣られる様になるまでは、暴落紙幣の御手本として、世界的に有名なものであつた。セイは父の破産に遭遇して、止むなくプロヴ

アンヌ社を罷めることゝなつた。

二 セイとナポレオン

そこへ一大國難が襲來した。反革命の外國軍隊の侵入である。セイは直ちに志願兵となり、「學藝中隊」に編入された。これは、當時、有名な文人藝術家達が多數所屬した部隊、さしづめインテリ部隊である。シャンパーニュの野に、日夜轉戦したが、革命政府軍の勝利となつて凱旋。數年間は雑誌の編輯に従事してゐたが、後に執政官政府の法制委員に就任した。併し、この委員會は、實はナポレオンの傀儡に過ぎないことが解つた。信念の強いセイは之に大きな不満を感じ、勇敢にもナポレオンを向ふに廻して戦ひ、到々失職して了つた。セイは書いてゐる……。

「主權者には眞面目に歐洲の平和と佛蘭西の幸福とを圖る意志が無く、徒らに自己一身の大を欲した。自由も權利も公衆の目を眩す装ひに過ぎなかつた。欺く事も買収する事も出来ない人々に對しては、武力を背景とする辛辣な行政的抑壓が加へられた。私はかうした専横に與し得なかつた」……と。

然もこの間に、セイの經濟學研究は益々進み、遂に一八〇三年、大著「經濟學」第一版は刊行されたのである。この書物は世人の熱狂的歓迎を受けた。すると或日のこと、セイはナポレオンからマルメイゾンの宮

殿に招かれた。食後、ナポレオンはセイを誘つて後庭を逍遙しながら、自分の財政復興策を打明け、國家の爲には是非とも之を遂行しなければならぬ、それにつけても、政府の非理を指摘した「經濟學」の論調を國策の方向に添ふて改訂しては呉れまいかとの話であつた。一本氣なセイは之をき、入れず、そのために法制委員會を放逐された。そして、ラリエ縣の間接稅長官といふ椅子が提供された。併しセイは飽くまで一木氣だつた。自ら非なりと信ずる財政策の實行に協力することは、その潔癖がゆるさなかつた。幾何の蓄財もなく、六人の子供を抱き乍ら、斷乎、新しい地位を拒んで野に下つた。と言つて、文筆を以て立つ事も出来なかつた。何故なら、ナポレオンの警察政治は峻嚴な思想彈壓となつて現れ、家宅搜索と原稿沒收が頻發し、セイも「經濟學」第二版の原稿を匿さなければならぬ始末だつた。止むなく共同出資者を探し、少額の蓄財を資本に、田舎町で小さい紡績工場を始めた。幸ひこれは成功したが、棉花に高率關稅が賦課されることになつたので、前途を諦め、パリに歸つたのは一八一三年であつた。

翌十四年ナポレオンはモスコで敗戦、エルバ島に引退することになつた。政變のドサクサ紛れに、セイは「經濟學」第二版を刊行したのである。露軍のお蔭で第二版が出せた譯だ。そのためでもあるまいが、第二版の巻頭には、露帝アレキサンドル一世に捧げる献本の辭を載せてゐる。

それは兎も角、この第二版以來、セイは再び學問の人となつた。一八三二年十一月五日、突然！發作に襲はれて永眠するまで、熱心な經濟學者であつた。

三 目ざましいその時代

こゝで一轉して、セイの時代を顧みよう。

これは又、恐ろしく見覺しい世の中であつた。ミラボー、マラー、ダントン、ロベスピエール、そしてナポレオン！近世西洋史上に判然と、その名を残した人達が、ズラリと並んでゐる。

事件としては、何よりも先づ一七七六年のアメリカ獨立戰爭を挙げねばならぬ。これはアメリカが、單に英國の版圖を脱しただけではなく、更により大きな意味があつた。獨立革命は、徐々に發展して來たアメリカ工業者が、一面に於て英國工業の支配から脱脚すると共に、他面、自國政權の把握に成功したのである。この事は、どれだけ歐洲大陸の中間階級、即ち商工階級の士氣を鼓舞したか知れなかつた。元來フランス革命は、決して獨立革命の産物ではない。封建經濟の行詰りによるものではあるが、海の彼方に自由の國が建設されたといふ事は、封建的重壓を撥ね返さうとする力に、著しい拍車となつたことは否めない。殊に、對英關係から、フランスはアメリカ獨立軍に援兵を送つてゐる。これ等の歸還兵は、自由主義の洗禮を受けてフランスに戻り、之を國內に傳播したのである。

國內的に云へば、佛蘭西各地方、終ひにはパリに近い處にさへも頻發した農民一揆。やがて一七八九年

七月十四日のバスチーユ牢獄破壊に端を發した大革命。國內の貴族等と策謀した反革命外國軍の侵入。革命政府の弱體化からナポレオンを中心とする執政官政府の支配。埃及遠征。ナポレオン帝制の樹立。外征の失敗によるその退位。ブルボン王朝の復活。ナポレオンの再起。ワーテルローの敗戦に起因する共和政府の樹立。全く目まぐるしいばかりの世相であつた。

これを經濟的に見れば、英國は産業革命の速度が次第に加つて、一七七六年には經濟的自由主義の巨弾アダム・スミスの國富論が發刊され、同じ年に完成されたワットの蒸氣機關が着々と工業化され、工業生産は旭日昇天の勢であつた。フランス自身の經濟は、大商人の支配が著しく搖ぎ始め、その政策たるコルベール主義（宰相コルベールの名に因んで呼ばれた重商主義）が、封建的農業經濟と、新しく興起して來た工業とに對する矛盾から、その勢威を失つた時代である。一口に言へば、英國のやうに一本槍ではないが、正にフランス産業革命の時代であつた。

思想的に見れば、汎ゆる方面に於ける束縛の打破と、自由主義とが高唱された。之を經濟思想にしては重農主義（Physiocracy）の興隆時代である。重農主義とは宮廷の侍醫フランシア・ケネー（F. Quesnay）を開祖とするもので、農業のみが眞に生産的だといふ理論を基礎として、富の生産及び循環を説明した思想だ。（學者に依つては、經濟學の始祖はスミスでなくてケネーだと云ふ人さへある位である。）政策の基調としては絶對的自由放任主義で、これは商工業に對するコルベール主義の拘束や、農業に對する封建的束縛、その他一

切の封建的政治形體の解放を要求するものであつた。爲すに委せよ、往くに委せよ、世界は自らその向ふところに向ふのである。これが彼等の哲學だつた。併し、重農主義といふ譯語や、彼等の表面的な言葉に欺かれて、之を以て農業の利益を代表する思想と思ふのは間違ひだ。否、その反對に、重農主義は新興工業の爲に經濟的自由を獲得すると共に、一切の財政的負擔を農業に負はせようとする思想でもあつた。その證據には、重農主義者等は農業單稅論なる説を高唱した。それは、農業のみがこの世で生産的であるから、一切の租税は土地に賦課せよ、即ち地租だけにせよと、説く主張である。

セイが生れ、成長し、學問をしたのは、實にこのやうな時代であつたのだ。

四 セイの學問的傾向

セイの「經濟學」(Traite d'Economie Politique, 1803)は、頗る大部の書物である。日本譯にすると菊版千四百頁もある。但し、その内容は決して驚くほどのものではない。何故なら、それは、アダム・スミス經濟學の一種の改訂版だからである。セイはスミスを信奉し、その學説を大陸に普及する上に、實に偉大な功勞者であつたのだ。

彼は自ら言ふ如く、スミス主義者であつた。公益と私益の矛盾は部分的で、結局兩者は自然に調和するも

のであること、従つて、國家權力は治安・國防・教育、そして、僅少な特殊業に限定さるべきものだと考へた點、産業發達の限度は資本の分量に依ると説いた點など、すべてセイはスミスの學說を、そのままに再現してゐる。(本書第二章參照) セイはスミスを一層詳説し平易にしたが、平易化には俗流化の危險が伴ふ。セイにもその點はある。

それなら、セイには何等の創見もなく、學ぶべき點もないか？
そうとばかりは言はれない。

五 經濟學三分法

經濟學者セイは、前章に書いたミルにも匹敵する篤學である。スミスの通俗化ばかりやつてゐた譯では決してない。その功績の一つは、經濟學三分法と呼ばれて、今に残つてゐるものである。これは經濟理論を、生産論、分配論、消費論の三つに分けて論述した事だ。

三分法は、それ自體としては、大して價值あるものではなく、四つに分けても五つにしても大同小異だが、セイの三分法が經濟學を整頓する上に役立つことは、無比の功績であると云つても過言ではない。然もセイは、單に三分しただけではなく、術語や理論の排列連絡を整備して、學としての形を整頓した。その點、

經濟學の發達史上、まさに殊勳甲である。

それでは、セイの獨創的なものは何であらうか？

先づ挙げねばならぬものは、生産力問題に就いての所説である。

六 生産力問題

話はチト古くなるが、労働や産業は昔から尊重されたものではない。古代ギリシヤでは卑下されてゐたものだ。特に商工業労働についてはその傾向が甚しかった。これは労働が主として奴隷の仕事だったからだ。今日のやうに學生の労働奉仕など、聞いたら、ギリシヤの文部大臣は激怒したであらう。労働尊貴の思想は、額に汗して喰ふことを説いたキリストに始まる。近世になつて大分改つたが、それでも農業尊重、商工業輕蔑の傾向は容易に抜け切らず、フランス重農主義學說を見ても、眞に生産的なものは、自然が援助する農業だけで、商工業に依つて齎らされる價値の増加は、結局人間の勞力支出とトン／＼だから、實は不生産的なものだと言張された。スミスは、勇敢にもこの説を訂正して、工業労働も生産的だと唱へた。セイは更に數歩を進めて、商業は勿論のこと、醫者も、辯護士も、歌手も、悉く生産者だと看做した。このことは、スミスとセイとでは、富及び生産に關する考へ方が違ふ處から出て來た相違である。スミスは有形物を富と

考へた。従つて、有形物を生産する者だけを生産者と考へ、僕婢や醫者の労働は不生産的だと言つた譯だ。ところが、セイによれば、富とは價值（交換價值）を有するもので、價值の第一要件は効用である。効用とは人の欲望を満足させる能力である。それ故、効用を造り出して、價值を生むものは、總てこれ生産的だといふ結論になる。セイの論法によると、エノケンやロツバも、人を喜ばせ樂しませて、報酬を得てゐる限り、それは矢張り生産的である。現にセイは喜劇役者の例を擧げてゐる。併しながら、スミスと雖も、國家の安寧、平和、防禦などが役人の労働の結果である事を、認めなかつたわけではない。たゞ、この種の勞務の結果は、生産される瞬間に消失せて了ふものであるから、生産物を生産しな^らずと、主張したに過ぎない。セイはこの「瞬間に消失する」といふ第二次的な條件にこだはつて、スミスを批難したのである。

七 その價值論

スミスに對するセイの反駁は、これだけではなかつた。

經濟學の根本たる價值論に就いても、スミスの説を批難する。スミスは必ずしも労働價值論者ではないのに、セイは「國富論」の或個所に捉はれて、スミスを労働價值論者だと思ひ込み、「スミスは生産といふ現象を、その有らゆる方面から觀察する事がなかつたと稱しても憚るところはない」と、書いてゐる。が、しか

し、事實は反對だ。さまざまな方面から觀察して立論したればこそ、スミスの價值論は混亂に陥つたのである。

扱て、それでは、スミスに對してセイが提唱する價值論はどのやうなものであるか？ 先に一言した通り、彼は効用のある事が價值の第一前提だといふ。わかり切つた話で、役に立たないものに價值のあらう筈はない。（最も徹底的な労働價值論者であるマルクスさへも之は認めてゐる。）併し、セイのこの言葉一つを捉へて、直ちに彼を効用價值論者であると斷定するのも間違ひだ。或價值學説が効用價值論であるか、どうかを決定する尺度は、その價值論の中に効用が採上げられてゐるか否かの問題ではない。價值の大小が、効用の大小に關係すると考へられてゐるか、どうかの問題なのである。セイは、價值の前提として、効用の必要を説いた。併し、價值の大小がこれに依つて定ると説いたのではなく、寧ろそれは生産費に依るものだと書いてゐる。セイ自身の言葉を引用すれば、「生産物の價值に於ける眞實の變動とは、その生産に要する費用の受ける變動」なのである。

だが、これだけでは、問題が解決されたわけではない。

然らばその生産費（投下労働・消費原料・資本の消費部分などが含まれる）の價值は何によつて定るか？ それは又その生産費だと答へるのである。これでは、まるで、環狀線のぐる／＼廻りだ。どこまで行つても果しがない。だが、これはセイだけではなく、生産費價值論者に共通な缺點なのだ。こんな事に、何故、氣

が付かないかと言へば、それは、彼等が、知らず識らずの間に、企業者の立場でものを考へてゐるからだ。企業者に必要なのは、自分の生産物の原價計算で、仕入れる原料や機械その他のもの、原價計算、即ち「生産費」そのもの、原價計算は、問題にならないからである。

八 販路の理論

セイの思想で、も一つ注目すべきものは、「販路に関する理論」だ。これは、セイが内心頗る得意で、強い自信を以つて主張したところである。曰く――

「自然界を人類の支配の下に齎したものは、熱と槓杆と斜面の理論である。やがて世界の政策に變更を來さしむるであらうものは、交換の理論と販路の理論である。」と。

物凄い自信振りである。では、その交換の理論と販路の理論とは、一體どんなものであるか？ 決してむづかしいものではない。

セイに依ると、賣買といふことは、結局、商品と商品の交換とで、貨幣は單なる仲介物に過ぎず、滑油に過ぎない。商品が賣れるのは、買手が購買力を持つてゐるからである。然るにその購買力は、どうして出来たものかと云へば、買手が自己の生産物（勞務も入る）を賣つたから出来たのだ。それ故、結局、生産物の

販路を開くものは、他の生産物だといふ理窟になる。その結果、一般的生産過剰恐慌などは起る筈が無い、といふ結論が出来てる。

部分的には生産過剰が起つて、ストックが出来るとか、値段が暴落するとかいふことはあり得るが、これはその生産物の販路を開拓す可き他種物の生産が少したために、これを購入すべき購買力が不足してゐるに過ぎないからである。

もつと澤山に物が生産され、且つ販賣され、ば、それに伴つて、當然、購買力が發生し、過剰と考へられてゐる生産物も賣れる筈だと説く。

これがセイの販路理論だ。一時流行した生産過少恐慌論と軌を一にするものである。ミルもれこと同様な説を樹てたことは、前章に書いた。

一見、これは巧妙な學説である。併し、注意深く吟味すると、重大な誤謬が含まれてゐる。何故ならば、資本主義の社會では、たゞ賣れ、ばそれでいゝのではない。相當の利潤を得て賣れねばならぬ。近頃社會奉仕といふ言葉をよく商店などで聞くのであるが、本當に社會奉仕ばかりをやつてゐれば店は忽ち破産である。セイの論法を以つてすれば、それをしも購買力がまだ不足してゐるのだ、即ち他の生産物が過少なのだと考へるかも知れない。が、しかし、あまり他物を生産すると、こんどはその品物が過剰になつたり、値段が暴落したりする。これは、つまり最初の過剰品の方が今度は逆に過少になることを意味する。これでは追ひか

けごつこできりが無い。

この理論の根本的缺陷の第一は、セイ自身の主張を裏切つて、彼が経済界の實際を忘れ、賣買と物々交換とを同一視したことにある。

物と物との直接交換は、たゞ一回の交換で済むけれども賣買に依る物の交換は、賣と買との二つの交換がなければ、物と物との交換にはならぬのだ。ところが、この二つの行爲は、金額的にも、時間的にも、必ずしも、合致するものではない。

例へば、人は販賣代金をすぐに他の商品の購入に當てるとは限らない。従つて、販賣は直ちに市場の購買力となると考へるのは誤りだ。その上、資本主義社會の販賣は、いまも述べたやうに、たゞ賣れ、ばそれでいいのではなく、相當の利潤を得て賣られなければならないのだ。適當な値段で賣らねばならないのだ。利潤を考へないで賣るのは、屑屋にボロを賣る時だけである。

尙、一段と堀下げて考へれば、この一大學説の缺陷は、更に、より深い處にある。それは、資本社會の恐慌（一般的生産過剰）を、單に賣買に依つて、流通過程に依つて審判しようとしたことの誤りである。こゝで恐慌の理論を説明することは、複雑に亘るから割愛するが、恐慌は分配制度と生産制度との根本機構から發生するものなのだ。

滞貨激増、價格暴落といふ流通上の出來事は、單にその根本的なもの、現れに過ぎない。賣り度くもない

のに商品を生産する者がどこにあらう。商品は貨幣化を目標にしてゐるのであるが、實際には、それがなかなかスムーズに貨幣化され得ないのである。そこに恐慌の原因が育まれるのだ。

九 セイの功績

以上、セイが経済思想の大要である。

多少悪口もならべた。しかしながら、スミスに依つて経済學が創設されて以來、僅々二十餘年で、セイ程にスミスを深く理解し、且つ経済學の體系を整頓し、或程度の獨創を加味し得たといふことは、凡人のよく成し得るところではない。殊に、當時はフランスの大學にさへ、経済學の講座が無かつた時代である。それを思へば、セイの學界に残した功績は偉大である。

一八二〇年、初めて工藝學校に、そして、一八三〇年、コレージュ・ド・フランスに、経済學の講座が設けられた時、いづれからも、セイは迎へられて、その講義を擔當し、著書と講義とに依つて、自由主義經濟學を祖國フランスに普及せしめたのである。

セイと呼ばれる「一粒の麥」が、ヨーロッパ大陸で始めて芽を出し、纏て、それが急速に繁殖して、自由主義經濟學を傳播徹底せしめて行つたのである。

その意味では、彼は、正しくフランスのアダム・スミスであつた。その名は、經濟學の歴史上に、大きなスペース（紙幅）を要求する價値が十分であつたのだ。

第七章 恐慌の經濟學

一 時の流れ

英國では、第十九世紀の初め三十年の間に、所謂産業革命は一應完成された。

經濟的自由主義は到る處に凱歌を奏し、手工業者組合の最後の據點であつた徒弟法も、一八一四年に廢棄された。最早や、自由放任と自由競争とを阻み得る勢力は何一つとして残されてゐなかつた。佛蘭西では、英國ほど急速な近代化は行はれなかつたが、それでも英國のバーミンガム、マンチエスター、グラスゴウなどに大工業が發達したのに対応し、リール、セダン、エルブフ、ミュールーズなどが大工業生産の中心地となつた。併しながら、このやうな輝かしい自由主義と近代工業との勝利の反面には、識者の心を痛ましむる二つの新しい現象が、次第にクロゾアツプされつゝあつた。勝利の裏には暗い影が漸く色濃くなつて行つたのだ。

それは新しい悲惨な階級即ち工業労働者階級が発生したこと、生産過剰に基く經濟恐慌が、頻々として襲來するやうになつたことである。これは正しく世紀の大問題であつた。

それでは、當時の經濟學者達は、この問題に向つて、どのやうに對處したであらうか？

二 正統學派の缺陷

アダム・スミスに始まり、マルサス、セイ、リカルドオを経て完成された經濟學、即ち正統派の經濟學は常に資本と資本制生産との讚美を基調としてゐた。これは正統學派なるものが産業革命と共に始まり、共に發達した經濟學であるから、誠に自然のことであつた。スミスの國富論が生産力増大を主眼としたものである點は、その「國富論」が分業を起點として、書始められてゐたのを見ても了解される。リカルドオは分配を論じたけれども、それは單に賃銀、利潤、地代などが、どんな經濟上の法則に従つてゐるかを説明した、けた。本來の分配問題即ち「分配と幸福」との問題を論じたのではない。マルサスだけは眞正面から「貧乏は如何にして發生するか」の問題を取上げた。着眼はよかつた。これこそは分配問題の大眼目である。だが、しかし、その主張する處は、貧乏は人口の増加力と食物増加力の不釣合に基くもので、社會制度や經濟制度の如何に由らないといふのであつた。スミスの代用品とも云ふべきセイの見解は、既に前章で述べた通りである。勿論、正統學派の學者達と雖も、經濟制度の根本的變革期に發生する労働大衆の困苦を知らなかつたわけではない。けれども、かうした弊害は、一時的の事だと軽く考へて了つたのである。

併し、現實にそうした弊害の中に投げ込まれた者は、一時の事だと済してはゐられない。何等かの努力をして、之から免れ出ようと試みざるを得ない。そこでラダイト運動 (Luddite movement) などのやうなものが起つた。これは一口に申せば、機械を破壊せよとの運動だ。これまでに度々述べたやうに、産業革命の技術的特質は生産の機械化であるが、これに依つて舊來の手工労働者はその地位を喪ひ、新しい機械が使用される度に、労働者は失業者となつて、大量的に街頭に投げ出された。労働者は機械を憎み呪つて、之が使用廢止を政府に嘆願し、それが容れられなかつたので、大舉して機械破壊を行ひ、各地に非常な騷擾を捲起した。これがラダイト運動といふもので、近世労働運動の最初の形態であつた。此のやうな問題に對して、正統學派の學者達は、機械の使用がその産業に従事する労働者を失職させることは事實だが、他面、例へば新機械の製造や、之に伴ふ各種の労働需要が新しく生れるから、結局、失業労働者は、やがて新産業に吸収される……心配はないと説いた。確に全體として、そうした傾向のある事は認められる。が、労働者にとつて、轉業はそのやうに容易なわざではない。轉業の場合には労働條件が低下するのが普通であり、殊に失業と新就業との間に横たはる時間といふことは、決定的な問題である。困るのは獨り労働者ばかりではない。手工業小規模生産者も、亦、機械の發明進歩に依つて、致命的な打撃を受けた。中産階級の轉業は、時としては、

労働者のそれよりも更に困難だ。斯うして、舊中産階級の没落は、産業革命の進行した國々では、最も大きな社會問題の一つとなつた。此のやうな時代に、いま述べた社會問題を輕視する經濟學に對し、批判の聲が放たれるやうになつたのは當然である。

その最初の批判者は一體誰であつたか？

これから解説するシモン・ド・シスモンデイこそは、正にその人であつた。

三 シスモンデイ素描

彼は普通にはシモン・ド・シスモンデイと呼ばれてゐる。が、正確にはジャン・シャルル・レオナルド・シモン・ド・シスモンデイ (Jean Charles Leonard Simonde de Sismondie) といふ長い姓名である。經濟思想史上、おそらく最も長い名前である。この人は一七七三年五月九日、風光明眉なスキスはジュネーヴ湖畔に、伊太利貴族を祖先とする名家に生れた。この土地は、嘗て、フランス大革命の精神的父とも申す可きジャン・ジャック・ルソーを産んだ土地である。シスモンデイの幼年時代に、此の地方に充ち満ちてゐたものは、その美はしく靜かな風景とは、似ても似つかぬ動搖と革命の空氣であつた。シスモンデイが十歳の頃、最も好んだ遊びは「共和政治ごっこ」である。それは、子供達が自らルソーの紀念碑を建立し、こゝを集會

場と定め、「共和黨」が建國の大業を行ふといふ遊戯だつた。その「共和黨ごっこ」で、シスモンデイは大統領に推舉されるのが常だつた。その時、年十歳の小さい主權者は、滔々十四頁に亘る論文と宣言とを起草した。その宣言によれば、共和國に於ては萬民悉く有徳方正にして幸福であるといふ。この少年時代の夢が、やがて、後年のシスモンデイを作り出したのである。

彼の生涯は稀にみる波瀾のそれであつた。キリスト新教の學校に學んだが、卒業後はリヨン市(前章に書いたセイの故郷)に赴いて商業見習に従事した。これは父がネツカー(大革命直前のフランス蔵相)の財政々策を信用して、資産の全部を佛蘭西公債に注ぎ込んだ爲、殆んど破産して了つたからであつた。もともと商賣など、彼の好む處ではなかつた。併し、よくその嫌ひな商業に従事し、これが動機で、後年、經濟學に精進するやうにもなつたのである。

一七九二年(大革命は一七八九年に始まる)リヨン市に起つた革命騷擾の爲、彼は再びジュネーヴに歸つたが、革命の猛火はこの山紫水明の仙境をも延焼した。民衆は貴族のシスモンデイやその父を獄舎に投じ、一切の資産を沒收して了つた。その昔、伊太利を亡命して佛蘭西にのがれ、更に佛蘭西を遁れてスキスに移り住んだシスモンデイ家は、又も、こゝを離れて、一七九三年英國に渡つたのである。滞在一ヶ年半、シスモンデイの母親が望郷の念止み難く、危機尙去らぬジュネーヴ湖畔に再び歸つたのであるが、民黨の爲に追放された前市政官カイラを匿つた爲に、その家は憲兵に襲はれた。カイラは從容として縛に就き、遂に銃殺

された。そこでシスモンデイ家は、又もダスカニーに移つて小農園を求め、彼は晴耕雨讀の生活を始めたのである。併し、農園での生活も、決して平穩なものではなかつた。この地は塊大利人と佛蘭西人の手によつて、交互に支配された。彼は塊人の手で二度、佛人の手で一度、逮捕幽囚の憂目をみたのである。

だが、シスモンデイは経済學研究には熱心だつた。この波瀾の間に、タスカニー農業論を執筆し、更に伊太利の歴史研究に従事した。元來、彼は純粹な經濟學者ではなく、同時にまた歴史家でもあつた。この歴史家であつたといふ事から、正統學派に對する彼の反逆の第一歩は踏み出されたのである。

四 「生産」から「幸福」へ

シスモンデイ自らも認めてゐる通り、アダム・スミスの經濟學は多くの抽象的立論を持つてはゐたが、同時に多くの現實性と具體的觀察とを兼ね備へてゐた。ところが、其後の經濟學者、殊にリカルドオを指導者とする人々は、經濟學を著しく抽象的なものと考へ、經濟生活の機構を機械的に認識し、經濟機構の活動から生れるさまざまの派生的事實を、輕視し看過した。特に注意すべきことは、資本主義經濟機構を、絶對的な、不變的なものと看做した點である。必ずしも之を明言はしなかつたけれども、經濟學の法則は時と處とを問はず、常に適用されて誤らないものであると説いたことから考へても、彼等が此のやうな信念を持つて

ゐたことは明白だ。併し、そうした抽象的な非歴史的な考へ方を、歴史家たるシスモンデイが承認しなかつたのは當然だ。彼は、先づ、經濟學の抽象化に反對した。經濟生活なるものは、決して他の社會と分離して存在するものではなく、廣く社會の歴史的環境の裡に、他の生活面と密接に結び付いて存在するものであるから、經濟生活だけを無理に切離して研究しても、それは、決して眞實の具體的な經濟生活の研究にはならない。されば、經濟學は總體的な、社會的な、歴史的な見地から研究されねばならないと、彼は考へた。

單に研究法ばかりでなく、研究の對象そのものに就いても、シスモンデイは、正統派とは對立の立場に立つた。彼の意見に依れば、正統派の經濟學は、富と富の増加とを以て研究の主眼とするもので、いはゞ致富の學問であるが、まことの經濟學はそんなものではない。眞の經濟學は人間の幸福を對象とすべきものだ。富それ自身が問題ではない。富がどう分配されるかといふことが、人間社會の幸福にとつて問題なのである……。そこでシスモンデイは經濟學の基調と問題とを、分配と消費とに置くべきだと考へた。

扨て、人間の幸福といふものが問題の中心に置かれるなら、その思想の中には、著しく道徳的倫理的なものが入つて来るのは自然である。生産の觀點を離れ、分配と消費との觀點に立つて眺めた時、シスモンデイの周圍には、悲惨目を蔽はしむるやうな事實が、無數に横たはつてゐた。日々に没落して労働者の群に墮ちて行く多數の農民や手工業者、そして、今日の常識では考へ得られないほど、みじめな労働者の待遇！シスモンデイならずとも、誰かこれを黙視し得ようか？

彼の經濟思想が著しく倫理的色彩を帯びたものとなつたのは、こうした社會情勢の爲であつた。

以上のやうな諸傾向は、後年の獨逸歴史學派の思想に近いものである。獨逸歴史學派を建設した大立物ウイルヘルム・ロツシヤアは、經濟學の最初も最後も共に「人間」であると高唱して、經濟學の倫理性といふものを主張し、同時に歴史派といふ名に背かず、非常な努力を歴史研究に注いだ。歴史研究の中心となつたものは經濟史であるけれども、經濟史そのものは、歴史派の意見に依れば、廣く一般社會史の一部として存在するものであるから、經濟史研究とは云つても、結局社會史研究の一部として行はれることになる。事實、ロツシヤアの經濟原論は、廣汎な文化史研究の上に築かれてゐるのである。その意味で、シスモンデイは、歴史學派の先驅者だとも云へるのだ。現にロツシヤアその人さへも、シスモンデイを非常に尊敬し「貴い人類同胞の友」だと讃えてゐる。(歴史學派に就いては後に改めて解説する。)

五 恐 慌 論

シスモンデイの「新」經濟學が提起した基本的な問題は、富の生産が頻りに増大するのに、何故貧乏が殖えて行くか？ 富裕と貧乏との並存といふ不思議な事實は、どこから生れるのかといふことであつた。この事實はフランスにもあつたが、何よりも彼の心を捉へたのは、彼が英國滞在に見た多くの事實であつた。

元來、シスモンデイは、最初はスミスの崇拜者であり、正統學派の信奉者であつた。併し、英國旅行と其後の體驗とは、徐々に彼の思想を變化させた。スミスに對する尊敬は忘れなかつたけれども、スミス以外の正統派の思想に對しては、次第に疑惑を抱くやうになつた。

一八一八年版のエディンボロー辭典に執筆した「政治經濟」と題する一項の中で、彼は近代の勞働關係や自由競争の弊害、生産過剰の問題などに關して、新しい見解を發表した。翌一八一九年には「政治經濟の新原理、一名、富と人口との關係」(Les nouveaux principes deconomie politique ou de la richesse dans ses rapports avec la population)なる書物を著して、彼の所謂「新原理」の全貌を示したのである。先づ、彼の經濟恐慌論から説明しよう。

最初の近代的恐慌は、一八一五年に英國を襲つた。市場は動搖し、多數の勞働者は職を失ひ、騒亂と機械破壊とが相次いで起つた。これはナポレオン戦争後の平和克服を當込んで、大陸の需要を遙に超過するほど多量のストックを蓄積した英國製造業者の誤算に基くものであつた。一八一八年には第二の恐慌が起り、再び民衆の擾亂を捲起した。一八二五年には、更に一層激烈な恐慌がやつて來た。是は新しく開拓された南米市場を、過大視したが爲に起つた恐慌である。その結果、イギリスでは七十の銀行が破産し、その煽りを喰つて倒産者が續出した。爾後、殆んど十年毎に恐慌が襲來し、工業と市場との擴大につれて、恐慌の範圍も次第々に擴大されて行つた。かうした恐慌の頻發が、經濟機構の中に何等かの缺陷があるのではなからう

かとの疑問を起させるのは、當然である。

シスモンデイが眼前に見たものは、一般的生産過剰の事實である。ジャン・バチスト・セイも之を見たけれども、惜しいことには、彼は、一般的生産過剰なるものは、あり得ないと主張し、現實の一般的生産過剰をば、部分的生産過剰だと解釋して了つた。その反對に、資性公明、且つ歴史家としての素養に富むシスモンデイは、良く現實を在るが儘に認識して、その原因を解かうと努力したのである。

扨て、恐慌はどうして起るか？ シスモンデイは答へて、生産が収入を超過するからだ、といふ。彼に従へば、如何なる生産物も、消費者の収入に依つて購買されるのであるから、生産は本來ならば収入を超過し得ない筈である。若し之を超過するならば、超過分は過剰商品となつて商品價格の暴落を招き、茲に恐慌を招来せざるを得ない。それでは、製造業者は、何故にその生産を、消費者の収入の範囲内に止め得ないのであるか。之に對してシスモンデイは、製造業者は廣汎な市場の状態に通曉しないからであると答へる。

けれども、恐慌には、更に深い原因が他にもある。シスモンデイはそれを説くことを忘れなかつた。

シスモンデイに従へば、人間は先づ第一に消費者である。従つて、本來、自分が必要とするものを必要な程度に於て生産する筈のもので、正常な社會に於ては、無際限に生産が行はれる筈はない。然るに現に之が行はれるのは、富者と貧者の區別が存在し、生産を決定するものは自ら労働する必要のない消費者だからである。曰く……。

「奢侈は、それが他人の労働に依つて、購はれる場合に限つて、在り得るものである……。」と。

斯くてシスモンデイは、經濟恐慌は階級的社會にだけ起るものだと教へ、更に資本主義社會のやうに、生産が廣汎な市場を目當てとして行はれる階級社會にあつては、無際限な生産は、大きな困難を惹起すると説いた。何故なら、この生産は消費の縮少を犠牲として行はれ、供給は需要を超過するに至るからである。

そして、その結果小規模生産は破壊される。小商人や小工業家は消滅する。そして、一個の大企業が百個の小企業に代つて現れて来る。ところが、一人の大企業家の行ふ奢侈的消費は、百人の小企業家族の消費に比べて、生産を刺戟することが少い。且つ、機械と大企業とは、労働者を減じ、賃銀を次第に低下させる働きを持つから、結局、大企業の發達は、消費力を相對的に減少させる結果となり、生産過剰は避けられなくなる。「財産が少數の所有者の手中に集中される結果、國內市場は益々縮少し、工業は益々外國市場に販路を求めざるを得なくなる。」(シスモンデイの言葉)が、併し、外國市場に就いても、資本主義的生産が擴大されるにつれて、「文明世界がいよいよ一個の市場を形成し、新らしい購買者を求められなくなる」のである……。

これがシスモンデイ恐慌論の概略である。これを最近の經濟學の立場からみれば、無論缺點も多い。例へば、如何なる生産物も消費者の収入に依つて購買されるといふ根本前提からして、既に問題である。何故なら、年々の生産物の可成り大きな部分は生産財(例へば機械)に依つて占められ、従つて、それはシスモンデイの言ふやうに、消費者に依つて購入されはしないのである。だから、供給と需要との間に不均衡を來す

傾向はあるにしても、彼の説明では頗る不十分である。更に突込んで言へば、需給の不均衡そのものは、決して恐慌の眞の原因ではなく、もつと根本的な缺陷が生産機構の中に伏在し、その伏在してゐる缺陷の表面的な現れが、需給の不均衡なのであるから、需給の不均衡といふやうな「流通面」に、恐慌の原因を求めた彼の分析方法は、可成り見當違ひではある。更に又、生産者が市況に通曉しないことなどは、恐慌を多少激化する原因とはなるかも知れないが、それは、決して恐慌そのもの、原因とはならない。自由競争の社會に於ては、生産者は、たとへ市場の需要状態に通曉してゐるとしても、その需要を少しでも多く自分が吸収するために、生産競争を行はねばならぬ。従つて、市況に明るいからとて、生産過剰は避け難いのである。

現代の經濟學から見れば、シスモンデイの理論には、いま述べたやうな缺點を指摘する事が出来る。けれども、彼の學説は、當時としては、著しく卓越した點が少くない。その第一は、恐慌を以て資本主義の必然的な産物と觀察したことである。これは經濟學史上、實に空前のことだ。シスモンデイの學史上に於ける地位が、劃期的なものとなつた所以である。この根本的認識を忘れた、めに、彼以後の恐慌理論は、どれほど混迷したかわからない。スタンレー・ジェヴオンズ (Stanley Jevons 英國の有名な經濟學者) の太陽黒點説 (太陽の黒點の多少によつて農産物收穫が變化し、之に依つて、恐慌は起るとの説) などさへ飛出したほどである。今日でも、ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) は、ジェヴオンズ説の變形ともいふ可き、有機的生産 (農業生産) と無機的生産 (工業生産) の不均衡説を唱へてゐる。

第二は、シスモンデイの恐慌論が、根本的矛盾を含む體制として、資本主義を特徴付けた點である。今日でこそ資本主義の矛盾とか行詰りとかいふことは、誰でも口にする。しかし、今から百二十年も前、やつと産業革命が完成したばかりの頃に、こゝに目を注いだ洞察力は、偉としなければならぬ。

第三に、彼の恐慌論は正統學派の樂觀論調和論に對する痛撃である。正統學派のマルサス人口論やリカルドオの賃銀鐵則 (本書第三及第四章参照) は、労働階級の地位が永遠に恵まれぬものであることを、立證しようとしたもので、その爲に「陰慘科學」といはれたほどであるけれども、資本主義社會そのものに就いては、私利と公益とが一般的自然的に調和するものであることを説き、根本的には、著しく樂觀的であつた。之に反して、シスモンデイの説くところは、富者と貧者との運命的な對立であつた。彼の恐慌論そのものは、今では顧みられなくなつたけれども、資本主義社會の調和に對しても、最早、正統學派の如く、心からの信念を持つものは、影をひそめて了つた。思へばシスモンデイの學説は、先見に富むものであつたのだ。

六 人 口 論

恐慌論はシスモンデイ經濟學の全部といつていい。以上はその筋骨だ。この恐慌論を説明するために、シスモンデイは、人口、收入、資本集中など、種々な經濟問題に觸れてゐるのである。以下、一通りそれを紹

介するとしてしよう。

人口に就いては、シスモンデイは、人口が収入以上に増加出来ない事を認めてゐる點で、稍々マルサスと軌を一にしてゐる。しかしながら、マルサスのやうに、人口の増加力が貧乏を生ずるとは考へなかつた。シスモンデイに従へば、人口増加の可能性と、現實の人口増加とは區別しなければならぬ。若し人々の収入が安定を得て居れば、人口はその収入と不釣合なほどに増加するものではない。自ら現在及び將來の生活の見透しによつて、その収入に適つた限度に止るのである。ところが、大企業の發達に依つて、貧しい階級は収入の安定と見透しとを失つて了つた。小企業者は没落し、又は没落の危機に曝されて居り、労働者は恐慌や機械の採用のために、屢々街頭に投出される。収入の安定と見透しのない處に、収入と人口との調和は望んでも得られない。人口問題の禍根はこゝに在る、と彼は見たのである。

七 収入論

収入とは何か……。

シスモンデイの全經濟學が恐慌論であり、その恐慌論の基礎は、収入と生産の矛盾に置かれてゐるのであるから、収入についての觀念は、彼の經濟學に於ては、根本的な重要性を持つてゐる。しかし、之に就いて

の見解は、不幸にして、頗る曖昧だ。アダム・スミスは國民の収入を二つに分けた。一つは直接消費に宛てられる部分とし、もう一つは所得を生む部分、即ち資本化される部分とに分けた。シスモンデイも一應はこの分類に従つてゐるが、或場所では収入と消費を同一視し、他の場所では、労働者が労働生活を維持する爲に費すものをも、資本の中に入れてゐるので、収入——消費——資本の三概念の區別が混亂を來し、理論的にみれば、金科玉條の恐慌論そのもの、基礎が搖いでゐる。それにもかゝらず、彼は總収入と純収入との區別を頗る重視してゐる。彼の意見によると、小商人や小生産者の經濟生活は、生活維持を、即ち消費を眼目としてゐるから、何よりも總収入を重んずる。ところが、大企業者は利潤が目的だから、純収入を目標とする。この二つの目標の差は、重要な結果を生ずる。例へば農家が耕作すれば一千圓の總収入を生じ、地代として百圓を地主に支拂ひ得る土地があるとする。若し之を百十圓で借りる牧畜業者が現はれると、地主は純収入を目的とするものだから、その方へ貸すであらう。その結果、百姓は追はれ、土地に投せられた永年の労働成果は放棄され、地主は十圓を餘分に得る代りに、國民は八百九十圓を失ふことになるといふのである。これは、牧場から生産される筈の羊や牛を、計算に入れない妙な勘定であるが、シスモンデイにとつては、狙ひは、大資本が有害で、小生産者が有利だといふことを立證する點にあつたのだ。

大資本の攻撃を事とする者の眼は、常に利潤に向つて注がれる。シスモンデイはリカルドオが利潤の説明をしないと言つて攻撃してゐるが、彼自身の利潤論にも多くの矛盾がある。或は労働者の労働を奪つたのが

利潤だと云ふかと思へば、生産に對する資本の貢獻を認めたりする。資本の貢獻を認めるならば、利潤を正當視せねばならぬ。これは矛盾だ。

まだある……。彼は機械を非難しながら、機械の力を認めてゐる。このやうな矛盾は一體、どこから出て來たのであらうか……？

八 夢が育む矛盾

或は大企業を難じ、或は貧者と富者との對立を叫び、或は資本主義恐慌の必然を説くなど、一見したところ、社會主義者の觀を呈してゐるので、往々、シスモンデイは社會主義思想の所有者だと考へられたし、現に考へられてもゐる。併しながらシスモンデイは、決して社會主義者ではない。大資本はこれを攻撃したが、資本そのものを攻撃したことは、一度もない。況んや私有財産をや。資本の貢獻を認めたり、私有財産を肯定する社會主義者といふものはあり得ない。要するに彼の痛烈な口吻は、近代資本主義の批判に集中され、そして、飽くまでも批判にのみ注がれたのである。更に進んで、然らば資本主義をどうするかといふ段取りになると、忽ちにして弱々しい悲しげな表情に變化するのだ。シスモンデイの理論の中には「批判」と「積極策」とが、驚くべき鮮かさで對照し合つてゐる。この矛盾は、彼の性格の弱さから來てゐるのであらうか。

斷じて否彼は決して憶病者ではない。既に述べたやうに、カイラが縛に就かんとした時、少年シスモンデイは敢然として官憲に反抗し、銃の臺尻で打ちのめされたほどである。少年時代の強毅と博愛心とは、老後のシスモンデイの血の中で、依然として烈々と燃えてゐた。

一八四一年のジュネーヴ改正憲法に反抗して、翌四二年三月三日、自由黨が政府を倒し、立憲會議が開催されてシスモンデイも委員に選ばれた。ところが、三月三十日、六十九歳の病める老シスモンデイは、同胞の前に立つて、改正憲法が自由に反するものでない所以を説き、壯絶凄惨な演説を試みる勇氣さへあつた。興奮した人々は彼の言に耳を藉さなかつた。シスモンデイは懊惱の中に病重り、六月二十五日、遂に永眠したのである。病革るや家人を呼んで、自分の着衣を更へさせ、從容として死出の旅路についた。

この勇氣と天才的洞察力とに恵まれた人物が、社會改革案として提起したものは、生産に於ける自由の制限、勞働と財産との結合の再建といふ二つに過ぎなかつた。具體的には、政府に依る自由競争の抑制、自作農及び獨立職人の再現資本集中に反對な分裂主義に過ぎず、これに達するまでの過渡的政策としては、勞働者團結の認可、小兒勞働及日曜就業の禁止、成人勞働時間の制限、職業保證等の緩漫穩和なものであつた。かうした彼の矛盾が、性格に依るものでないとすれば、風光に恵まれたスキス生活の穩和さの故であらうか。或學者は同じ時代の英國を見學したセイとシスモンデイとの思想が截然と分れた原因を、このスキス生活に歸してゐる。が、既に書いたやうに、當時のスキスは革命と擾亂の巷であつた。それが原因とは信じら

れない。そこで考へられるのは、シスモンデイの血管を流れてゐた父祖傳來の立場である。

シスモンデイの家は、小農業や時計製造などの小手工業を基礎とした封建スキスの貴族である。産業革命は、この封建社會を急速に破壊する過程として現はれた。之に對する反抗！シスモンデイの立場は、正にそれであつたのだ！大工業と自由競争への峻烈な批判、機械使用の抑制といふ反動的主張、自作農や獨立職人の再建論など、一としてこの立場に基づかないものはない。しかも、機械の抑制を求めながら、その力は否定出来ない。大工業と資本集中に押されて、これを防ぎ切れないことを知り乍ら、せめてその進行を緩めたいと願ふ。彼の理論の建設的方面が、嘆願的で詠嘆的なローマン的傾向を帯びたのは少しも不思議ではないのだ。現實經濟の近代化に直面しながらも、シスモンデイの夢は、依然として、小農と獨立職人の支配的な封建スキスの昔を、彷彿とさせてゐたのである。

第八章 限界効用學派の經濟學

日大
大野

一 價值と効用

これまでに書いた學者達は、スミスは勿論のこと、どの人も、皆それぞれの時代に、それぞれの意味合から、深い影響を與へた人々である。いや、現代に至つても、その影響は失はれてはゐない。その學說の或ものは、益ます光輝を放つてゐる。

例へばリカルドオの地代論だ。これなどは、百二三十年も前の學說であるけれど、今日でも尙立派な正しい學說と考へられてゐるのである。が、しかし、何と云つても、大分舊い時代の學者學說であつて見れば、一般的に見て、現代經濟學とはチト縁遠いことも事實だ。そこで、本章ではもつと身近な處に移らう。

もつと身近なところ……。つまり現代經濟學にも様々な傾向があり流派があるが、大きく分ければ資本主

義經濟學と社會主義經濟學の二つになる。あとの細かい流派は、要するにこれら二大流派の分派に過ぎない。現代に榮えてゐるのは勿論前者で、その中の最も優勢なものが、これから説かうとする「限界効用學派」である。

さうだ！

最も優勢な學派……。卒直に言へば、資本主義經濟學派と名のつくもので、限界効用學說の影響を受けなものは、殆んどないのだ。それ故、限界効用學派と輓近經濟學とは、殆んど同一のものだと考へても、大した誤ではないかも知れぬ。

扨て、限界効用學派とはどんな學派であらうか？

それは「限界効用學說」(theory of marginal utility)を信奉する學派のことだ。

それでは、限界効用學說とはどんな學說か？

これは財の價值、平たく申せば、物の値打がどうして決るかを説明する學說の一種である。經濟學の術語で所謂「價值論」の一種である。これが理解のために、先づ「價值の矛盾」といふ點から話を進めて行かう。

——印度に神話がある。或女神に懸想した男の神様が、様々なものに姿を變へて、女神の心を惹かうとしたが、一向に利目がない。思案の擧句、黄金の雨となつて降り瀧いで見たところ、女神は遂にその美しさに眩惑され、男神に心を傾けるやうになつた。

この話を皮肉に解釋すれば、婦人に對する黄金の威力を説いたものだ。併し、他面、黄金の美しさは、神代の昔から強いことを物語つてゐる。だが、黄金は飯の代用品にはならない。己の觸るゝもの盡く黄金と化したため、黄金に取圍まれながら餓死したといふのは、ギリシャ神話マイダス王の物語にもある通りだ。反對に、清水は人間の生活にとつて無くて叶はぬものである。ところが、黄金は高價で水は只である。少くとも只同様である。この矛盾は、一體何としたことであらうか？ 經濟學では役に立つことを、効用又は利用(utility)があるといふが、黄金と水の例から考へると、効用と値段とは無關係なのだらうか？ さうとばかりも言はれない。

全く役に立たないものに値段はないのだから、効用と價格との間に或關係が存在することは確實だ。が、さてそれが、どんな關係なのか。これをハッキリと決めたのが、茲に説く限界効用學說なのである。

限界効用學說によると、價格は効用の外に、更にも一つ、品物が多いか少いかに依つて定るといふ。尤もこれだけなら、何も限界効用學說でなくとも、昔からある需要供給學說と同じことだ。しかし、これは私の言葉が足りないので、少くとも二つの點で、限界効用學說と需要供給學說とは違つてゐる。第一に、説明しようとする價格の種類が違ふ。需要供給學說は市場價格を説明するものだが、限界効用學說は自然價格を説明するものなのだ。勿論、現實の經濟界に、二種類の價格があるわけではなく、普通に値段とか價格とか云へば、それは市場價格のことである。この市場價格は日々變動する。(統制經濟で價格が公定されてゐれば別であるが、)

や、商品取引所などでは、午前と午後とでも価格は變化する。時に大暴騰を演じ、時に大暴落を來して、成金や自殺者が出たりする。これを見ると価格の上り下りは全く無軌道のやうでもあり、亦、一時的には確にさうなのだが、結局は、或る標準値段に引付けられて行くのである。その標準値段が自然價格だ。だから、自然價格は現實の價格ではない。が、しかし、現實を統制してゐる價格だ。

限界効用説はこの自然價格を説明するものなのである。尤も學問的には、この場合は自然價格と云はないで、價值とか交換價值とか云つてゐるが、それを金銭で言ひ現したものが自然價格なのだから、名は異つても實體は同一である。けれども、こゝでは、學者一般の流儀に従つて、これを價值と呼ぶこと、しよう。

二 効用遞減の法則

さて、その價值は、効用と商品量との二本建で、どのやうに説明されるであらうか？

日本人の常食……米飯の例を引かう――。

わたくし共は、一年中、飯を食べてゐる。これを喰はないで過すことは出来ない。さりとして、或程度以上に喰ふことは、寧ろ甚しい苦痛である。

何故だらうか？

それは多量の食物を目の前に見ることによつて、わたくし共の欲望が、相當に満足させ得られることを知るからである。食物は十分あると意識して、一種の欲望満足感に達するからである。往々、人間の欲望には際限が無いといはれる。所謂、望蜀の例である。が、それは欲望の種類に依つてゝある。同一物に對する欲望には、金は別として、一定の限度がある。食欲は勿論のこと、衣や住にしても、同じやうな衣服、同じやうな住居を、幾つも欲しがるとは稀である。然も一つの欲望は、それが充たされるに従つて、その強さが減じて行き、それに伴つて欲望満足から受ける快樂も、次第々々に減つて行く。食事の際などに、どんなに空腹であつても、一杯一杯と重ねて喰べて行く間には、段々と味も衰へてくるものだ。酒でもさうだと聞く。駆け付け三杯……。最初が最も美味しいらしい。たとへ一合位までは美味しさが却つて増すとしても、更に盃を重ねれば、結局は不味くなつて了ふものださうである。

之を少し難しく云へば、同一の快樂は引續き之を繰返す毎に、その快味の度を減じて行くのである。これを快樂遞減の法則と呼ぶ。經濟學で快樂といふ言葉は、世間で使ふそれよりは意味が廣く、欲望の満足を總て快樂といふのだ。世間では電車に乗ることを快樂とは云はないけれど、經濟學では、それも亦、一種の快樂である。歩くよりは電車に乗り度いから乗るので、その欲望が満足されるから、これも快樂だと唱へる。先に効用とは物が役立つことだと云つたが、役立つとは人間の欲望に役立つことなのだから、結局、經濟學では効用と快樂とは同じもので、或物が快樂を與へる場合、そのものには効用があると稱する。だから快樂

遞減の法則は、效用遞減の法則と申しても差支ないのである。

限界効用説は之を用ひて、自然價格を説明した。果して、どんな工合に説明したであらうか？

三 バケツの水

假りに人がバケツに一パイの水を得たとする。勿論、その人はこれを飲料用に當てる。そこへ、もう一パイの水を得たならば、これは炊事に供するだらう。更に一パイを得れば洗濯用に、尙ほもう一パイあれば掃除用に使ふことにでもするだらう。用途は必ずしもこの通りでなくとも、兎に角、四杯の水は、その人の必要の程度に従つて、順次一パイづつ、配列される。(半パイづつ、でもいゝし、用途によつて割り當てる量が違つてもそれは問題ではない。要は最も必要な用途を第一とし、順次に割當てられ、ばよろしい。)

さて四杯の水が、欲望(必要)の強さに従つて、夫々の用途に排列されると、水は同じでも、一杯一杯の効用は一樣ではない。飲料用水は生命に關するから、その効用は莫大である。以下、順々に効用は漸減して行く。然らば水の交換價值、即ち自然價值は、どのバケツの水の効用に依つて定るのであらうか？(こゝが限界効用説の要點だ!)それは効用の最も少い水、即ち掃除用の水の効用に依つて定るといふ。何故だらう？それは四杯ある場合の一杯の水は、どのバケツの水でもその人にとつては、掃除用の水の効用しかないか

らである。その證據に、バケツを一つひっくり返して、一杯分の水が流れて了つたとすると、その人は之が爲に掃除は出来なくなるが、他の三杯が残つてゐるのだから、飲料にも、炊事にも、洗濯にも事缺かぬからである。従つて、四杯ある場合の一杯の水の價值は、どれでも掃除用の價值しか無い。水が更に多量にあつて、水に對するその人の欲望を、總て満たしても尙ほ残る程ならば、余分の水、即ち不用の水には効用が無い。それには對しては欲望を人は感じないからである。だから清水の多い田舎では、水はロッパだといふことになるのである。逆に砂漠の中一杯の水は、時に一匹の駱駝や高價な寶石とさへも交換される。

ダイヤモンドの交換價值が高いのも同じ理窟である。ダイヤモンドは飯の代用品にはならぬが、寶石としてはその硬さと美しさに於て、最も勝れてゐるから、誰しも之を欲しいと思はぬ者はない。が、何分にも産出量が少い。従つて之に對する強い欲望を持ち、且つ之を購ひ得るに足る金錢を、持つてゐる人だけの手にしか、入らない。つまりダイヤモンドに對する社會の欲望の強い部分が満足されない。それで値が高い。ダイヤモンドが砂利のように澤山あれば、只となること請合である。金がダイヤモンドより安いのは、金に對する社會の人々の欲望に比べて、比較的に多量に在るからだ。従つて最強度の欲望を持つ人だけでなく、もう少し弱い欲望を持つ人も、之を満足させることが出来る。換言すれば、社會の比較的弱い部分の欲望まで満足させられるからである。

このやうにして、物はその量によつて順次に弱い欲望に向けられるが、その際、最も程度の弱い欲望の満足に向けられる部分(水の例で言へば、掃除用水)を限界單位と呼び、その部分から得られる満足、即ち効

用を限界効用と唱へる。この限界効用に依つて價值が定ると説くのが、即ち限界効用學說なのである。

四 發見者は誰か？

この學說は、殆んど同じ頃に、三人の學者に依つて、夫々獨立に、相互に關係なく發見された。一人は英國のウィリアム・スタンレー・ジェヴオンズ教授 (William Stanley Jevons)、他の二人は佛蘭西のレオン・ワル



第六圖 カール・メンガー

ラス教授 (Leon Walras) と、奧太利のカール・メンガー教授 (Karl Menger) である。そこで、早速、先陣争ひが始まつた。一番騒ぎ立てたのがジェヴオンズで、メンガーも之に應酬したが大して深入りもしなかつた。ところが、ジェヴオンズは飽くまで自分が最初の發見者であると頑張つてゐたが、不圖、或日、妙な古本を見付けた。百五十頁ばかりの薄い本で、表題は「人間交

易の法則と、それより發する人間行動の規定の展開」とあり、著者はこれまでに聞いたこともない人。ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン (Herman Heinrich Gossen) とある。奇妙なことには、この本には章もなく節も無く、第一頁からズーツと書き流してあつた。妙な本だなど、思ひ乍らも、讀んで行くうちに、ジェヴオンズは愕然として了つた。彼が最大の誇を以て主張した限界効用學說が、彼よりも更に深い哲學的態度を以て、その小冊子の中に述べられてゐるのを見出したからである。讀む程に、驚きは懊惱となり、羞恥となり、全卷を讀み終つた時は、深い溜息ばかり……。

無理もない話である。自分が發見したと思ひ、自分の全經濟學の基礎としたものが、實は無名の一獨逸學者に依つて、遙かに早く發見されてゐたとあつては、ジェヴオンズならずとも落膽せずには居られない。併し、先陣争ひこそしたれ、彼も亦一流の學者として、この無名の大發見者をその儘にして置くことは、彼の良心が許さなかつた。ジェヴオンズは直ちに筆をとつて、ゴッセンの著書を世に紹介し、限界効用學說創始者としての榮譽をば彼に捧げたのであつた。が、不幸にも、それはゴッセンの書が出版されて以來四十年。著者の死後、正に二十年を経過した時であつた。これは今なほ經濟學說史上の悲しい物語の一つとなつてゐる。だが、たとへ死後とは言へ、兎に角ゴッセンの著書は發見されて祭壇に飾られたのだ。その意味では幸運だつた。しかし、今日でも、なほ地中の寶石となつて埋もれてゐる著書が無いと、果して誰が云へるであらうか……。思へば學者の價值ほど、現世的名聲と縁遠いものはない。學生にも歡迎されず、どこからも原稿

を頼まれないやうな生活を送つた哲學者ショウベンハウエルが、一世の巨匠であつたことを、今日では、も早、疑ふ人が無いのである……。

餘談はさておき、限界効用學說の基礎理論は、いま述べたやうなものである。併しながら、單にこれだけの理論ならば、今日の如く勢威盛んなるものとはならなかつたであらう。それが、現代經濟學の基礎とまでなり得たのは、學者達の努力の結果である。多くの學者達は之を據點として、各般の經濟問題にこの基礎理論を擴大して行つた。その仕事を引受けた第一人者は、先陣争ひから身を引いて、自己の研究に精進したカール・メンガー其人であつた。

五 利子時差說

メンガーは一八四〇年奥太利のガリチアに生れた。ウキーン及ブラーグの大學を経て、一八七二年からウキーン大學の教授となり、後に皇太子の侍講に就任、更に再びウキーン大學の先生となつた。一九〇三年教職を辭し、一九二二年に逝去するまで、上院議員であつた。學者の境遇としては恵まれてゐた。弟のアントン・メンガーも亦、法律學者として名聲高い人であつた。

カール・メンガーの說を亨け繼いで、限界効用說を發展させたのは、フリードリツヒ・フォン・ヅキ

ザー (Friedrich von Wieser) とボエーム・バヴェルク (Böhm-Bawerk) の二人。いづれも奥太利人だ。それが爲に、彼等は今では奥太利學派と呼ばれてゐる。限界効用といふ言葉を作り出したのは、實にヅキザーなのである。

奥太利學派の價值論、即ち限界効用說をみて、第一に氣付くことは、財の價值を「消費」の點から觀てゐることである。先に述べた水の例にしても、水を消費するものとして、その價值がどうして決るかを考へた。この點が正統學派との根本的な相違である。正統學派の價值論は、スミスやリカルドオの勞働價值說が代表的なもので、勞働は生産行動である。だから正統學派の立場は生産者の立場(主として工業企業家の立場)であつたが、これと反對に、奥太利學派の立場は、徹底的に消費者の立場であつた。併し、一般の浪費者は、決して純粋な徹底的な消費者ではなくて、概ね生産に關係してゐる。徹底的な消費者とは、學生などは別として、地主階級と金利で生活してゐる階級とである。従つて、限界効用說は金利生活者の經濟學である。

このやうな次第で、限界効用說が價值論の範圍外に擴大された時、それは先づ利子の説明に使はれた。利子は金利生活者に取つて最も大切なものだからである。その新學說は「利子時差說」と呼ばれるものだ。前記のボエーム・バヴェルクが之を唱へ出したのである。この人もウキーン及インスブルック大學の教授だつたが、轉向して役人となり、三度も大藏大臣となつた。大藏大臣から大學の先生となつた賀屋氏とは、正に逆コースだ。バヴェルクの最も重要な著書は「資本及資本利子」(Kapital und Kapitalzins 1884年)である。

得意の利子時差説は、この書物の中に展開されてゐる。

俗に「明日の二分ぶより今日の百」といふが、これは經濟學の方から見ると、金錢にしろ財にしろ、現在のもの、方が、將來のものより價值が高いとの意味である。言ひ換へれば、もの、價值には、時間的な差があることを物語つてゐるのだ。之を價值時差と名付ける。だから若し來年一萬圓返して貰ふ約束で、今日一萬圓貸したなら、これは貸手の損である。今日の一萬圓と來年の一萬圓とは、現在からみれば、來年の一萬圓の方が價值が低いからだ。そこで此の價值の差を埋める爲にプレミアムをつける。これが利子だといふのである。これは物價の變動や景氣の好し悪しなどは別問題である。こゝでは金錢を別に説明したが、「價值時差」といふ事實は、勿論金錢にだけ限つたことではない。米だつてブラチナだつて、總て現在の方が、未來のものより價值が高いことは、一寸考へれば誰でも了解出来る。このことを専門語で、現在財と未來財（將來財）との價值差といふ。價值時差なる事實はポエーム・バツェルクの説く通り、現實に存在するものだが、果して現代社會の利子が之に依つて説明されるかどうかは、大いに異論もあらうと思ふ。しかし、彼以前に利子を説明した人が無くて、彼が利子學説の創始者となつたことは偉としなければならぬ。

六 思想の波

ローマは一日にして成らず……

經濟思想も亦同じこと。それはヒョツコリと天から降るものでも、突然に地から湧くものでもない。必ずそれに至る筋道があるものだ。正統派の自由主義にしても、重商主義の干涉政治が世の中の實際に合はなくなつた時、これに對する反動として起つて來たものである。塊太利學派にしてもさうである。その經路を知つて置かなければ、この學派が思想上にどんな地位を占めるか解らない。

だが、これを知る爲には、先づ、獨逸歴史學派なるものを知らねばならない。何故ならば、歴史派は正統派の反動として起り、塊太利學派は、更にそのまた反動として、生れて來たものだからである。歴史學派に就いては、何れ後に書くから、こゝでは限界効用學派を理解する上に、是非とも必要な點だけについて、書いて置かう。

英國の自由貿易論は獨逸へも輸入されたが、花火の様に一時バツと咲いただけだつた。間もなく保護貿易主義に取つて代られて了つた。これは工業の幼稚な獨逸で自由貿易を行へば、忽ち先進工業國たる英國工業に壓倒されて了ふからである。それに國家事情から考へても、ドイツは多數の小國が集合して出來た國で、この統一を完成するのが盟主國たるプロシヤの最大な政治目標であつたから、英國風な自由主義を實施することは不可能であつた。斯うした國情の差は獨逸經濟學者をして、獨逸式經濟學建設の必要を痛感せしめた。そこで先づ現れたのがフリードリッヒ・リストの「經濟學の國民的體系」(Nationale system der politi-

shen Ökonomie 1840)であり、之に續いてヅキルヘルム・ロツシヤア、カール・クニース、ブルノー・ヒルデブランド (Wilhelm Roscher, Karl Knies, Bruno Hildebrand) の三人である。この三人が中心となつて、後に「舊歴史派」と稱せられた一學派を作り上げた。詳細は後章を期するとして、その主旨を要約すると、次のやうなものである。

- (一) 經濟學はその國の歴史と固く結び付いてゐるものであること。
- (二) 従つて正統派のいふやうに、あらゆる時代、あらゆる國に共通な經濟學は存在しない。經濟學は時と處とに依つて異なるものであること。
- (三) 社會生活は一國の文化、宗教、政治、經濟などが綜合されたもの。従つて正統派の如く、經濟生活だけを切離して論ずるのは無理であること……等であつた。

斯うした根本主張の結果として、舊歴史派は經濟學の抽象的な研究法を排し、歴史的に研究しなければならぬと説いた。正統派の如く利己心によつてのみ行動する「經濟人」(Homo Economicus)なるものを假定し、その假定から出發した經濟學は、決して經濟の現實を説明し得るものではない。眞の經濟學はもつと廣いところに着眼し、それぞれの國の歴史研究によつて之を補ふべきであると説いた。

新歴史學派になると、この傾向は著しく極端に走つた。經濟理論の研究などは、もつと歴史研究が行はれた後でなければ駄目だと説いて、グスタフ・シュモラー (Gustav Schmoller) を總帥とする新歴史派

の學者などは、理論はお預け、ひたすら經濟史の研究に没頭した。同時に、經濟學は社會全體を考慮すべきものであるが、社會は決して利己心で結び合つてゐるものでなく、之とは反對の「共同心」を以て出來上つてゐるものであると説いて、經濟學と道德とを結び付けようと試みたのである。理窟だけ聞けば、至極尤もであるが、總て話には裏があるものだ。當時のドイツには、社會主義運動が盛であつたから、實は、階級思想を抑制すると共に、苦んでゐる中産階級の利益の爲に、社會政策を行はうとして、一石二鳥の効果を狙ひ、之を主張したのであつた。その目的は首肯されるのだが、餘り歴史研究に没頭しすぎて、一切の經濟理論の研究を棄て、了つた爲に、正統派と正反對の極端に陥り、歴史派はたゞ一つの新しい理論も生み出すに終つてしまつたのである。

奧太利學派は、この歴史派に對する再反動として起つて來たのである。従つて、奧太利學派が經濟理論の再建設を高らかに叫んだのは、至極當然であつた。

七 經濟理論の再建

それではどんな方法で、理論の再建をやらうとしたのであるか？

歴史學派が經濟理論を生み出せなかつたのは、餘りにも歴史々々とこだはり過ぎたからである。それ故、

塊太利學派の方は、之と正反對の方向に進み、歴史的研究をやらすに、只管、理論研究に精進した。そこでシユモラーとメンガーとが大論争をやつた。悪口雜言まで投げ交す程に論争したが、とゞのつまりは歴史派の旗色が悪くなり、經濟學を研究する者には、歴史の研究も理論の研究も共に必要だといふことになつた。これは當然の話で、思へばつまらない争をしたものだ。併しながら、元來、メンガーは歴史研究を否定した譯ではなく、それと相並んで抽象法を主張したのだから、歴史派側が譲歩したのは當然であつた。とはいふもの、塊太利學派も、實際は抽象的方法に頼りすぎたのである。先づ彼等は孤島にたゞ一人住むロビンソン・クルソーのやうな生活や、砂漠を旅する一人の旅人を假定する。この點は正統學派の抽象法と全く同様である。だから彼等を指して、「新抽象派」と呼ぶ人も居る。けれども、似てゐるのは形だけで、想定された孤立人の内容は全然違ふ。例へばスミスの場合では、「見えざる手に導かれて」自己の利益を追求して行く活動的人物が想定されたが（本書第二章參照）、メンガーの場合は、「滾々と溢れ出る泉の傍に座して」水を飲む孤立人が想定される。言葉を換へて云へば、スミスやリカルドオの假定した人は生産生活者である。メンガーのそれは消費者である。こゝに、同じく抽象的だとは云へ、正統學派と限界効用學派との根本的な立場の相違が見出されるのである。

八 その發展と批判

限界効用説が、價值論に始つて利子論に擴大されたことは前述した。其後この學説は、賃銀や利潤の説明にも應用されるに至つた。アメリカの經濟學者ジェー・ビー・クラーク（J. B. Clark）、塊太利のヨゼフ・シユムペーター（Joseph Schumpeter）などは、孰れも現代經濟學界の巨匠であるが、皆、限界効用説の發展に貢献してゐる。それらの内容に就いては、本書では詳述しないがこの兩者に限らず、限界効用説は破竹の勢を以て學界を風靡しようとしたのであつた。

現在では、これに對する種々な批判が加へられてゐる。例へば、効用なるものは人によつて一樣でない。眼鏡は近眼の者には効用甚大だが、盲目には無用だ。酒飲みには砂糖漬は苦手だが、下戸に白鷹は禁物だ。このやうに、人によつて異なる効用が、どうして誰にとつても同じな「價值」になるのであらうか？ 又、効用は人間の感じたが、その大きさがどうして測定出来るか……等々の批判が下され、これに對する學者達の回答は、未だまだ満足なものではない。併し、労働價值説と相並んで、限界効用説が價值學説の二大陣營とまで發展したことは事實だ。殊に労働價值學説が、兎角、社會主義と結び付いて考へられる爲、社會主義に反對する學者達は、その爲にも、限界効用學説を奉ずる傾向が強い。が、公平に見て、いづれの學説にも長所

と缺陷とがあるものだ。人の消費生活に關する限り、効用價值論は眞實に近いであらう。けれども、問題は之を擴大して、生産生活にも及ぼさんとするところから惹起されて來るのである。

財といふものは消費生活の方からも、生産の側からも考へなければならぬ。その一方からばかり立論した學説は、謂はゞ片輪である。限界効用學説がすこぶる巧みな議論でありながら、これに疑惑を持つ學者が少くないのは、恐らくはこの學説が、價值の一側面ばかりを見てゐたからであらう。

第九章 歴史派經濟學

一 政治と經濟

此ごろ、經濟學を英語で、エコノミックス (Economics) といふ人が多い。しかし、以前は、ポリテイカル・エコノミー (Political Economy) だった。直譯すれば、「政治的經濟學」である。言葉は常に事實を表現すると云はれてゐるが、このポリテイカル・エコノミーなる言葉も、政治と經濟とが密接に結び合つてゐた時代には、洵に適當な言葉だった。例へば重商主義の時代 (第十五、六、七、八世紀頃) には、經濟は政府の干渉を受けることが頗る多かつた。政治と經濟が恰も一體だった。この政治と經濟の結合を、兎も角も一應切離したものが、スミスやリカルドの自由主義思想だった。切離した云つても、この二つのものは、謂はゞ盾の両面であるから、西瓜を割つたやうに、全然、別にするには出來ない。しかし、少くとも、經濟

と政治とは別々に考へられた。これは、英國の新興ブルジョア階級（工業階級）が極めて有力であり、政府のおせつかいなどは、却つて、發展の邪魔となつたからである。その意味で、英國の自由主義は、經濟の獨立宣言でもあつたのだ。

ところが、國によつては、そう簡單に行かなかつた。英國は、「世界の工場」と呼ばれたほど、他國に率先して工業が進歩した。従つて、外國製造品は、輸入される餘地が全くなかつた。輸入されるのは原料品に限られてゐただから、これは是非とも入つて來なければ困る。斯うした状態の下では、自由貿易が最も有利であつた。有利であつたればこそ、大いにその説も勢力を得た譯である。併しながら、工業の幼稚な國では、そううまくは事が運ばない。その適例がドイツである。

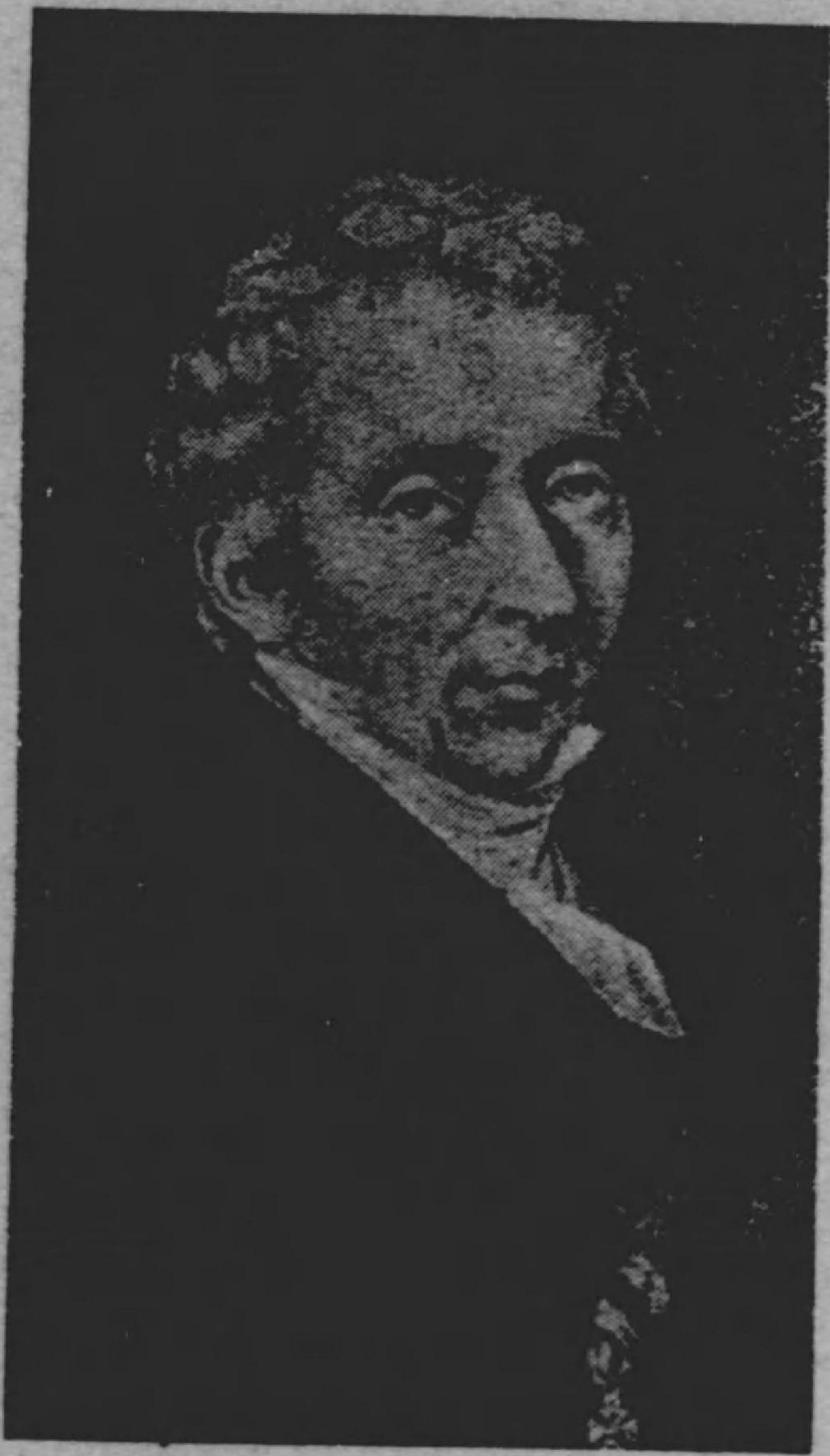
獨逸は、今日でこそ、大工業國家だが、第十九世紀の始め頃は、漸く工業が芽を出し始めた時であつたから、英國流の自由貿易を真似やうものなら、ドイツの工業は、忽ち英國製品のために壓倒されて了ふ。自由貿易は大禁物である。

よくしたもので、そのやうな場合には、必ず、それに適應するやうな學説が現れて來るものだ。最初にこの學説を提唱したのは、フリードリッヒ・リスト (Friedrich List) である。リストを先驅者としてドイツ歴史學派なるものが生れたのである。

歴史學派には新舊二派ある。こゝではリストと舊歴史派とを説明し、新歴史派は次章に廻さう。尤も「新」

といひ「舊」と稱しても、元來が同じドイツで出來上つた學説だから、根本の思想には大差ない。併し、時代の流れが頗る急速であつたために、新舊兩者の時間的な隔たりは、極く僅であつたにも拘らず、種々の點で、相當の差異が生れてゐる。同じ櫻の葉でも早春には赤味を帯びてゐる。五月ともなれば、それが新緑滴るばかりな色となるやうなものである。

二 ロマンチカア



第七圖 ミュラア

前節で政治と經濟との結合といふ言葉を使つたが、當時のドイツには、實に大きな政治問題であつた。ドイツ統一の問題がそれだつた。讀者も御承知の通り、ドイツにはプロシヤとか、バヴァリアとかいくつもの州がある。普佛戦争が終る迄はこれ等の州は夫々相當な獨立性を持つて、プロシヤ王國と

かバヴァリア侯國とか呼ばれてゐたものである。これらの諸州を統一して近代的な大國家に纏め上げることが、ドイツに取つては先決問題であつた。従つて、當時、國家的思想が頗る有勢だつた。但し、「國家思想」とは云つても、眞の「國家」は未だ出來上つてゐなかつたのであるから、謂はゞその前提として、ドイツ民族の統一が強く叫ばれたのである。この傾向を代表して登場したのがロマンチカア (Romantiker 浪漫派) だつた。ロマンチカアこそは、歴史派の思想的背景を成すものであるから、先づ、それから簡単に説明してゆかう。

最も偉大なるロマンチカアはアダム・ミュラー (Adam Müller) である。彼の意見によれば、國家は一つの生命を持つた全體である。人類愛に依つて結合され、統一されてゐる道徳的な共同社會 (Gemeinschaft) である。之を形造つてゐる個人の幸福は、全體である國家に對して犠牲となる處から生れて來るといふのだ。國家又は社會を、生命のあるもの、生きてゐるものを考へる思想を、國家有機體説又は社會有機體説と名付ける。ミュラーに限らず、ドイツのロマンチカアはいづれも皆、有機體説を信奉してゐた。

此のやうな有機體説がアダム・スミス流の個人主義的、自愛心的な社會觀と對立するものであることは言ふまでもない。スミス流の社會觀は、本書の第三章でも述べた通り、個人が中心であり、社會はかうした個人の集合と見た。そして、少くとも經濟生活に關しては、ミュラーの犠牲説とは正反對に自愛心、利己心を、最善なものとして考へた。ロマンチカアの考へ方と英國經濟思想とは、既に、その出發點が異つてゐたわけである。

更に、進んで經濟思想そのもの、内容に入ると、兩者の差異は益々歴然として來る。英國經濟學が工業中心主義であつたのに對し、ミュラーは農業を大いに尊重して、これこそドイツの國民生活全體の基礎だと、考へた。然もミュラーの尊重した農業は、近代的な、營利主義的な農業ではなく、人と土地とが固く結び合されてゐた封建時代の農業であつた。彼は、必ずしも商工業を排斥することはしなかつた。しかし、それが特別に發達して、社會全體の調和を破るやうになることを深く戒め、英國流の工業自由主義は、決して社會全體の幸福となるものではなく、寧ろ、無規律な行動の原因となると見たのである。

このやうなミュラーの思想は、明かに封建的な農業經濟から生れたものだ。ところが、次第に資本主義がドイツにも發達し始めるやうになると、この封建的な農業社會の基礎がぐらつき出して來た。これは憂慮すべきことだ。そこで、飽くまでも、「傳統」と「過去」とを主張しようとしたのが、ミュラーや其他のロマンチカアである。

彼等の理想は、來るべき資本主義的な工業社會ではなかつた。調和と平和とが支配してゐた昔の社會こそ、彼等の憧であつた。それ故、彼等の思想や言葉は、至る處、過去への讚美、過去への憧憬で満たされ、田園調、牧歌調の強いものであつた。ロマンチックであつた彼等がロマンチカア (浪漫派) と呼ばれる理由もこれだ。

三 先驅者リスト

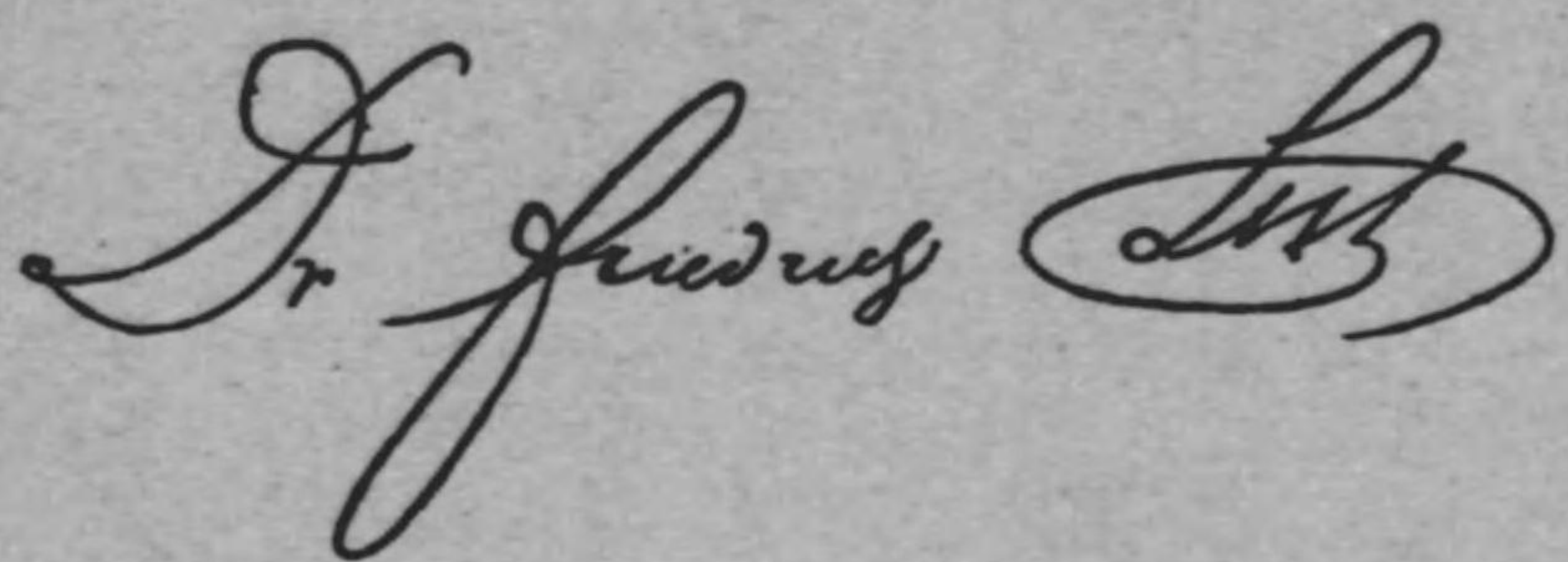
フリードリッヒ・リストも、亦、かうした思想的背景の中から現れて来た人である。一七八九年の生れ。殆んど獨學で押通して、大學教授とまで昇つた。然も、その上に、ドイツ關稅同盟を作り上げて政治運動にも精進した。政治犯に問はれてアメリカに亡命し、再び故國に歸つてから、アメリカ領事に就任したが、鐵道問題に全力を傾注した、めに生活に窮し、パリに流れて、「アルゲマイネ・ツァイツング」といふ新聞紙に寄稿しながら、生活を續けた。まこと、その生涯は波瀾を極めた。元來、學者肌の人ではなく、街頭に叫ぶ人であつた。それにも拘らず、忙中に閑を盗んで書上げた「國民的經濟學體系」(Das nationale System der politisohen Oekonomie) が、一八四〇年に出版されると、彼は忽ち經濟學者として、一世を注目させた。死んだのは一八四六年であつた。

四 經濟階段說

リストの思想で、特筆大書すべきは、國民の歴史を尊重したことである。國家は、單に個人の人々が集つ

て出来上つたものではない。個人は、特殊の言語、文學、特殊の血統、歴史、風俗、習慣、法制を持つ「國民」として互ひに結び合され、その上に國家が打建てられてゐる。個人の獨立、精神生活、生産力、安穩な日常などは、個人が國民として、結合してゐることによつて、始めて得られる利益だ。その國民は、前述したやうに、特殊の歴史や習慣を持ち、特殊な利害關係を持つてゐる。従つて、漫然たる國際主義などは、机上の空論だ。幻想に過ぎないと、リストは説いた。

この思想は、明かに、ロマンチカアの強い影響が見出される。それと同時に、英國流の國際主義に對立する考へ方も顯著に看取される。スミス流の見解に従へば、經濟學は、どんな國民にもそのまゝ、當嵌まり、自由主義は汎ゆる國民に幸福を齎すものである。しかし、リストに従へば、そんな萬能藥のやうな一般的理論など現實と一致する筈がない。自由主義とその經濟學とは、英吉利人にこそ、幸福を齎し、英國の社會にだけは通用するかも知れない。けれども、英國とは歴史や經濟事情を異にするドイツには、そのまゝ、之を適用することは、到底出来ない。ドイツにはドイツ國民特有の經濟學が建設されねばならない。このやうな主張に基いて「國民的經濟學大系」は書かれたのである。彼が國民主義經濟學、歴史主義經濟學の始祖とされる所以は茲に在る。此の主張を裏書きするために、リスト



第九圖 リストの直筆

は遠い過去から今日に至るまで、人類が経て来た經濟生活は、決して同じものではなく、種々な發展段階に別たれてゐたことを證明しなければならなかつた。リストの意見だと、人類の經濟生活は、狩獵又は漁撈時代、遊牧又は牧畜時代、農耕時代、農工時代の五段階を経て来たもので、現代は、この第五の農工商時代であるといふ。これが有名なリストの經濟階段説である。果して、人類の經濟生活が、かうした段階を、かうした順序で経て来たか、どうかについては、大きな疑問がある。併し乍ら、兎に角、經濟學に歴史主義を導き入れたことは、リストの最も大きな貢獻であつた。

五 育成保護關稅説

この階段説と相竝んで、リストの名を高からしめたものは、所謂「育成保護關稅」の提案であつた。先にも一言した通り、當時、獨逸の工業は、英國の先進工業から手酷しく攻撃されたが、堂々と、これと素手で争ふ力は、残念ながら未だ備はつてゐなかつた。その力が備はる迄は、之を保護して育て上げねばならぬ。その爲には、英國工業品の輸入價格を高めねばならぬ。それには、關稅を賦課せよ、といふ議論である。今日から考へれば、解り切つた議論である。が、英國經濟學が支配的勢力を振つてゐた時代としては、良く獨逸工業の地位を認識した卓見であつたと云へる。併し、注意すべきことは、リストは根本に於ては自由主義

者であつた。保護關稅論にしても、現代の關稅論者のやうに、高率で永久的な關稅をかけよと、主張するのではなく、獨逸工業の發達に必要な程度の高さの關稅を、必要な期間だけ賦課しようといふのである。それで、この關稅の力で、工業が十分進歩し、外國品とも立派に競争出来るやうになれば、關稅は撤廢しよう、といふ主張であつた。リストは、保護關稅論の元祖と考へられてゐるが、元來は、今も云ふ通り、自由主義者で、チウビンゲン大學教授時代には、自由主義色彩の強かつたワゲンハイム内閣の黒幕として、盛に活動したし、フランクフルト・アン・マインの商人達の依頼に應じて、内地關稅撤廢請願書も起草し、進んで、その目的貫徹に努力を惜しまなかつた。この内地關稅は、小邦に分裂してゐた當時のドイツにとつては、頗る厄介なもので、同じドイツでありながら、領土の違ふ場所へ運ばれる物品には、稅が課せられ、商工業の發達を妨げることも多大であつた。この弊害を除いて、交易を自由にしようと目論んだのが、内地關稅撤廢運動である。それ故、ある意味では、それは、自由主義運動でもあつた。これが、反動内閣の忌諱に觸れて、リストは大學をやめ、後に安寧秩序紊亂のかどで、禁錮十ヶ月に處せられ、アメリカへと逃亡したのである。滯米中に、心境變化を來し、自由主義を捨て、保護主義に轉向した。當時、アメリカにも工業が發達し始めてゐたが、これまた英國工業には敵し難かつたので、アメリカは保護主義を採用してゐた。恐らく、この事が、リストの思想的轉向の重要な原因となつたのであらう。

斯うしてリストは、ロマンチカア的思想を背景とし、自由主義から保護主義、國民主義に轉じたが、こ、

に注意せねばならぬのは、ロマンチカアの思想でリストに受継がれた部分は、その國民主義的要素であつて、經濟思想ではなかつたといふ點だ。經濟思想の上では、ロマンチカアのそれと、リストのそれとの間には、非常な差があつた。ロマンチカアの經濟思想は農業中心であつたが、リストは工業中心であつた。ロマンチカアは衰へ行く封建的農業の悲痛な代辯者であつたが、リストは勃興し來つた工業階級の利益擁護者であつた。だからこそ、リストの保護主義は、工業に限られてゐたのである。ロマンチカアの夢は、遠い昔を彷彿たけれども、リストの理想は、大工業國家の建設に在つた。

六 ロッシア

經濟學上の歴史主義は、リストの力で、大きく一步を踏み出した。しかしながら、リストは、元來、純粹な學問研究よりも、實際政策の方面で活動したので、歴史主義を一個の獨立した學問體系に作り上げるまでには至らなかつた。その仕事を成就したのは、ヅキルヘルム・ロツシア (Wilhelm Roscher) カール・クニース (Karl Knies) ブルノー・ヒルデブランド (Bruno Hildebrandt) の三人だ。この三人は、後に新歴史學派が生れるやうになつてからは、舊歴史學派と呼ばれはしたが、ドイツ歴史派經濟學創始者としての榮冠は、この三人の頭上に輝くべきものである。

先づ、ロツシアから始めよう。此の人は讀書量の多い點では、經濟學者三人物中の一人に數へられる人だ。それも單に有名な本ばかりでなく、名も知れなかつたやうなさまざまの書物まで讀破してゐる。ロツシアに依つて、世の中に紹介された書物は甚だ多い。この人の「經濟學原論」を讀むと、開卷第一頁に、「經濟學は人間に始り人間に終る。」と、書いてある。

英國經濟學者の中には、經濟學は「富」を研究する學問であると、説いたものが多いが、ロツシアの意見に依れば、それは大きな間違ひである。「富」は人間あつてこそ、始めて、富なので中心はどこまでも人間である。それ故、經濟學も、結局、人間研究の學問だといふのである。人間研究と申しても、意味は廣いが、經濟學は心理學や生理學の様に、人間を研究するのではなく、政治科學の一部門として、人間を研究するのである。ところが、政治科學の内容は、國家、法律及び經濟が中心である。然もこの三者は、互に密接な關係に在るのだから、經濟だけを切離すことは出來ない。従つて、經濟研究のためには、一國の歴史や、種々の法則などを併せて研究して行かねばならぬ。換言すれば、經濟學は英吉利經濟學派のやうに、經濟生活だけを切離して、獨立に研究すべきではなく、廣い社會生活の一面としてこれを研究するのが正しいと主張したのである。

この主張を要約すれば、ロツシアは、英吉利經濟學派に較べると、經濟學の範圍を非常に擴大したといふ結果になる。範圍が擴大されて、歴史や法則などまで入るとすれば、利己的動機だけによつて動く「經濟人」

(Economian) を假定して、人間の經濟活動は全く利己心が中心であるといふ前提から、徒らに抽象的に議論を試みたところで、始まらない。もつと具體的に、現實的に研究しなければならぬ。そこで、ロシアは「歴史的研究方法」の必要を聲高く唱へたのである。「歴史的方法」と云つても、歴史の研究といふ狭い意味のものではない。歴史研究も勿論含まれるが、凡そ經濟生活に大きな影響を及ぼす一切の具體的な事實の研究、といふ意味である。ロシアが歴史學派の創設者と呼ばれるのは、このやうな研究方法の主張者だつたからだ。

但し、ロシアは、決して、抽象的研究法を全然排斥して了つたのではない。それはそれで、用ひる場所があると考へた。では、どんな場所で用ひられるか？

現在の人間經濟生活は、過去の歴史的發達の結果である。しかし、その歴史の力の中には、時代や場所、即ち、時と處との如何に左右されない部分がある。例へば、欲望の強さは、満たされて行くに従つて減ずるといふことなどは、古代人でも近代人でも、將また、白人でも黒人でも、同じことである。かうした事柄を研究するには、歴史的方法では駄目だ。何故ならば、それは歴史とは關係ない部分だからである。従つて、經濟學は抽象的方法と歴史的方法との、二つの方法で研究して行くべきものだ。これが、ロシアの考へ方であつた。

たゞ、こゝで一つ問題になることがある。歴史は、云ふ迄もなく、時と處によつて異り、國や人種の差異によつても違ふ。だから、それを研究しても、各國に當嵌まるやうな、普遍妥當な經濟法則を發見することは出来ないのではなからうか、といふことである。これに對して、ロシアは、各國民の歴史的發達の徑路には、同じやうな部分があるから、その部分を取れば、それが、一つの法則となり得ると、教へてゐる。以上、ロシアの學說の概要である。これによつて見ると、彼の立場は、英國流の抽象的な方法に、歴史的研究を加へ、そして、一般的な法則を發見しようとしたわけだ。この立場は、穩健な立場ではある。それだけに、眞の歴史主義からみれば、不徹底の誹はまぬかれない。

七 ヒルデブランド

次に、ブルノー・ヒルデブランドの學說を紹介しよう。

ヒルデブランドの著述で、その經濟學上の立場を知るに好都合なのは、一八六三年の「コンラッド年報」に掲載された「現代に於ける經濟學の任務」(Die gegenwärtige Aufgabe der Wissenschaft der Nationalökonomie) と題する論文と、一八四八年に出版された「現在及將來の經濟學」(Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft) 第一卷である。第二卷は遂に世に出なかつた。彼の歴史主義は、この二つの著述の中に現はれてゐる。

ヒルデブラントは、英國經濟學を批判して、次のやうに書いてゐる。

——英國の經濟學者達は、國民經濟は、人間と物質財との關係に基礎を置くものと考へ、國民經濟の法則は、時間と空間との關係のないもので、現象が種々に變化しても、法則は不變不動と思ひ込んでゐる。併しながら、社會人としての人間は、常に文明の兒であり、歴史の産物である。人間の欲望、教養、物質財及び人間と法則との關係は、決して一定不變のものではなく、却つて、地理的にも、歴史的にも、變化し、人類の全文化と共に進歩するものである。英國の經濟學者はこのことを忘れてゐる、——と。

この言葉に依つて、ヒルデブラントが、歴史主義の立場に立つてゐることは明かだ。

併し、如何にヒルデブラントが歴史主義を奉ずるとは云へ、自然が人間の經濟生活に影響を持つてゐることまでを否定は出来ない。ヒルデブラントも、自然と、自然を支配する不變な法則が、汎ての方面で、經濟發展の限界を定めることは認めてゐる。だが、同時に、さうでない點もあると主張する。例へば、利己心は人間が生ねながらに持つてゐる性質ではあるが、さりとて、經濟行爲が利己心からばかり營まれてゐるとは限らない。寧ろ、總ての時代を通じて、道德的な動機、即ち宗教、國民道德、法律など、社會的なもの、歴史的なもの、力で、經濟行爲が決定されてゐる點が多いことを認めてゐる。

既に、人間の經濟生活が歴史的社會的なものだ、と考へるからには、經濟法則なるものが、自然界の法則とは違ふものであり、従つて、之を研究する方法も、違つて來なければならぬのは、當然である。ヒルデブラ

ントは書いてゐる……。

經濟學は自然科学のやうに、自然法則に關するものではない。國民經濟の變轉の中での進歩發展、即ち、人類經濟生活の完成を示すものである。その任務は、個々の民族並に全人類の經濟的發展の徑路を、階段的に研究し、この方法によつて、現代の經濟的文化の基礎や組織を知り、それから生れる多くの課題を認識することにある、……と。

斯うした見解から、彼も亦リストと同じく經濟階段説を打建てた。但し、階段をつける原理は異つてゐる。リストは生産の形態に従つて階段を設けたが、ヒルデブラントは、財の交換、即ち財の流通に原理を求めて、自然經濟、貨幣經濟、信用經濟の三階段を區別したのであつた。

八 カール・クニース

英吉利流の經濟學を爆撃して、ドイツ歴史學派の經濟學を樹立した人物の第三はカール・クニースである。歴史的方法の學問的建設といふ點から見れば、この人が最もしつかりしてゐる。その主著は「歴史的方法の立場から見たる經濟學」(Die politischen Oekonomie von Standpunkte der geschichtlichen Methode, 1853) 其後一八八三年に之を改訂して「歴史の立場よりする經濟學」(Die politische Oekonomie von Standpunkte

der Geschichte 1883) を出版した。此處では、この本を繕いて、クニースの主張を、簡略に述べよう。

経済学は種々の科学の中で、どんな地位に立つものであるか？

先づ、クニースは、この問題から始める。當時は、一切の科学を二つに分けて、精神科学 (moral science) と自然科学 (natural science) と區別したものである。クニースはこの外に、更に歴史科学 (Historical Science) といふものを認めた。社会学や國家学はこの歴史科学に属するもので、経済学は、その社会学の一部をなすものである。従つて、當然、歴史科学の部類に入るものだと、考へた。

それでは、何故、経済学は、社会学の一部なのであらうか？

クニースの意見によれば、社会生活なるものは、單に、さまざまな生活が雜然と集められたものではない。それは、経済生活、法律生活、宗教生活、藝術生活などが、渾然として調和あり、統一のある一體となつたものである。従つて、それらの諸生活は、互に密接な關係を持ち、互に影響を及ぼし合つてゐる。社会学は之を研究するものである。従つて、経済学は社会学の一部だ。それで、経済学は孤立して存在することは出来ない。法学、政治学、哲学等の諸科学と密接不離の關係を保ちながら、發展して行くものである。されば、英國経済学のやうに、経済生活だけを、他の生活から切離して論ずることは、全く誤りである。人間の實際生活の眞の姿を明かにしようと思ふならば、かうした抽象的な研究方法は、避けなければならぬ。

そればかりではない。英國経済学は経済生活の發展性を考へてゐない。彼等は或一つの経済生活の型 (實

際には當時の英國経済生活) を想定し、その型の中で、起つて来るであらう現象だけを、取上げて論じ、その型自身が、變化し發展して行くことを、少しも考慮してゐない。これは誤りだ。國民の経済生活は、瞬時も止まることなく發展する。それだから、英國學派式の考へ方では、到底、眞理を掴むことは出来ない。より歴史的な見地から、研究をせねばならない。

これがクニースの歴史主義的見解の大略である。先づ、尤もな學說であると云へやう。

以上、述べた處によつて、クニースが歴史主義者である事は明かとなつた。扱て、この歴史主義の立場に立つといふことは、總てのものを絶對的な、不變的なものと考へず、變化するもの、相對的なものと考へる考へ方である。例へば、正統學派は私有財産と利己心を前提とし、之を永久に變らないものと考へる。ところが、クニースの考へでは、これらのものは、過去の歴史の結果として現在の世の中に現れ、且つ變化して來たものである。従つて、將來に於ても歴史と共に變化するものである。私有財産制や利己心ばかりではない。社会のことすべては、皆さうである。それならば、経済学の法則も絶對的永久的なものでないのは當り前だ。時代により、國により、變化するのが當然なので、時と所とを問はず、當嵌まる法則などを、見つけ出さうとするのは無理である。

それでは経済法則は、國と時代によつて、全然！ 異なるものであらうか？ 若しさうならば、これは経済法則といふやうなものは存在しないと、主張するに等しい。そこまでは、流石のクニースも極端に走つてゐ

ない。各國民の經濟的生活の間に、自然的な要素や人的な要素について、共通な部分がある限り、矢張り、共通な現象も生れ、共通な法則も認められる。併し、それは、厳格な意味で法則と名付けられる程のものでなく、一定の「類似」である。換言すれば、軽い意味の法則である。そうしたものはあり得るわけだ。では、どうして經濟法則は嚴格な法則となることが出来ないであらうか？

それは經濟生活の中には、人間の精神活動が含まれるからである。經濟は人と物との關係である。物質界には正確な自然法則が君臨してゐるが、人格の世界、精神の世界には、かうした法則の支配は無い。そこには、人間の自由が働く。従つて、物理法則や化學法則のやうに、正確な法則は、經濟學には在り得ないのである。

以上、説明が少しく難しくなつた。これを、つきつめ、そして、碎いて申せば、經濟生活には極く大づかみな類似性はあるが、細かい嚴密な法則はない、といふことである。そして、この大掴みな類似性を、長い期間に亘つて考へて見ると、これが「經濟發展の法則」となつて現れて來るのである。經濟學の任務は、これを見出すことだ……。クニースはこのやうに、説いたのである。

要するに、舊歴史派の使命は、英國に對抗して、大工業ドイツを作る必要から、英國經濟學と、その嫡子である自由主義とを、打破らうとするところにあつた。

やがて獨逸工業の發達と共に、所謂近代的社會問題が発生し、強烈な社會運動が捲起つて來た。そのとき、

矢張り同じ歴史主義の武器を把つて、之を防がうとしたのが、新歴史學派である。舊歴史派によつて對外關争の武器として用ひられたものが、今度は、國內關争鎮壓の武器として用ひられることゝなるのである。

果して、それは、どんな風に用ひられたであらうか？

第十章 新歴史派と社會政策學派

一 「舊」から「新」へ

前章ではドイツ舊歴史學派を述べた。本章には新歴史派を書かう……。

國民主義經濟學！ 現代にとつて誠に魅力ある經濟學だ。が、これは前章に説明したやうに、ドイツ工業の勃興によつて生れた思想だ。その最初の表はれであるロマンチカアは、工業進歩に伴ふ營利主義の横行を憂へて、舊い田園經濟の牧歌調に、限らない愛惜を感じた。當然、その主張も復古的な經濟思想だつた。

併し、經濟的發展の車輪は、一切の感傷を踏みにちつて、冷たい軌道をまつしぐらに進んで行く。牧歌のメロデーは如何に和やかで楽しくとも、所詮は唄聲に過ぎない。ローマン派の嘆きをよそに、ドイツ資本主義は發達の一途を辿つた。が、そこで先進の英國工業と戦はざるを得ない破目となつた。この對英工業戰の

思想的側面、それが舊歴史派經濟學であつた。

英國工業の思想的武器である正統派經濟學のキイポイントは、自由貿易論と經濟學の超國民性であつた。歴史學派は、之に對して、保護主義と國民主義經濟學とを振かざして立向つたのであつた。その一段と進んだものが、「新」歴史學派なのである。

二 見失はれた理論

舊歴史派が主張した經濟學の國民性！

それを掘下げて行つたら、どういふことになるであらうか？

英國には英國の經濟學が、獨逸には獨逸の經濟學が、日本には日本の經濟學があるといふ理窟は、同じ英國でもスコットランドにはスコットランドの經濟學があり、東部ドイツにも西部ドイツにも、九州にも東北にも、夫々の經濟學があるといふことに歸着するのではあるまいか。この考へ方は、必ずしも、全面的に否定される筈のものではあるまい。例へば、農業經濟を論ずる場合、山形縣に當籤まる理論が、そのまゝ、福岡縣には通用しない。事實を細かく調べて行けば、行くほど、各地各様の相違は目立つてくるのである。場所の差ばかりではない。時間的な違ひにしても同様だ。徳川時代と昭和の御代とは、經濟生活が丸つ

切り違つてゐることは、誰にもわかる。場所の差を横の差、時間的の差を縦の差と考へれば、經濟生活には縦横の差があるわけだ。或る程度まで、この差を考慮に入れなければ、實際に役立つ理論は編出せない。さりとて、之を強調しすぎても、矢張り正しい理論は出て來ない。理論といふものは、多數の事實に基いて作り出されるのだが、事實といふものには、その事實に特有な性質と、同様な他の事實にも共通する性質との二つがある。例へば、一口に「花」と云つても千差萬別だ。が、しかし、同時に、花に共通な性質もある。之を捉へて「花」と一口に呼ぶわけだ。理論も亦さうである。經濟上の個々の事實の特有性を、一時お預けとして、共通點を擱んで一つの經濟理論が作り出される。それ故餘り強く「個々に特有なもの」を主張し、之に囚れるならば、理論は編出せない。歴史派は一様にこの弊害に陥つてゐたが、新歴史派は一層それが甚しい。

新理論が出来なかつたといふ點では、新歴史學派も舊歴史學派も同一である。たゞ、舊歴史學派の方は、その仕事、主として英國正統學派の學說批判であつて、謂はゞ消極的な任務であつた。ところが、新歴史學派の態度は積極的だつた。新理論建設の爲と稱して、經濟上の細かい事實を、非常に多く研究したが、新理論は一向につくられない。その上に、前々章でも述べた通り、總帥グスタフ・シユモラーが塙太利學派と猛烈な論争を行つたことも、新歴史派の「無理論」を強く世人に印象させる結果となつた。その理由は、塙太利學派は歴史學派とは正反對で、歴史研究は全く行はず、人間の心理に關する一、二の事實を基礎として、限界効用理論なる學說を、立派に作り上げたからである。元來、理論を作るには事實や歴史の研究だけでは

駄目なのだ。或る程度、抽象的に考へなければならぬ。理論といふものは、謂はゞ洋服の型の様なもので、一つ一つのズボンの長さや太さは違つても、ラツパ型、セーラー型といふ型はある。若し、少しでも長さや太さが違へば、それは別の型だと云つて了へば、ラツパ型といふ型があるとは言へなくなる。商品の値段は需給關係で騰落するといふ理論は、誰でも知つてゐるが、個々の商品の騰落工合はそれ／＼違ふ。いや、場合によつては、一見して、需給關係と値段の騰落とが、喰違ふやうに見えることさへある。例へば、供給が増加すれば、値段は下る筈なのだが、必ずしもそれが表面に現はれるとは限らない。若し強いインフレーションが、同時に作用する場合には、下る筈の値段が却つてダン／＼騰貴するであらう。だから、値段が下るといふのは、他に之を妨げる事情がない場合のことである。つまり、さうした假定が設けられ、その假定の下で始めて價格理論は成立する。價格理論に限らない。總ての理論がさうなのである。術語で云へば、「他の事情にして等しければ」(Other things being equal)との假定は、理論には付き物である。ところが、實際には、他の事情が等しいことは滅多にない。従つて、理論は總て假定的、抽象的なものである。それを、新歴史學派、特にシユモラーは、何處までも現實的な理論を作らうとした。だから理論が出来なかつたのだ。尤もシユモラーとて、現實的研究ばかりを主張したのではない。抽象的方法をも併せ用ひるの必要を説いてはゐる。併し、それは主として塙太利學派との論争後であり、且つ實際に之を用ひたのは極く僅かで、殆んど現實的研究法に終始したのであつた。その代り、新歴史派は經濟史の研究に幾多の功績を遺してゐる。

この點が、舊歴史派との研究分野の差だつたと言へるだらう。

三 倫理の尊重

英國正統學派の特徴の一つは、經濟生活があるが儘に觀ることである。物理學者が物體をみるやうに經濟界を眺めることである。言葉を換へれば、善惡の見地から見ないといふことである。勿論、正統學派と雖も、社會の道德が經濟生活に影響を及ぼす點を否定したのではない。けれども、實際に於ては、その影響を輕微なものと考えたし、假令、影響を及ぼすにしても、純經濟學の立場からは、その影響を單に影響として考へるだけで、別段、それに對して善惡の判斷は下さないのである。

新歴史學派はその反對であつた。彼等は、經濟と倫理との間に深い關係を認める。この傾向は舊歴史派にもあつた。新歴史派となると、特に強調されてゐる。いや、歴史派に限らず、ロマンチカアを始め、ドイツ經濟學は、一樣に倫理的色彩を帯びてゐる。これは、ドイツが、ドイツ國家の統一と建設といふ大目標を持つてゐたからである。何故なら、利己心は團體主義の倫理原則とは成り得ないからである。併し特に新歴史派の人々によつて、倫理性が強調されたのは、それ丈の理由が別にあつたからだ。それは當時のドイツの社會經濟事情と、それから生れた新歴史派の立場とに起因するものだ。その事情と立場とは、一體、どのやうなものであつたか？

四 ドイツ資本主義の進行

事情の一つは、ドイツ資本主義の發展であつた。少し説明しよう……。

昔風の手工業時代から、近代的の機械工業時代に移ることが産業革命だが、それには凡そ次の段階がある。

第一は、纖維工業部門を中心とする輕工業段階。

第二は、鐵及鐵鋼部門を樞軸とする重工業段階。

ドイツ資本主義も御多分に洩れず、纖維工業部門からスタートしたが、一八七〇年代に入ると、工業の重心が、鐵と石炭とに置換へられた。この時代から以後、ドイツ資本主義の發達は急速度を加へ、その發展のテンポは英國を超越したのである。

資本主義が發達するには、常に近代的な統一國家の存在が必要である。且つまた、資本主義の發達と共に、近代國家の出現も可能となるものである。ドイツの統一運動も、かうした資本主義と國家組織との關係から生れたのである。但し、ドイツが之を完成する爲には、二つの戦争を戦はねばならぬ運命に在つた。普墺戦争と普佛戦争がこれだつた。前者はドイツ聯邦内に於ける覇權争ひであり、後者は外部からの妨礙者に對

する反撃であつた。當時、ドイツ聯邦の中で、最も強大であつたのはプロシヤとオーストリーとで、この二つが互に爭覇の潮時を狙つてゐた。プロシヤが勝つことは、その經濟的優越性からみて、明白であつたけれども、オーストリーは絶えずプロシヤの覇權確立工作に妨碍を加へて來た。そこで、遂に一八六六年、プロシヤは對オーストリー戰の火ぶたを切り、ウキンを攻略して支配的地位を確保した。これで、内部的には、事件は一應解決したが、今後は、フランスといふ外部からの妨碍を排除せねばなくなり、一八七〇—七一年の普佛戰爭となつた。この戰爭は、プロシヤの大捷に歸し、一月十八日敵國ヴェルサイユ宮殿で、ドイツ帝國建設の宣言は發せられた。茲にドイツ統一の大業は完成されたのだ。大業完成の立役者は、一八六二年プロシヤ宰相に就任したオットー・ビスマルクであつた。後年、このビスマルクでさへ閉口したほどの問題が起つたが、それは後で述べることにして、この統一完成によつて、ドイツ資本主義が決定的な進歩の地盤を獲得したことは事實である。それは、賠償金として五十億フランの資金とアルサス・ローレンの産鐵地帯を獲得したからである。

普佛戰爭の後、ドイツ資本主義の發展は、黄河の氾濫したやうな勢を以て進行した。人口分布からみれば農村人口率の減少と都會集中、株式會社の急増（會社創立數、一八〇一年から七〇年迄に四百五十四であつたものが、一八七一年—一八〇年の十年間には、一千三百六十三に上つた）鐵道網の發達（一八七〇年迄に一八、五六〇軒であつたものが一八八〇年には三三、八六五軒）などは實に目ざましく、その結果、生産物

量の増大も驚く可きものがあつた。例へば……。

	石	炭	鐵	道
一八六〇年	一五、六〇〇千噸	六五〇千噸		
一八七〇年	二六、四〇〇千噸	一、三五〇千噸		

この輝かしい繁榮と並行して、ドイツ工業階級の勢力は爆發的に増大して來た。株式會社の發展で、いよいよ益々大資本の勢力が強大となる。そのために、中小資本家は非常な壓迫を受けねばならないことになつた。併し、中産階級の壓迫はこれだけではなかつた。下の方から、も一つの大きな壓力で脅かされた。それは、無産階級運動の發達だつた。

これが新歴史學派の經濟學が、倫理性を強調した第二の事情である。

五 社會黨鎮壓法案

今日、わが國で行はれてゐる治安維持法の前身たる過激社會運動取締法案が提案された時、ある方面に反對運動の渦が捲起つた。反對論者の主張は、之を以てビスマルクの社會黨鎮壓法案に比すべき惡法だといふのであつた。今日では、こんな主張は問題にもならぬが、その頃は、社會黨鎮壓法は民衆強壓法の典型だと

考へてゐた者もあつた。この法案は、一八七八年に出来たもので、時恰も新歴史派の黄金時代であつた。ビスマルクは何故この法案を出さねばならなかつたか？ その事情は、新歴史派興隆の事情そのものなのだ。一通り説明しておかう。

近代的意味を持つ社會主義、即ち無産階級解放の哲學としての社會主義は、資本主義の庶子であると言はれる。このことはドイツにも當筈まる。初めてドイツで社會主義の宣傳が行はれたのは、資本主義が侵入した後で、一八一八年であつた。それは青年官吏ルドウキヒ・ガル (Ludwig Gall) の手によつてゐる。ガルの仕事は、主として、思想的宣傳であつた。これは彼の意志ではなかつたが、結社も許されず、資金も得られなかつた爲に、結果としてさうなつて了つたのだ。ガルの運動の末期ごろ、ゲオルヒ・ビュヒナー (Georg Büchner) を中心とする秘密結社運動が起り、政治上の急進主義と結びついたために、運動は次第に急速となつて來た。この運動は官憲の彈壓や、農民の氣乗薄などで、奏效せず、同志は重刑に處せられた。

其後、數多くの秘密結社や合法團體が、或はパリで、或はドイツ國內で作られた。「ドイツ人民同盟」「ドイツ被追放者同盟」「若きドイツ」「人權協會」等々の團體が、結成され、各種の出版物も刊行された。併し、これらの諸團體の傾向は、決して一樣ではなかつた。極左もあれば、民主々義もあつた。さうかと思へば、共和主義もあるといふ状態であつた。

これらの諸團體が、起つたり、潰れたりしてゐる間に、パリにゐたドイツ労働者の思想は左傾し始め、遂

に一八三六年「共產主義者同盟」が作られるに至つて、全く極左と轉向したのであつた。この團體を有名にしたのはウキルヘルム・ワイトリング (Wilhelm Weitling) といふ若い仕立職人であつた。彼は一八〇一年、マクデブルヒに生れ、労働者の私生兒として、殆んどありとあらゆる辛酸を嘗め盡した人間であつた。

少し話が難しくなるが、昔から哲學には二つの流があつて、常に争つて來てゐる。その一つは唯物主義であり、他は觀念主義又は理想主義と呼ばれる。唯物主義によれば、精神は物質によつて支配されるといふし、觀念主義者は、その正反對であると主張する。尤も、これは、少し極端な表現方法で、唯物主義とても、精神の力を認めるのではあるが、根本的には、物質的なものによつて支配されると考へる。觀念主義にしても同様なのであるが、兎も角、ワイトリング時代のドイツ哲學界は、觀念主義全盛であつた。これはヘーゲル (Hegel) といふ大哲學者が居て、この人が觀念主義の哲學者であつたからだ。このやうな一般思想界の傾向だけでなく、前に述べたやうに、ドイツの労働者運動はパリと深い關聯があり、フランスは空想的社會主義の温床であつたから、その思想的影響をも受けて、ワイトリングの觀念的社會主義が生れたのであつた。ドイツ政府も、これらの社會運動には、相當惱まされた。最も大きな衝動を與へたものは、例の一八四八年の革命騒ぎであつた。

この革命運動は失敗に終つたけれども、社會主義運動が如何に恐る可きものであるかを、ドイツの支配階級は、深く悟つたのである。同時に労働階級も、この失敗に當面して、陣營再建の必要を痛感した。幾人も

の新しい指導者達が現れた。その中で、ラッサール、シュワイツ、マルクス、リーヴクネヒトの四人が最も有力であつた。ラッサールは天才的煽動家ともいふ可き人で、一度彼が壇上に獅子吼すれば、聴衆は常に感激と昂奮の坩堝の中に投せられたさうだ。この力によつて一八六三年五月、「ドイツ一般労働者同盟」を結成し、推されてその總裁に就任したが、翌六四年八月、彼は戀愛事件の爲に決闘して犬死してしまつた。シュワイツはその後継者として「同盟」を維持した。この同盟に對立したものが、マルクスの弟子たるリーヴクネヒトであつた。一八七五年、兩者の妥協で、「ドイツ社會主義労働黨」が出来上つた。

この間、ドイツ社會主義の政治的活動は躍進的に發達し、一八七一年から七十七年迄の間に、代議士は二名から十二名に、投票數は十二萬四千票から四十九萬三千票に増加した。

これを看て心配したのがビスマルクである。一八七四年に「帝國出版法」を制定し、次いで七十八年に「社會黨鎮壓法」を出して、一舉に社會主義を叩き潰さうとした。併し、不幸にもその結果は反對になつて了つた。最も戰闘的なマルクス派が他派を壓して優勢となつて來た。流石の鐵血宰相も、一八九〇年に社會黨鎮壓法を廢止するに至つた。

六 スチルナア

こゝで少々別派ではあるが、最も特異な思想の持主であるマックス・スチルナア (Max Stirner) の事を紹介しておかう。この人は無政府主義者ではあるが、同じ無政府主義者でも、クロボトキンなどは違ひ、無産者の爲とか、どうかいふのではなく、徹底的な個人主義から出發したものだ。然もその無政府主義は、別段、彼の思想の中心などにはなつてはゐない點が興味だ。

生れは一八〇六年、生地はプロシヤの一都市バイロイト。この人はたつた一冊しか著書がない。「唯一者とその所有」(Der Einzige und sein Eigentum) がそれだ。他には小論文が少しあるだけ。四十九歳で死んでゐる。

スチルナアの思想は、先づ自己を肯定せよ、といふのが出發點だ。「野卑で狡くて淫猥な」自己を、即ち現在の自己をその儘に肯定せよ、と説く。これは、人間の生活は、どんな美辭麗句で粉飾しようとも、結局、自己本位なものだとの考へ方から來たものだ。愛と云ひ犠牲といふが、それとても、「自分」がそれを喜ばばこそである。「君は君の愛人が泣けば、泣き止むまで慰めないではゐられないであらう。どうしてか? 君が彼女を愛してゐればこそだ。チツトも愛してゐない女なんぞ、いくら泣いたつて氣にはなるまい。人類愛? では君は君が一度も見たことのないアフリカの森林の中に住んでるホットtentトットやブツシユマンに愛を感じるといふのか?」「蠣は美味だとして珍重される。それは君が蠣を美味いと感じればこそだ。」ざつとこんな筆法で、すべて「自分自身」が中心なのだ。

彼が「唯一者」といふのは、つまり「自我」のことだ。「自我」は、懸け換へのないものだ。こうした自己主義は、當然に、自由主義へと導かれる。然も彼の自由主義は徹底的である。自我の完全な自由を要求する。「制限された自由は、自由ではなくて不自由である」とさへ云つてゐる。彼の無政府主義は、このやうな個人的自由主義を、政治の上に表現したものに過ぎない。その思想は、別にドイツ社會思想史上に具體的な影響を及ぼさなかつた。亦、彼もそんなことに熱中などはしなかつた。だが、こゝまで徹底した思想を持つてゐたことは注目してよい。

併し、如何に徹底した思想であらうとも、社會の運命と結び付かない思想は、結局、單なる思想として終つてしまふ。ドイツ社會運動の濁流は、スチルナアを呑み込んで、見失はせて終つたのだ。

七 新歴史派の本領

一方には、資本家階級の興隆！

他方には、之に對立する社會運動の發展！ この板ばさみに會つたのは中産階級だ。どつちの味方にもなれない。その行くべき道があるとするれば、兩者を妥協させて、自分がその連繫の環となることだ。

新歴史學派の立場は正にこれであつた。

社會政策學會の發會式でのシユモラーの演説は、よくこの間の事情を物語つてゐる……。

「社會主義的平等化は吾々の社會的理想ではない。吾々は種々な生活上の階段的等級を持ち、しかも一階段から他の階段に、容易に移り得るやうな社會を以て、最も正常であり、健全であると考へる。然るに現在の社會は、益々上下に急速に延びて行きながら、中段は益々破壊され、最上段と最下段とだけに足場のある危険な梯子のやうなものである」と。

第一回會合は、一八七三年十月六日から、アイゼナツツで開かれた。集るもの百五十九名。舊歴史派の三巨頭ロツシヤア、ヒルデブラント、クニースの三碩學を始めとして、ワグナア、ブレンタノなど、ドイツ經濟學界、法學界の粹を網羅し得たのである。いづれも熱心な社會政策の擁護者であつた。

採上げられた具體的問題は、第一、工場法、第二、ストライキと労働組合の問題、第三に労働者住宅問題であつた。特別に決議をするとか具體的政策を決定するとかいふことはしないで、會議に於ける報告、討論を、その儘で公表した。これは驚く可き反響を呼び起し、これによつてドイツの公衆は、労働者問題に深い關心を持つやうになつた。同時にまた、政府もこれに全幅的な同意を示したのであつた。斯くて、この大會は空前の成功を収めた。この思想は吾國にも傳へられた。その影響を受けて、金井延博士の如きは、明治二十七八年の頃、東大で、頻りに社會政策思想を講述されたものである。

この思想は、當時、講壇社會主義 (Platform socialism) と呼ばれたが、社會主義ではない。社會主義なら

ば私有財産權を認めないのであるが、シュモラーは明かに「私有財産權の神聖を主張する」と述べてゐる。では、社會主義と社會政策との區別はどこにあるかといへば、社會政策は私有財産權と階級的社會とを肯定し、たゞ大衆の生活苦を緩和して、階級間の利害を出来るだけ調和しようとするのである。従つて、革命思想などは全然別物である。このドイツ社會政策を、特に「講壇」と稱したのは、主張者が殆んど大學の先生だつたからで、講壇とは教壇のことなのである。

八 その後に來たもの

社會政策思想の流れは新歴史派の巨匠ルヨ・ブレンタノ(Lujo Brentano)や、アドルフ・ヴグナー(Adolf Wagner)などに依つて承繼され、世界の經濟學界を風靡したものであつた。世界大戰後、階級闘争を主眼とするマルキシズムの興隆によつて、一時勢力を失墜したが、全體主義の擡頭で、近頃マルクス主義などは問題とならず、且つ、社會政策的施設がますます必要となつたので、最近、再び大きな勢力を得て來た。思想の流れは、まことに、永遠である。

第十一章 新抽象經濟學

一 英國の歴史學派

前章までに述べて來たやうに、ドイツ歴史學派は、經濟理論に對しては、殆んど、新しい何物をもつけ加へなかつた。が、歴史と事實を尊重せよと叫んだ事に依つて、從來の餘りにも劃一的で抽象的な英國流の經濟學に、一大衝擊を與へたことは事實である。

たゞ、不幸と云へば不幸、その主張が、甚しく極端に走り、新歴史派は、稍々ともすれば經濟理論の存在を否定するかのやうな口吻をさへ洩らすに至つたので、「限界効用學派」の創始者カール・メンガー(本書第八章參照)の手厳しい一撃を喰ひはした。併し、歴史主義の主張が、抽象經濟學に反省の機會を與へた功績は大きい。

その證據には、抽象經濟學の天國——イギリスに於てきへ、歴史學派が續々と現れた。ソーロルド・ロー
ジャース、ウォルター・バジヨット、アーノルド・トインビー(有名な「第十八世紀に於ける英國産業革命」
の著者)、ジェー・ケー・イングラム(日本でも多く讀まれた「經濟學史」の著者)クリップ・レスライなど
の學者が輩出し、就中、イングラムとレスライの二人は、英國歴史學派の曉將であつた。更にトーマス・ツ
ーリの龍大な「物價史」などが現れた。これは、一面に於ては、ドイツ歴史學派やフランスの社會學祖オー
ギュスト・コント(August Comte)——この人も歴史的傾向の強い人であつた——の學問に影響されたので
はあるが、何と云つても、それ以上に、英國の經濟事情から來た影響が大きかつた。

本書の第七章「恐慌の經濟學」の中で、第十九世紀に入ると同時に、英國が頻々と經濟恐慌に襲はれ、そ
の都度、多數の失業者が街頭に投げ出された事情を説明したが、その後、恐慌の有無に拘らず、貧しい勞働
階級は益々増加するばかりなので、自由主義經濟學が説いた經濟的樂園は、全く白日の夢と化し去つた。そ
こで、これに對する批判として、英國にも歴史學派が擡頭すること、なつたのである。

その批判は、トインビーも云つてゐるやうに、先づ、勞働問題から起つて來た。昂まり行く勞働階級の生
活苦と不満とを前にして、自由主義經濟學は、何等の爲す術を知らなかつた。全く、「爲すに委せよ! 往く
に委せよ!」の有様だつたのだ。經濟學のやうに、人間の生活にとつて、最も身近な、そして、最も重要な
部面を取扱ふ學問が、新しく起つて來た大きな經濟問題に當面して、全く爲す處を知らぬといふのでは、經

濟學そのものに對して從來とは異つた立場から、批判が起つて來るのは當然のことである。

二 「經濟人」と「平均人」

そこで、英國の歴史學派が、採り上げた理論的な問題の一つは、「經濟人」(Economic Man)といふ觀念の
再吟味である。

經濟人とは、一から十まで、すべて經濟的原則に従つて行動する人間である。しかし、經濟的原則とは最
少の費用を以て最大の利益を得ようとするものである。従つて、これは經濟生活にのみ限つたことではなく、
廣く人間行動のすべてを支配する原則である。銀座の交叉點を斜に突切らうとするのも、この原則の一つの
現れなので、經濟生活の部面に於て、これが最も著しく現れるところから、經濟的原則と名付けられたに過
ぎない。正統學派の經濟學者は、この原則を「利己心」で説明した。凡そ人間であるからには、金にせよ、
勞力にせよ、成る可く少く支出したい、その反面、利益は少しでも多く得たいと考へるのは當り前である。
これは、決して間違ひではない。が、舊い抽象經濟學は、恰も人間がこのやうな原則、このやうな動機だけ
で行動するかの如く説いた。そこに誤りがあつた。突込んでその言分を聞けば、必ずしもさうとばかり考へ
たのでもないが、兎に角、左様な印象を世間一般の人々に與へるやうな説明をしたのである。だから、猛烈

な批判が起つた。例へば、先ほど擧げたクリップ・レスライなどは、斯う云つてゐる――。

人間が金を貯める場合を考へて見ても、必ずしも自分の爲ばかりとは限らない。愛兒や親友の爲に貯蓄することもある。愛國心に燃えて、公債を買はうとしてお金を積んでゐる人もある。物を買ふにしても同様である。だから、**「經濟人」**なるものは、實は全く架空の觀念である。従つて、これを基礎とする抽象經濟學も、亦、甚しく非現實的なものだ――と、これがレスライの主張だ。

この主張に對して、正統學派の學者は反駁した。――成程人間は愛他的精神を持つ者だ。この愛他的精神から貯金や買物をする事はある。しかし、その場合でも、成る可く利息の高い處へ預け、なるべく安い店で買はうとはする。だから、愛他的精神と經濟原則とは、決して矛盾しない。従つて、經濟原則によつて行動する「經濟人」の觀念は、必ずしも誤つてはゐない」と反駁したのである。

この辯明は或は正しいかも知れぬ。併し、實際問題としては、人間は一々經濟的原則に従つて行動するものではない。時には、全く之に矛盾する行爲も敢へてするのである。例へば、文房具屋が二軒並んでゐて、一方の店は少し値段が高いとする。經濟原則からすれば、御客は、文句なしに、全部安い方の店にばかり集中する理窟だ。が、若し高い方の店には綺麗な看板娘が居て、町重に應對し、安い方の店番は無愛想な、感じの悪い子僧だとすれば、果して、どちらの店が繁昌するかわからないのである。休暇を利用した學生の行商から、品物を買ふのも、何か寛大な氣持からであらう。併し、何と云つても、これらは特殊な場合である

ことは争へない。百回千回の經濟的行爲の中に、ほんの二、三回、例外的に、混る位なものだとは云へる。少くとも普通の人間は、一般的には經濟原則に従つて行動する。但だ、經濟學は、この普通人の極めて普通な行動を研究するものだから、「經濟人」など、云はなくともい、筈だ。それでは何と呼ぶか？

平均的な人間と云へばよい。

そこで、新抽象經濟學は、正統學派の「經濟人」に代つて、平均人 (Average man) の觀念を、研究の前提とすること、なつたのである。

三 「平均人」と經濟理論

それでは、經濟人と平均人とでは、どう違ふだらうか？

經濟人は全く假想の人物であるが、平均人は現に生きてゐる人間達である。そこで經濟人を前提にしたのと、平均人を前提にしたのとでは、經濟理論の上に、どんな差が出て來たであらうか？

「經濟人」にしても「平均人」にしても、根本は經濟原則によつて行動する人間なのだから、根本の理論が正反對になつたりすることはない。要は經濟理論といふものは、舊い抽象經濟學者達が主張したやうに、飽くまでも嚴格で、融通性の無いものではないと考へられるやうになつた。

融通の利く理論……。

馬鹿なことを！ そんなものは理論ではない。苟くも理論といふからには、嚴密な萬古不易のものでなくてはならぬ、といはれる人があつたとしたら、それは却つて理論といふものを知らないのである。

凡そ科學の法則とか理論とかには、二通りの種類がある。物理學や化學や天文學などの法則、理論は實に精確である。何十年も先に現れる彗星の日時分秒まで、前以て正確にわかるのだから、全く恐ろしいほどである。それといふのも天文學の理論が精密だからである。經濟學の理論では、とても、こんな風にはいかない。例へば、來月十五日なら十五日の新東株の値段などが、前以て正確にわかるものなら、株はどうまいものはない。が、實際には、さうは行かぬ。茲に問題は起る……。

何故、經濟學の理論は、そんなに不確實なのだらうか？

四 何故經濟理論は不正確か？

○ 第一に人間は自由意志を持つてゐる。

○ 第二に經濟生活には様々なものが織込まれて、複雑を極めてゐる。

○ 第三に人間の經濟知識は不十分である。

この三つの理由から、理論の不正確性が生れて来る。

第一の自由意思から説明しよう……。

前にも述べたやうに、必ずしも安い商店からばかり、品物を買はないものもある。亦、自分では經濟原則に従つて行動してゐるつもりでも、知識が不十分であるために、却つて、反對のことをしてゐる場合もある。これが、社會全體となれば、相當な數に上るから、死物を相手とする天文學のやうな譯には行かない。だが、知識の不十分はさて置いて、人間に自由意思があるとなると、そもそも一定の經濟理論なるものが成り立ち得るだらうか？

五 自由と法則

この問題に答へて、新抽象經濟學は次のやうな答案を書く……。

成程、人間は自由意思を持つてゐる。が、しかし、その自由は随分と制限された自由である。例へば、飯を何杯も喰べてゐれば、満腹感の到來は避け難く、満腹すれば、何と悶搔いても、それ以上はもう喰べられない。或は如何に精神を總動員してみても、不眠不休は十日とは續けられない。

このやうに、「自由」が制限されてゐる上に、人間は人間としての共通な、肉體的精神的要素を持つてゐる。

それで、自づと似通つた経済行動をとる。換言すれば、共通の傾向といふものがある。この傾向を捉へて、分析し説明したものが、とりもなほさず経済理論なのである。

たゞ、困つたことには、第二の理由として掲げた経済生活の複雑さの爲に、この傾向がさまざまに歪められ、時には反対のやうに見えたりする。

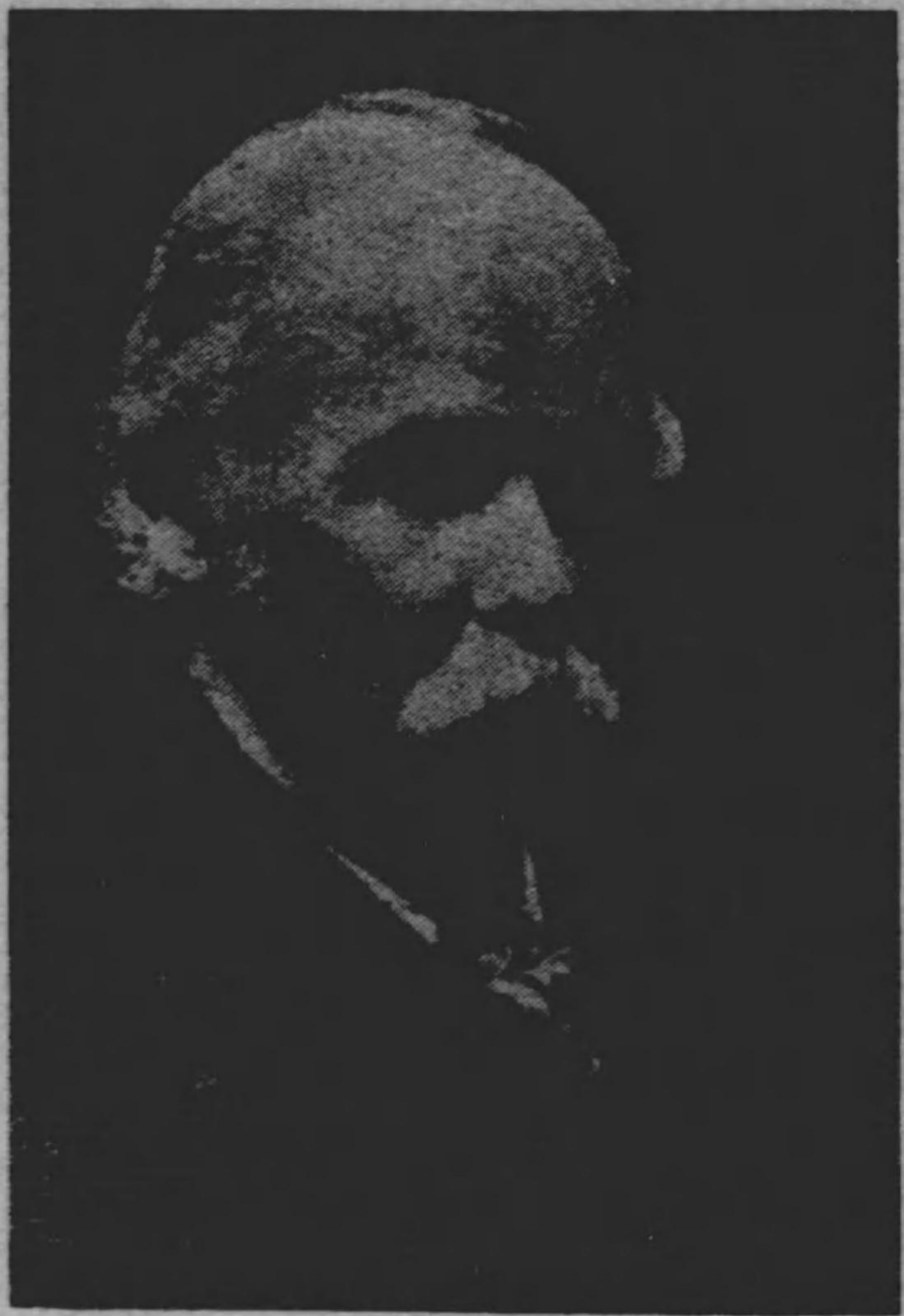
例へば我が國では、統制が強化されて以來、株界は甚だ低調である。所謂「妙味」を失つてゐた。若し日本経済だけの動向から見れば、今後益々この妙味は失はれて行く可き筈だつた。ところが、獨波開戦と聞くや、恐ろしく「妙味」が増したやうだ。新東は爆発的な高値にまで暴騰した。かうした政治的事情からばかりで無く、所謂「経済外の事情」によつて、屢々経済は動くのだ。そこで、本来ならば、現れる筈の経済傾向が現れない。それなら、経済理論などは、無いと同然かと問へば、答は否定だ。

経済理論は大いに在るのである。在るだけではない。それは、最もフルに働いてゐる。歐洲大戦——輸出増進——景氣到来！ 歐洲大戦——支那事變解決——統制緩和——景氣到来！ 株價の昂騰は、かうした二線の推理に原因してゐる。これはチト極端だが、明かに経済法則を頭に置いての推理なのだ。他に有力な事情が突發しない限り、現実経済は法則に従つて動くものであることを、實際家自身が百も二百も承認してゐるからに外ならない。

六 理論と現實と

経済人の觀念から平均人の觀念へと轉じたことは、新抽象経済学が、リカルドオなどの舊抽象派に比べて、現實へ大きく一步近づいたことを意味する。それは、根本の前提が、現實により近いものとなつたからである。併し現實への接近はこれだけではない。一つの事實から次の事實へ移る期間、即ち過渡期に於ける事實に注意するようになつたことも、同じ傾向の現れである。これだけでは説明が抽象的で、了解し難いかも知れない。一例を引用しよう……。

舊抽象派の總帥デヴィッド・リカルドオは、機械が労働者を驅逐するかどうかとの問題に就いて、一時は驅逐されるが、やがて機械そのもの、生産のために労働の需要が生れるから、驅逐された労働者は再び之に吸収される。従つて、失業は一時的の出來事だと、説いた。この見解の缺點は、第一に労働者の種類と労働需要の種類とを全然考慮しないで、萬事一色に見做してゐること。第二に驅逐される労働者數と吸収される労働者數とを、大體、等しいと考へてゐることである。舊抽象派の主張には何等の現實的基礎付けが無い。勝手にさう定めたゞけの話である。このやうな非現實的な抽象に代へて、新抽象派はその間の細かい現實に目を向け、假りに結局はリカルドオの説くやうになるにしても、その間様々な事態の生れる事を肯定し、研



第十一圖マーシャル

究しようとしたものである。
 それならば、その學風は非常に現實的であり、何も新抽象派など、名付ける必要はなさそうなるものであるが、それが大いにあるのだ。それは、この學派のすべての理論體系の裡に見出される。
 果して、それはどんなものであつたらうか？

七 價格の理論

新抽象派の泰斗は、英國のアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) 教授である。ケンブリッジ大學の教授であつたが、十數年前に物故した。その主著「經濟學原理」(Principles of Economics) は抽象經濟學界の最高峯と謳はれた。幾度か版を重ね、わが國でも廣く讀まれた。現在でも教授の學説は世界の各方面に行はれてゐる。原著も多く輸入されてゐるが、大塚金之助氏の粒々辛苦の結果に成る邦譯「マーシャル經濟學原理」全五卷がある。以下その大要を傳へよう……。

經濟思想史上でのマーシャルの地位を、譬へてみれば、正統學派に於けるミルのやうなものである。スミス以來の英國經濟學の傳統を根幹とし、之に歴史學派、限界効用學派などの諸説を綜合し折衷し、更に自らの獨創を加へたものが、マーシャル經濟學なのである。マーシャルは苦學力行、先づオックスフォード大學に數學と物理學を學び、後ケンブリッジに移つて、哲學、倫理學の研究に従ひ、やがて倫理學から經濟學に移つた。マーシャルは、經濟學研究の目標を人間の幸福に置くと共に、數學、物理學から出發した。彼のかうした學歴が英國經濟學の傳統と調和して、抽象的研究に重點を置かせたのである。これは、當然と云へば、誠に當然の成行であつた。

マーシャルが取扱つた最も重大な問題は、「價值」及び「價格」の問題であつた。讀者は「又か」と思はれるかも知れない。スミス以來の(實を云へばそれよりも遙か以前から)經濟學者は、歴史派のやうな無理論の經濟學は別として、孰れも、多少の差こそあれ、價值の問題を論じてゐない者はない。「最早、今日以後、價值に關しては何等の附け加ふべき餘地も無い」と、豪語したミルの言葉も、空しい一場の夢であつた。それ程に重要であり困難である價值の問題を、マーシャルは、如何にして解決しようとしたか？

マーシャル迄の英國價值學説は、凡そ二種に大別される。その一は生産費説であり、その二は限界効用説であつた。マーシャルは敢然立つて、この兩者を統合調和しようとして試みた。曰く――。

——價值が効用によつて支配されるか、生産費によつて支配されるかを論ずるのは、紙を切るのは鉄の上
及であるか、それとも下及であるかを論ずるやうなものである——。

この言葉は、マーシャルの立場を最も端的に示してゐる。併し、これだけでは、從來の需要供給學說との
間に、何等の差異もないかのやうにも見える。が、もう少し立入つて研究して見ると、大きな差を見出すこ
とが出来る。

果して、何處が違ふのであらうか？

舊い需要供給學說に依れば、需給の作用によつて決定されるものは、市場價格だけに過ぎない。市場價格
を支配するところの正常價格（又は自然價格）は、生産費（労働も入れて）か効用かによつて定まる、と説
いた。之に對し、マーシャルは生産價格と需要價格の均衡によつて正常價格は定まると説明したのである。
そこで需要價格（Demand price）と供給價格（Supply price）を説明しなければならぬ順序だが、その意
味は別段難しいものではない。

八 需要價格と供給價格

需要價格とは、買手が或品物に對し、支拂つてもよいと考へる値段である。供給價格とは生産者が賣つて

もよいと考へる値段である。

それでは、この二つの價格は何によつて決定されるか？

こゝで、彼は限界効用說と生産費說とを持出してゐる。

限界効用說に就いては、本書の第八章で詳しく述べたから、こゝでは省略する。それは、要するに、人間
が物財を尊重する度合は、その物財の存在が大きければ大きいほど、却つて低下するものだ、といふ原則を
基礎とする學說である。マーシャルはこの學說から更に一步を進め、「商品の量が多ければ多いほど、これを
買ふために支拂つてもよいと考へる金額は少なくなるものだ」と説く。もつと解り易く云へば、物が多けれ
ば、安くでなければ買はないといふのである。反對に、量が少くなれば、高くても買ふものだ（金さへあれ
ば）と、いふ。この原則に基いて需要價格は高低するのである。

他方、供給價格は生産費によつて定まる。このことは明白だが、生産費とは一體何かとの問題になると、
諸説紛々として歸一するところを知らない。例へば、リカルドオなどのやうな労働價值論者に云はせれば、
それは生産に用ひられた（又は普通に用ひられる）労働量だと主張する。併しこの場合、單純な労働と複雑
な熟練労働とを一樣には考へられない。そこで、労働量の計算問題に非常な難點がある。

其他の諸說にしても同様である。これは生産費を考へる場合に、實質的に考へるからである。そこでマー
シャルはこのやうな考へ方を避けて、（尤も、一應は實質生産費に言及はするが）生産に要する貨幣額と考へ